

美人市長牝堕ち

プロローグ

佐伯理沙のこれまでの人生は人の目からは、輝かしいサクセスストーリーの連続であった。18才で人気アイドル歌手グループのバックを務めると、見る見るファンの心を掴んで行き、1年経たない内に、センターを任される様になった。

22才でグループを卒業すると、ソロ歌手や女優として成功し、テレビを賑わしたが、そんな人気絶頂の頃、芸能界を突然引退してしまった。

それから独学で勉強して大学検定の資格を得て、難関大学の法学部を一発で合格し、超難関の司法試験にも合格し、弁護士資格も手にした。

若干20代のアイドル出身の美人弁護士誕生ということでテレビやマスコミも放っておかず、コメンテーターや番組の顔として各テレビ局間で争奪戦となった。

ところがそんな人気絶頂の頃、再びマスコミの前から姿を消すと、再び超一流大学の政治学部に再入学してしまった。

そして、卒業後突然S市（仮名）というある地方都市の市長選に立候補して、何の支持基盤も持たない選挙活動であったが、保守系政党や保守勢力の支持・支援を基盤とし20年以上市政を務める現職市長に大方の予想を裏切り大差で勝利してしまったのであった。

普段なら記事にもならないような地方都市の市長選挙であったが、アイドルから若手弁護士、そして今また政治家としての道を切り開いた佐伯理沙に俄然注目が集まり、報道関係者はS市に押し寄せ連日報道合戦を繰り広げるのであった。

バシャバシャとカメラのフラッシュが瞬いて視界を白く染め上げた。ビデオカメラの放列も中心の二人の姿を捉えていた。

30畳程の市長室には入りきらない程の報道陣が詰め寄せ、前市長から新市長への市政の継ぎの様子を撮影していた。

一通りの儀礼が終わると最後にカメラに向かって二人は固く握手を交わした。

前市長の口元は無理やり口角を吊上げ笑顔を繕っているが、その目にはこんな小娘に敗れた

と屈辱の思いが怒りとなって燃え、抑え切れない感情でこめかみがピクピクと痙攣していた。前市長の悪人顔とまだ 30 代前半で市長に就任した、アイドル時代の華やかさに落ち着いた大人の女としての美貌が加わった理沙の顔をまるで‘美女と野獣’のような絶好のアングルだとカメラマンが撮影し続けた。

前市長から強烈な力で手を握り締められ、ふと前市長の顔を仰ぎ見ると、どす黒い陰湿なオーラに包まれるような感覚に捕らわれた。

「嫌！怖い！」

目に涙を溜めて恐怖に震える、まだ中学生の少女の目の前にはムクツケキ男のモノが鎌首を擡げていた。

興奮で赤く熱を帯び、得物を狙って涎を垂らす様に先端から透明な液を滴らせるそれは獰猛な大蛇を連想させ少女を恐怖の坩堝に落とし込んだ。

「怖がることは無い。これからおじさんと楽しい事をしようと言うのだよ・・・お風呂でお父さんのモノを見たことがあるだろう？お前のお父さんとお母さんもこれを使って楽しい事をしたからお前が生まれたんだよ」

イヤ、イヤと涙を流しながら震える少女の身体をガッシリと掴むと可憐な唇に男は自分の分厚い唇を無理やり重ねて来た・・・

バシャバシャというシャッター音と眩い光に我に返った。

前市長の全身から発する陰湿な雰囲気や霧に襲われ、忘れてしまいたい忌まわしい過去の記憶を瞬間呼び起こしたのだった。

ゾットする汗が濃紺のスーツに覆われた背中に浮かんでいた。

理沙には人に言えない暗い過去があった。

歌が上手くて可愛い女の子がいる一との街の評判に、或る芸能プロが飛びつき、社長自ら理沙の家へスカウトにやって来た。

華やかな世界に憧れていた、まだ世間知らずの中学生だった理沙は両親の反対を押し切ってその芸能プロに飛び込んだのだった。

其処で発声やダンスなど基礎練習に励んでいたのだったが、或る日社長に連れられ・・・

総ての手続きを終了した前市長が無言で肩を怒らせて出口に向かっていった。
前に立つ報道関係者を邪険に突き飛ばすと、そのまま後ろも見ずドアから出て行った。
何人かの取材陣が、ぶら下がりでインタビューを取ろうと前市長の後を追った。
後には半分ほどの報道陣が残されていたが、この後引き続き行われる市役所職員への市長の
新任挨拶の撮影に向かうため慌ただしく撤収の準備を始めていた。
怒りを露わに退室していった前市長の後姿をボンヤリと見詰めながら、自分が何故政治の道
を志す様になったのかを思い直した。
それは今だにトラウマとして残っている辛い過去に起因していた・・・

それは中学三年になったばかりの女の子には見たことも無い豪華な部屋であった。
社長に連れて行かれたのは、市でも一番のシティホテルのスイートルームであった。
ホテルと聞いても年に一度ほど家族旅行で泊まる温泉ホテルしか知らない理沙には何もかも
珍しく豪華な調度に目を奪われた。
そこにあの男は居た。
大型のカウチにふんぞり返った、頭の禿げた中年男。でっぷりと太った身体に厚手のガウン
を着ていたが、ガウンから飛び出した毛深い脛を目にすると、風呂上がりのようにガウンの
下は裸では無いかと思わせた。
日焼けした顔に妖しげな笑みを浮かべる男は、自分の見知っている人達とは全く異なった雰
囲気を醸し出しており、何か不気味なものを感じた。

「それでは〇〇先生、私はこれで失礼します」

社長が何とか先生と言ったのは覚えているが、名前は聞き取れなかった。
社長は男に向かって卑屈にペコペコと頭を下げ、「理沙、失礼の無いようにするんだぞ」と、
言い残してそそくさと部屋から出て行った。
男と二人だけで部屋の中に取り残され、私はどうしたら良いのかもわからず部屋の中央に立
ち尽くしていた。
早熟な女の子なら男のたくらみに気付いていたかも知れないが、中学生にしては、おくてで
世間知らずの私は、この後の展開をまるで知らなかった。

「其処に立っていても仕方ないから、椅子に掛けなさい。お茶とケーキも用意してあるから」
と、男はニコニコと微笑みながらテーブルの傍の椅子を指さした。

テーブルにはイチゴが沢山載った美味しそうなケーキと紅茶が置かれていた。

貧乏な家という訳ではないが、私の家は決して裕福な家では無かったので、ケーキを食べる事など月に1度か2度くらいしか無かった。

食欲に誘われ、椅子に腰掛けると、ケーキを摘まみ始めた。

男はケーキを美味しそうに頬張る私に、名前は？とか、年齢は？とか、両親は何をやっているの？とか色々猫撫で声で話しかけて来た。

唇にクリームを付けたまま食べ終えた頃、男はスクッとカウチから立ち上がった。

そして、ガウンを大きく左右に広げた。

ガウンの下は裸で下着一枚着けていなかった！

そして剛毛に覆われた下腹からは獰猛な蛇のような物が自分に向けて鎌首を擡げていた。

男と女の事など何も知らなかったおくての私だったが、それを目にして何かこの身に危険な事が起こると感じて悲鳴を上げ身体を強張らせた。

「怖がることは無い。これからおじさんと楽しい事をしようと言うのだよ・・・お風呂でお父さんのモノを見たことがあるだろう？お前のお父さんとお母さんもこれを使って楽しい事をしたからお前が生まれたんだよ」

殊更男の持ち物を強調するように屹立したモノに指を添えて振って見せた。

そして、イヤ、イヤと涙を流しながら震える私の身体を両手でガッシリと掴んだ。

男の強い力に身体を動かす事を封じられた。

「おや？口にクリームが付いているじゃ無いか。取って上げよう」と、ゴリラのような顔を近づけて来た。

そして、太い舌で私の唇をペロリと舐めた。

まるでナメクジが唇の上を這い回った様な恐怖感に身体が硬直した。

強烈な口臭の混じった息を吐きながら、そのまま私の唇に分厚い唇を重ねて来た。

イヤだ！イヤだ！と顔を振って逃げようとしたが、何故か頭がボーとして来て、身体が熱を持ったように火照り、全身が気怠く、力が抜けて行くのを感じた。

今にして思えば飲み物の中に媚薬が入っていたのだろう・・・

その後の事は詳細には憶えていない。

初潮を向かえてまだ間もない少女を何時間にも渡って男の獣欲が赴くまま色々の体位で蹂躪

され続けた事は確かであった。

ただ大切なモノを奪われた時の痛みだけは鮮烈に記憶している。

放心状態だった私は社長の車で家まで送り届けられた。

両親の反対を押し切って自分から飛び込んだ道であるからと、両親にも打ち明けられなかった。

女にされた私はその後色々な男に抱かれた。

有る時、発声練習の先生が、「お前の声は綺麗だが、声に艶が無い」と言うと、私の衣服を剥ぎ取って床に押し倒し、身体を重ねて来た。

そして、男のモノで私を何時間も突き刺し、「そうだ！その声だ！歌声の中に喘ぎ声が混じらないと聞く人の心に響かない！」と腰を振り続けた。

またある時ダンス指導の先生が「お前のダンスにはキレはあるが、色気が無い」と言うと、全裸に剥いて、バレエのように片脚を大きく差上げた姿勢を取らせたまま、背後から突き立てて来た。

荒い息を吐き、まだ幼く未発達な乳房を揉みたて、腰を大きく上下させた。

「そうだ！この腰の動きだ！この腰の動きをダンスに取り入れれば観客を魅了できるぞ！」と叫んだ。

社長からは、栄養剤だとか喉の薬だとか言われて錠剤を渡され飲む様に言われた。

何時の頃からかそれは経口避妊薬であることが判った。

その薬を飲まされた後は男に犯されるのだった・・・

その後、悪徳社長から逃れ、有名なアイドルグループの研究生になることが出来た。

厳しい下積み生活であったが、歌とダンスに自信のあった私は、念願の舞台に立つことが出来た。

最初は袖の方のポジションであったが、徐々にファンの数が増え、何時の間にか先輩方を押し退けセンターに立つようになっていた。

先輩方を後ろに従え歌う事は本意では無かったが、それでも一生懸命センターを務めた。

人気絶頂の頃であり、仲の良い仲間も沢山出来たが、一部の仲間たちの羨望や嫉妬の念を感じ独立を決心した。

その後、ソロ活動や女優として働き、アイドルグループ時代以上の人気を集めた。

そんな多忙の中、悪徳芸能プロに食い物にされる若い女の子の話の話を度々耳にするようになり、自分の昔を思い出して、何とか助けてあげたいと思うようになった。

そう思うと矢も楯も堪らず、芸能界を引退して猛勉強を始めた。

法律の専門家となって女の子を助けたいと思ったのだった。

高校時代は芸能修行に明け暮れ、碌な勉強もせず高校を中退したのであったが、猛烈な勉強の末、大学検定に受かり、難関大学の法学部に入学し、更に司法試験にも合格し弁護士資格も取る様になった。

これで陰で泣く女の子達を救う事が出来ると意気込んだのだったが、新奇な事柄に飢えているマスコミがアイドル出身の弁護士誕生のニュースを放っておかず、たちまちマスコミの中に絡め取られ、転がされる毎日であった。

弁護士になっても不幸な女の子を救う事は出来なかった！と、自分の無力さを思い知らされた私は、政治の世界からこの腐敗した社会を変えようと思った。

再び大学に入り直し、政治学の勉強を始めたのだった。

何の政治基盤も無い私だったが、先ず市長に当選して経験を積み、次に県から国政に進出と計画した。

行く行くは日本を動かす指導者となってクリーンな日本を作って行こうと夢を描いた。

S市について余り知識は無かったが、長年に渡り市長が市政を壟断し汚職と腐敗の絶えない市であるとの噂を聞いていた。

先ず手始めにS市をクリーンにすることにより政治経験を積んで行こうと考えた。

何等支持母体の無い私だったが、大勢の人がボランティアで支えてくれてトップ当選を果たす事が出来た。

ボランティアの中にはアイドル時代からのファンでミーハー的な人も混じっていたが、S市の腐敗を憎み自分に期待を掛けてくれて、真剣に応援してくれる人も大勢いた・・・

「市長、そろそろお時間です。準備が整いました」

秘書の声で長い回想から我に帰った。

市役所に隣接する公会堂には既に市の職員が集合していた。

司会の声に促されて、舞台の袖から中央に置かれた演台にコツコツと足音を立てて向かった。

公会堂の椅子を埋め尽くす職員はハッと息を呑んで新市長の姿を眺めた。

地味な色合いの濃紺のパンツスーツ姿で、アイドル時代の華やかな衣装とは程遠いものであったが、それでも身体にピッタリとフィットしたスーツの上から、成熟した豊かな胸や、キュッと細い胴回り、豊かに張った腰回りなどが窺われた。

少しウェーブの掛かった栗色のセミロングヘア、細面の顔の一重瞼の奥に強い意志を感じさせる瞳、筋が通ったツンと高い鼻、これまでアイドルや女優としてテレビに登場して来た美貌に更に年季を積んだ知性を感じさせる美女の登場に会場の職員は魅入られたように見つめた。

詰め掛けた報道陣もカメラを向け一斉にシャッターを切り始めた。

見詰める女子職員はその颯爽とした成熟した女性の姿に憧れの目を向け、男子職員はその美貌とスタイルの良さに目を見張った。

演壇の上で理沙は熱く抱負を語り始めた。

古参職員は白けた貌でその演説を聞き流し、若手職員は胸に燃えるものを抱きながら理沙の言葉に聞きほれた。

その日から理沙の猛烈な職務が始まった。

腐敗職員の資料をかき集め、内容を精査して、その職員を呼び出してそれまで行って来た汚職を糾弾し辞職を迫った。

最初は何か判らず呼び出された職員であったが、証拠に基づく理沙の鋭い舌鋒に震えあがり、床に土下座して「自分には家族が居て・・・」云々と泣きながらクビを免れるように懇願したが、「本当なら警察に引き渡す所だけど、貴方の将来に傷が付くから・・・」と、忖度せず辞職するように言い渡した。

膝を着いて床に頭を擦り付けていた男であったが、市長が意志を変える気が無いことを知ると、「このアマ！憶えているよ！」とか「月夜の晩だけじゃ無いぞ！」とか捨て台詞を残して立ち去って行くのであった。

汚職に与しない清廉派の職員から毎日の様に机の上に市庁舎内の汚職事例の資料が積み上げられた。

新市長はそれらの資料に一つ一つ目を通して、弁護士時代の経験から違法性を立証できるものを取り上げ、腐敗職員をバサバサと切り捨てて行った・・・

市役所内部では、これまで肩で風を切って廊下を伸し歩き、威張り散らしていた灰色職員が隅で小さくなって、清廉派の職員から快哉の声が上がった。

彼らは新市長を迎え S 市は健全な都市に向かうと希望に胸を弾ませた。

嵐の予兆

遅くまで市役所に残り激務をこなした私は秘書の運転する車で自宅マンションに向かって
いた。

秘書の名は草刈民雄という名のまだ 20 代最後の若者で、私が S 市で選挙活動を始めた際に
ボランティアで応援活動してくれた、言わば恩人と言えた。

草刈君や多くのボランティアの努力により、現職市長に大差をつけてトップ当選を果たした
わけであるが、草刈君の活躍は目覚ましく、当選後懇願して秘書になって貰ったのだった。
これまで男の獣欲に満ちた醜さしか知らなかった私は、男性恐怖症に近い男性不信に堕ち入
っていた。

しかし、一日の多くを草刈君と過ごす内に彼の明るい快活な姿に、これまで頑なに男性に対
して閉ざしていた心が溶かされて行き、何となく癒されるようなものを感じ始めていた。

高身長で、無駄肉の無いすっきりした体形に、甘いマスクをした今風の若者であった。

車なら市庁舎から 10 分に満たない距離であったが、もう少し二人きりで一緒に居たいと思
う様になっていた。

「市長、着きました」

マンションのエントランス前に車が止められた。

私が住むマンションは市の中心部を離れた閑静な住宅街に在る。

往復 2 車線道に街路樹が植えられた広い歩道を挟み、歩道に接してアーチが建てられ、マン
ションの入り口との間には植え込みが設けられた瀟洒なマンションであった。

「ありがとう」

車を降りようとする私に

「明日の朝 7 時 30 分にお迎えにあがります」

と、口元に笑顔を浮かべて答えた。

車が走り去るのを見届けて、鍵を手にしてアーチを潜った。

その時アーチと植え込みの間に身を隠していた男が突然背後から襲い掛かって来た。

身体を密着させて左手でガッチリと首を固定して持ち上げるようにした。

長身の男であり小柄な私の脚は地面から浮き上がるのを感じた。

首を絞められる苦しさに両手で男の手を振り解こうとしたが、男の強い腕力は敵わなかった。バタバタと暴れる私のスカートの上に右手を伸ばして来た。

そのままスカートを捲り上げると、手を差し入れて来て、パンティの上を嫌らしい手付きで触って来た。

背後から首を絞められ、男から「声を上げたら殺す」と、脅されて悲鳴も上げられず、男の狼藉を受けるしか無かった。

「これが美人市長のオコカ」

遂に大腿とパンティの隙間に指を差し入れると禁断の褻に指を這わせて来た。

男の荒い鼻息が私の耳に触れた。

その時、自動車のヘッドライトが二人を眩く照らし、けたたましくクラクションが鳴らされた。

運転席から飛び出た草刈が「この野郎！何をやっているんだ！」と、大声を発した。

驚いた男は私を振り解くと、そのまま暗闇の中に逃走した。

「待て！」と、草刈が追いかけたが、全身を黒っぽい服に覆われていた男は闇に溶け込む様に姿を消してしまった。

「大丈夫ですか？」

地面にへたり込む私に草刈が声を掛けて来た。

「有難う、助かったわ！大丈夫よ！」

乱れた服を直しながら草刈の方を向いて応えた。

「あなたは市役所内に敵を作り過ぎている！最近不穏な空気を感じていたの、虫の知らせと言うか、あなたを送った後引き返して来たんです」

そこまで自分の事に気を使ってくれていたのかと思い、胸に熱いものを感じた。

「兎に角、あなたは狙われている。直ぐに警察に届けた方が良い！」

「大丈夫よ・・・警察なんて大袈裟よ・・・私もアイドル時代に突然ファンから抱き付かれた事は何度か会ったわ」

「そう言う次元の問題じゃない！早く警察に届けましょう！」

私にはその晩警察に行きたくない事情があったのだった。

「分ったわ、明日朝になったら届けます」

「先生、お帰りなさい」

部屋に入ると矢田恵が出迎えてくれた。

彼女には合鍵を渡してあり、何時でも自由に出入り出来るのだった。

矢田恵も草刈民雄と同じようにボランティアで選挙活動を支えてくれた支援者であった。大学在学中から応援してくれて、授業にも出席せず応援活動に明け暮れ、果たして卒業できるのかと私は心配していたのだったが、元々優秀な子でこの春卒業し就職も決まったようであった。

年齢は私と10歳ほど違うが、ポニーテールが似合う明るくて可愛い女の子である。

「先生じゃ無いでしょ。ここではお姉さまと呼ぶ約束でしょ」

先程の事件を恵に伝えれば、彼女が不安になると思ったので、何事も無かったように微笑みを浮かべながら口にした。

「シャワーは？」

「もう浴びました」

「ああ、そう、それじゃ私もシャワーを浴びて来るから、ちょっと待っててね」

「あの・・・」

恵が頬を染めながら言い難そうに口を開いた。

「如何したの？」

顔を赤く染めて俯きながら小さな声でしゃべる恵に問い掛けた。

「あの・・・シャワーは浴びないで欲しいのです・・・」

「どうして？」

「だって、お姉さまの身体の匂いが好きだから！」

そう言うと顔がポーッと赤らんで行った。両手で顔を押えて恥ずかしそうに俯いた。

「ズルいわ・・・私だって恵ちゃんの身体の匂いが好きなのよ」

バスローブを纏っただけでベッドの上に女の子座りをする恵に身体を寄せると、そっと顔を覆っていた両手を除けて、そのピンク色の唇に唇を重ねた。

上気した頬から湯上りの石鹸の芳香が匂った。

私がこれまでの経験から男性恐怖症からの男性不信であるように、恵も男性恐怖症で男性不信の傾向があった。もしや恵も男から強姦された経験があるのでは無いかと心配したが、初めてベッドを共にした時まだ処女膜が残っている事を確認したので、男性不信の原因は別に在る様であったが、深くは詮索しなかった。

「ああ・・・お姉さま・・・」

矢田恵のウツトリした声が上がった。

二人はそのままベッドの上に倒れ込んだ。

バスローブの帯を解き薄いピンクのタオル生地を左右に開いた。

下には何も身に着けておらず、お椀を伏せたように丸い小振りの乳房が露出し、薄いバラ色の小さな乳輪の中心に綺麗なピンクの乳首が起立していた。

そして身体の中心線を通してキュッと絞まったウエストの中央に形の良い臍があり、更に下方に過ぎると恥ずかしそうに固く閉じた大腿と下腹の作る三角地帯に艶々とした黒い春草が繁茂していた。

「お姉さま・・・恥ずかしい・・・灯りを消して・・・」

私の視線を若い全裸の身体に感じて恥ずかしそうに身悶えした。

私は部屋の灯りを暗くすると、手早く着ている物を脱ぎ、ブラジャーとパンティも脱ぎ捨てた。

下着で締め付けられていた豊満な熟胸が飛び出し、プッと音を立ててブラジャーが飛び跳ねた。

二人は身体を重ね合い、成熟した乳房と小振りの乳房が重なり合った。

アア・・・ッ

勃起した二人の乳首が擦れ合い甘い溜息が漏れた。

男性恐怖症で男性不信の共通する二人は何時しか惹かれ合いレスボスの関係を持つようになっていたのだった。

二人は互いの手で互いの性感を刺激し合い次第に深い愛に浸って行った。

何時しか二人の股間からは夥しい愛液が溢れ出し、互いに互いの性器を重ねて擦り合わせた。

重なり合う二人の春草がシャリシャリと妙なる音を立て、柔らかな媚肉を刺激した。

愛欲に煽られた二人は互いに股を開いて擦り合う、いわゆる‘松葉崩し’の大胆な体位をとっていた。

陰唇から溢れ出た二人の愛液が擦れ合いグチュグチュピチャピチャと艶めかしい音を発していた。

秘奥を密着させたまま恵の足を取ると、足指を口に含んだ。

小指を吸い上げ、小指と薬指の間に舌を這わせた時、恵の口からハァと甘い溜息が漏れた。

更に体位を変えて恵の股間に理沙は顔をもって行った。

恵もすぐ目の前に理沙の秘奥があった。

「ああ・・・恵ちゃんのお汁は美味しいわ・・・」

「お姉さまのも甘くて美味しい・・・」

舌で互いの秘園を愛撫し合い、溢れ出た愛液を吸り合った。

二人は他のレズビアンカップルの様に男性器を模した器具を使用して愛し合う事は無かった。

それでも、深い陶酔感に浸ることが出来、最後は互いに法悦の頂点を迎えることが出来た。

その頃草刈民雄はS市警察署に署長を訪ねていた。

「何とかしろと言われても、肝心の市長から被害届が出ていませんので如何しようも有りませんな・・・」

草刈の相談に署長が困った様に口にした。

「もし、その場に警察官が居たら現行犯で逮捕して刑事罰として取り調べる事が出来ましたが、犯人は不明で、あなたの証言だけしか無い状況では・・・」

「佐伯市長は何者かに狙われています！何か保護する方法は在りませんか？」

煮え切らない署長の態度に草刈が噛みついた。

「日本国の総理大臣なら24時間警護の体制を執ることは在りますが、何と言ってもS市警は人員不足ですし、24時間警護体制を布くことは困難ですな・・・」

何か言いたそうな草刈の表情に、所長は言葉を繋いだ。

「まあ、そう言っても市長に万が一の事があったら大問題ですから、市長が在宅中は市長の家の周囲を最寄り派出所の巡査に定期的に巡回させるようにしましょう。また市長が市庁舎から外出される場合は、それに応じた警護体制を計画しましょう。そのために今後1か月間、最低でも2週間の詳細な行動スケジュールを教えて貰いたいですな。その行動スケジュールに基づいて警護計画を立てましょう」

「分かりました！早速市長の行動予定をFAXで送ります。宜しくお願いします！」

署長から身辺警護の言質が取れたことにほっとして深く頭を下げた。

安堵して署長室を出て行く草刈の後姿を見詰めながら、署長の頬がニヤリと狡猾に歪んだ。

翌朝佐伯理沙がマンションを出るとアーチの所に二人の制服警察官が立っていた。

「市長！お早うございます。今日から交代で警備させて頂くことになりました。宜しくお願い

いします！」と、お辞儀をされ、慌てて「こちらこそ宜しくお願いします」と返答するのだった。

昨夜の内に草刈が手配してくれていたのだと思い、草刈への感謝と信頼の気持ちが益々高くなった。

程なく草刈の運転する車が見えた。アーチ前の歩道に横付けした草薙は二人の警察官の姿に署長は約束を守ってくれたと安堵して警官にお辞儀した。

第一ラウンドのゴングは鳴らされた

その夜も市役所での激務をこなした理沙を草刈が車で自宅マンションまで送り届けた。

「市長着きました。何時ものように明朝7時半にお迎えに上がります」

ハンドルを握ったまま理沙の方を向いて確認を取るように言った。

「待って・・・私は貴方にお礼を言いたい・・・」

ハンドルを握り締めたままの草刈の手にそっと手を添えて呟く様に言った。

「お礼なんて・・・」

理沙の言葉に少し驚いた声を発して理沙の顔をまじまじと見詰めた。

草刈を見詰める理沙の目が潤っているのを感じた。

二人はマンションの部屋の中に入り、ダイニングのテーブルを挟んでワインを口にしていた。

互いに話す言葉は少なかったが、ワインの酔いが二人の頬を赤らめた。

テーブルを挟んで、ほんの数十センチの距離で向き合う、まだ30歳前の若い美男子と熟女と言うにはまだ早い30歳を過ぎたばかりの美女の姿が在った。

草刈はまだ独身で女性との交際経験も少なかったが、この場の雰囲気を感じ取っていた。

理沙は椅子から立ち上がると、草刈の後に立ち、そっと両腕を草刈の首に絡めた。

「草刈さん、私、貴方にお礼したいの・・・」

耳元でそっと呟いた。

「市長、あなたは酔っている」

「こんな、30過ぎのオバサンじゃ嫌？」

「そんな・・・」

二人は寝室に居た。

寝室の薄明りの中で理沙の目の前に全裸の草刈が立っていた。

ボディビルのマッチョの様にいかつくは無いが、全身陽に焼けた肌に厚い胸の筋肉と六つに割れた腹筋が精悍な男らしさを見せていた。

理沙も草刈の前に全裸で立っていた。

Eカップ以上あるが決して垂れていない美しい乳房と、キュッとしまった胴回りと良く張った腰回りが成熟した女性の美を発散させていた。

まるで彫刻の名人が造った男女一对のブロンズ像のようで、互いの裸身を賞賛の目で眺めていた。

これまでの悲惨な体験から裸の男性は、嫌悪と恐怖の存在でしか無かったが、目の前の草刈の姿を見るとそんな感情は湧いてこず、逆に頼もしさや安心感を与えた。

股間から垂れる男性器は彼女に苦痛を与える醜い肉塊では無く、何か神々しいものを感じられた。

草刈の前に跪くとそっと手を添えて持ち上げ、その先端を口の中に含んだ。

「アッ！市長・・・」

掠れた声が発せられた。

二人はベッドの上で身体を重ねていた。

草刈の雄渾なモノが身体を貫いた時、苦痛とは全く異なる至福の快感がまるで電流が流れるように全身を貫いた。

男を嫌悪し生涯男には抱かれることは無いと思っていた理沙であったが、今草刈から強く抱き締められ女の幸せを初めて知った気がした。

草刈の腰の動きに煽り立てられ快美感は益々掻き立てられ、幸福感も益々高まって行くのを感じていた。

草刈も激しく腰を動かし頂点に向かっているのが感じられた。

腰の動きが止まった時、膣内に熱い男の飛沫を浴びせられたのが感じた。

目の前にキラキラと輝る幾つも星が現われ、ピンクの靄に包まれ意識が薄れて行った。

草刈の腕に抱き締められたまま幸福感に満ちた気怠い意識の中に包まれていた。

その時急に寝室のドアが開いたのを感じた。

其処には明るい廊下の照明を背景に少女が呆然と立ち尽くしていた。

「恵ちゃん！」

慌てて布団で裸体を隠すと悲鳴の様な声を上げた。

寝室の中で身体を絡ませ合う裸の男女の姿を目の当たりにして、見開いた恵の目が見る見る潤んで行くのが分かった。

「恵ちゃん！」

呼び止めようとしたが、少女は後ろを振り返ることなく部屋から飛び出して行った。

(今日は恵ちゃんは来ないはずだったのにどうして?)

矢田恵の後を追いながら頭の中が混乱する理沙であった。

それから何度も矢田恵のスマホに電話したが応答は無かった。メールを入れても読まれている気配は無かった。

市長室で業務を執行しながらも恵の事が気になって仕方なかった。

しかし、今は市長の仕事が第一で個人の事情など入り込む余地は無いと気を取り直して業務に打ち込むのであった。

「市長、失礼します」

ドアを開けて副市長の蛭沢が入って来た。

前市長が任命した男であり、20年に渡って二人三脚で前市長を陰から支えて来た男であった。兎角悪い噂の絶えない人物であり、退任させ自分の片腕となる人物を新たに副市長に据えたいと考えていたが、法的に市長権限だけではまだ任期の残っている副市長を解任できない。解任には市議会の承認が必要であり、いまだ前市長の影響力が強く残る議会で承認を得ることは困難と予想された。

それで、任期が過ぎるのを待つか、何とか違法行為の証拠を掴み排除したいと考えていたが、用心深い男の様で尻尾を掴ませなかった。

「市長、実は根積興産の根津社長が、市長就任のお祝いとお近付きのご挨拶をしたいと申しております。今夕7時に如何ですか？」

根積興産は昔は土建業でS市の発注する土木工事を請け負う会社であったが、前市長の時代に業容を拡大させ、グループ会社を幾つも創設して、関連の商事会社では市役所で使う机や棚など什器備品類を納入したり、更に人材派遣会社まで作って市役所の臨時職員やアルバイト

トまで派遣するようになっていた。

まさにS市の利権にガッチリと食い込んでいる会社であった。

根津社長は胡散臭い印象の男であったが、今後市政を運営して行くためには、遅かれ早かれ一度は会っておかなければいけない人物だと思っていたので、相手の申し出を受け入れることにした。

面会場所に選ばれたのは市内でも有数の豪華な料亭であった。

根津社長は既に宴席に腰を降ろして待っていた。

蛭沢を伴い仲居に案内されて部屋の襖が開いた時、思わずアッと息を呑んだ。

和服姿で床の間を背にして胡坐をかいて座る、陽に焼けた頭の禿げあがったでっぴり太った中年男。

それは初めて理沙を女にした〇〇先生と呼ばれていた男を思い出させた。

恐ろしいトラウマに背中に冷たいものを感じながら、促されて根津の隣に腰を降ろした。

「実を申し上げますと私は貴女のアイドル時代からの大ファンだったのですよ。人からは良い齢をしてみっともないとよく揶揄われたものですがね。しかし、こうして間近で顔を拝見するとテレビで見るとより一段と美人ですな！」

顔を近づけニコニコと笑いながら口臭の混じった息で話しかけて来た。

「まあ、お上手ですこと」

このタヌキ親爺がどういう魂胆を持って呼び出したのだろうと、警戒しながら愛想笑いを作った。

根津は理沙のお猪口に酒を注ぎ、理沙も返杯した。

「しかし、先ほど市長が仰られた高邁な理想には、ほとんど感銘を受けました。実は私も社業を通じて社会に貢献したくて、社会の草の根になろうとして、草の根を積み上げると云う意味で根積興産という会社を作ったんですよ！」

「まあ！それは御立派です事！」

自分の利益追求だけで何の社会貢献もしていない曲くまにと心の中で思いながら、顔に出さずお追従を口にした。

「しかし、貴女は若い！『清濁併せ呑む』と言う言葉が在ります。立派な政治家になろうと

思ったら、敢えて泥水を飲む決意を持っていなければ・・・」

そろそろ今日の面談の本筋に入ろうとしているのだなと感じて身構えた。

「地方には色々な都市が在って、その都市毎に違う風習やしきたりと言うのは有るものです。貴女もいきなり市長に成るのではなく、先ず市職員として働き、このS市のしきたりを理解し、市議会議員となって市政の仕組みを知って、市長に立候補しても遅くは無かった。いや、その方がずっと良かった」

根津が自分を取り込みに掛かっていると知って、固く口を結んだ。

「先ほど申しあげましたように、私は貴女の大ファンでしてな。貴女の色々な写真を持っているんですよ。一緒に見て貰えますか？」

と、懐から何枚かの写真を取り出し、畳の上にばら撒いた。

その写真を目にして、理沙の口から短い悲鳴が上がり、頭の中が真っ白になった。

それは悪徳芸能プロダクションに居た頃の男達から犯されている写真だった。

男に組み敷かれまだ幼い秘裂を貫通している写真も在れば、男の腰の上に載せられ騎乗位で下から突き上げられている写真もあった。

その頃は恐怖で呆然自失の状態のまま男のおモチャにされていたのだが、写真に写る顔は見ようによってはアクメを迎えている女の顔の様にも見えた。

顔面から血の気が引き硬直した身体をガタガタ震わせる理沙に勝ち誇ったような根津は、

「近頃はインターネットという便利なモンが在って、何やらボタン一つで一瞬の内に世界中に写真をばら撒けるそうですな。儂は歳やからよう判らんが、儂所とこの若い者にはそういうのに詳しい者が一杯居ますからな！」

と、畳みかけた。

同席する蛭沢もニヤニヤと嗤いを浮かべ、蒼褪めて硬直する市長の姿を観察した。

「まあ、儂も鬼や無い！悪いようにはせん・・・」

理沙の弱みを握った根津が狡猾な笑みを浮かべた。

「そや！儂は今日市長さんに会うのにサインを貰おうと思ってフェルトペンは持って来たんやが、うっかり色紙を持ってくるのを忘れてな・・・アンタのパンティにサインして貰えんか？」
最初の内は気取って標準語で喋っていた根津であったが、段々悪辣な本音が出て来て、日頃使っている関西訛りが混じるようになって来た。。

根津の言葉に羞恥の色が浮かんだ。

嫌か？と畳の上にばら撒かれた写真の方に目配せをした。

進退窮まった理沙はフラフラと立ち上がると、タイトスカートの中に手を差し入れ腰を蠢かした。

その様子を蛭沢がスマホのカメラに収めて行った。

腰を屈めて真っ白な脚にそってパステルカラーの下着を降ろして行った。

「ほう、これが佐伯理沙市長のパンティか！中々色っぽいパンティやないか！」

受け取った薄い董色の下穿きを広げて見て歓声を上げた。

「ほな、このパンティにサインして貰おうか！」

と、フェルトペンを差し出した。

自分の脱いだ下着にアイドル時代のサインを入れるという屈辱の様子も蛭沢によって撮影された。

「ほな、これで契約成立という事や！」

根津が勝ち誇った様に笑い声を上げた。

理沙は両手で顔を覆って大声で泣きじゃくった。

理沙を送り出した後、蛭沢と根津が残った。

「これであの女もお終しまいですな」

根津の手にするお猪口に酒を注ぎながら嬉しそうに口を開いた。

「甘いな、あれは脅しの材料には使えん！」

一口で酒を咽に流し込むとキッパリと言った。

根津の言葉にエッと驚いた顔を向けた。

「あの写真が世間にばら撒かれたらあの女の名誉は大きく棄損される。市長を止めるかも知れん。しかし、真相が知ればあの女に世間の同情が集まるかも知れん。そうなれば今より強い力を持つことになるかも知れん」

根津の説明に一々頷いて聞き入った。

「考えてもみい、どういう状況にしる未成年者との性交は犯罪や！あの写真はその犯罪の証拠写真や！あの写真を公表したら傷付くのは儂らの方や！」

折角の脅しの材料が使えないと知ってガッカリした表情を浮かべた。

「今は心を取り乱して儂らに従う素振りは見せたが、あの女の前職は弁護士や、いわば法律の専門家や！今は不意を突かれてパニック状態になってしまったが、時間が経って心が落ち着いて来たら同じ結論に至るはずや！」

根津の言葉に市長の反撃を予想して怯えた表情が浮かんだ。

「しかし、あの女が不意の攻撃に弱いというのが分かったんが本日の収穫や！」

快哉を叫ぶように口にした。

「まだ第一ラウンドのゴングが鳴ったばかりや！これからあの女に考える隙を与えず不意打ち攻撃を連続してパニックに陥らせて、毎ラウンドノックアウトにならん程度にボコボコに殴りつけ、甚振り抜くんや！女として生まれて来た事を悔やむようにな！そして最終ラウンドにあの女は観衆が見守る前で口から泡を吹いて仰のけにマットの上に倒れることになる。素っ裸で大股開いた身体でな。そして人々は驚いた顔で無様にのされた市長の恥ずかしい姿を見ることになるんや！」

若い美貌の女市長の無残な最後の姿が頭の中に浮かぶのか、目に残忍な光を浮かべ、理沙の脱いだパンティを鼻に押し当てその中心部分の残り香を楽しみながらクックッと笑い声を上げた。

不意打ちとも言うべき根津の攻撃を受け、パニックに陥り、一時的に放心状態にあった理沙であったが、家に戻る間に次第に落ち着きを取り戻し、冷静に対応策を考えられるようになって来た。

そして、根津が予想したような結論に近付きつつあった。

突然出現した強大な敵にともしれば心が折れそうになりながらも、「あんな卑劣な男に負けるんじゃないわよ理沙！」と、自分を励ました。

マンションの自分の部屋の扉を開けると足元に紙切れが落ちているのに気付いた。

誰かがドアの隙間から入れて行ったのだろう。

紙切れを手にとると、そこにはワープロで印刷された文字で、『この番号に電話してください』と記されていた。その番号は理沙も良く記憶している矢田恵の携帯電話の番号であった。慌てて電話をすると、聴き慣れた恵の声では無く、男の濁声が返って来た。

「おう、市長さんか。さっきはお疲れ様やったな」

その声があゝの根津社長の声であることが判り慄然とした。

「どうしてアナタが恵のスマホを持っているのよ！」

スマホを握り締めたまま悲鳴のような声を上げた。

「さあ、何でやろうな？」

男のくぐもった囁い声が返って来た。

「兎に角この事は人に言わん方がええで」

と、一言言うとプツンと通話が切れた。

何度同じ番号に掛けても空しく呼び出し音が鳴るだけであった。

遂に矢田恵を拉致するという実力行使に出て来た敵に言いようの無い怒りと恐怖を覚えるのであった。

「いくら市長さんの依頼でもこればかりは・・・」

内密に警察の応援を頼もうと決意した理沙は周囲の目を警戒しながら密かに警察署長を訪ねていた。

署長を前にして根津が矢田恵を拉致したという根拠を具体的に説明できないもどかしさを感じていた。

「それで、貴女か別の誰かが、その矢田恵さんという女性が誘拐される現場を目撃しているのですか？」

考えて見れば昨夜草刈との情事の間を見てショックを受け泣きながらマンションを飛び出してから今日の夕方までの一日足らずの間に誘拐されたことになるが何時何処で拉致されたかも分からない。

「いえ・・・」

理沙の返答にフウッと一つ溜息を吐いた。

「一人の女性が姿を隠したからと言って犯罪性があると結論付けるのはどうも・・・若い女性にはしばしば家出したりしますからね・・・それに根津社長と言ったらこの地方の名士ですよ。わざわざ若い女性を誘拐する動機が無い。もし下手に捜査を始めて違っていたら私の首を二三回連続して飛ばしても責任を取れません。100%確実な証拠が無ければ無理ですな。」

署長の言葉に溜息を吐いた。

確かに恵はショックを受けて姿を消した可能性があるが、それでは根津との関係を説明できない。

「それじゃ何故根津社長は矢田恵のスマホを持っていたんですか？」

諦めずに詰め寄った。

「市長の言われる電話に出た男が根津社長だという証拠が無いですね。ひよっとするとその女の子の彼氏かも知れない・・・」

署長の言葉にムツとして顔を強張らせた。

「失礼、ちょっとそのスマホをお借りして良いですか？」

理沙が自分のスマホを手渡した。

問題の電話番号を入力してスマホを耳に当て暫く確認していたが、

「駄目ですね、向こうの電源が入っていない様です。これではどうしようも無いですな・・・」

と、済まなさそうに言った。

理沙の胸に絶望感が拡がって行った。

「ところで、この矢田恵という女性は市長と如何どういうご関係の女性ですか？」

好奇心な笑みを口元に浮かべ質問して来た。

警察は当てに出来ない！という絶望的な事実を押し当てられ、暗い気持ちで自宅に戻った。

マンションの宅配ボックスに自分宛ての荷物が届いていた。

それは紙袋に包装された軽く柔らかい物であった。

胸騒ぎを感じて慌てて自室で荷物を解いた。

中から出て来たのは、若い女性物のワンピースと下着であった。

それは何時も目にする矢田恵のワンピースであった。そして、おそろいの可愛い花柄のブラジャーとパンティも勝負下着と言うか、彼女が理沙と愛し合うため部屋を訪れる時に着用するお気に入りの下着であった！

その時スマホが鳴った。

スマホ画面の着信表示は『矢田恵』であった。

慌てて電話に出ると、くぐもった嗤わらいを浮かべる根津の声であった。

「人に言うたらアカンと言うたやろう。今度人に言ったらどうなるかや・・・」

とだけ言うとプツリと通話が切れた。

必死の思いで、何度掛け直しても繋がることは無かった。

「監視されている！」思わず口を衝いた。

人に気付かれないよう警察署長を訪ねた心算つもりであったが、ばれていた。

今また包みを開いたタイミングで電話が掛かって来た。

常に自分は敵の目に監視されているのでは無いかと思うと背筋に冷たいモノが流れた。

そして、強大な敵方の手に誘拐され衣服まで奪われた矢田恵を思うと胸が締め付けられた。

弄ばれる秘奥

「市長、市長宛に荷物が届いています」

蛭沢が包装紙に包まれた小箱を手に市長室の扉を開けて入って来た。

ニヤニヤとイヤらしい笑みを口の端に浮かべ、この間の一件以来市長の弱みを握った一と、横柄な態度で接するようになっていた。

「市長の大ファンからの贈り物という事です。一応安全のため私の方で開封して確認しましたが、危険な物では無いようです」

包装紙には開封の跡があった。

目に淫靡な光を浮かべると、さっさと退室して行った。

市役所内の浄化により今や99%の職員は自分の味方となっていが、未だ市役所内に残る唯一の反対勢力であり、何とか早急に排除しなければならない敵方の手先である副市長の蛭沢が姿を消したことに少しホッとした。

‘佐伯理沙の大ファンより’と記されたカードが張り付けられた綺麗な包装紙を解くと、若い女性が好みそうなデザインの紙箱が出て来た。

紙箱の蓋を開いてハッとした。

其処に在ったのは男性器を模した巨大なバイブレーターだったのだ。

「誰がこんな物を!？」

気味の悪い筒具を見詰めながら声を上げた。

その時卓上の電話が鳴った。

「もしもし・・・」

「フッフ・・・僕からのプレゼント気に入って貰えたかの？・・・ククク」

電話口からくぐもった嗤い声が聞こえて来た。

「貴方は根津ね?!」

「・・・・・・・・」

市長室の電話は内線電話になっているから直接外部から掛かって来ることは無い。誰かが転送したのか、市庁舎内から内線を掛けて来くるしか無く、身近にいる敵に背筋が凍る思いを

抱いた。

「折角の俺からのプレゼントや！今日一日それを入れて仕事をして貰おう」

「何を馬鹿な事を！」

根津からの淫靡な要求に声を張り上げた。

「嫌か？アンタの可愛いペットは俺の所に居るんやで・・・」

理沙の最大の弱みを突かれてクッと声を呑んだ。

「俺も驚いたが、あの娘はまだ処女やったな。今アンタの大事なペットは素っ裸で俺の所の若い衆が面倒を見ているんや。俺は手出しせんように止めているが、血気盛んな若者達や、何時どうなるか判らん。アンタが大人しゅう俺の言う事を聞いていたら処女膜を付けたまま帰してやる・・・警察に言っても無駄やで・・・」

今は根津の脅迫に屈するしか無かった。

片手で電話を握り締めたまま椅子に座ったままスカートをたくし上げ、ショーツに指を掛けた。

「ククク・・・今日はピンクのパンティか・・・」

根津のくぐもった嗤い声が電話口から聞こえて来た。

(監視されている！)

市長室の何処かに隠しカメラが仕掛けられずと監視されていたのか？と、血の気が引いた。隠しカメラを探そうと天井を見上げたが、電話口から警告を受け、今の理沙にはどうすることも出来ないと思い知らされた。

レズビアンを救うため、今は根津の要求に従うしか無いと決心した。

鯰の張った亀頭部の最も太い部分は直径が5センチ以上もあり、握りこぶしのような巨大な亀頭部分を支える竿の全長も15センチ以上あり弓状に緩やかに反った表面には幾つもの丸い突起まで造形されていた。

こんな巨大な物が入るのだろうかと思っただけで恋人を救うためだーと、決意すると傘の張った先端部を秘奥に押し当てた。

うっとうと呻き声を上げて押し込もうとしたが、乾ききった秘孔は異物を受け付けようとしなかった。

「ふふ・・・濡れてないオコに入れようとしても無理やろ！ペロペロ嘗めて滑りを良くす

るんや！」

隠しカメラで監視しているのか理沙の無駄な努力を嘲笑うように電話から根津の声が流れた。

進退窮まった理沙は根津の指示に従って、唇にバイブの先端を近付け舌を伸ばしてペロペロと舐め始めた。

バイブを舐める理沙の舌先に自分の秘園の味と匂いを感じた。

スカートをたくし上げ、パンティを膝までおろして、下腹を剥き出しにしたまま一心不乱に男性器に似た淫具を舐める女性市長の姿は、事情を知らない人が見たらただの色情狂と映たろう。

その姿を遠隔で眺めている根津の押し殺した笑い声が握り締める電話口から漏れていた。

「どや、もう良いやろ？ 填めてみい」

矢田恵を助けたい気持ちと根津に見られながら破廉恥な行為をしている羞恥や諸々の感情が絢交ぜとなって、ともすれば正常な意識を喪失しそうになりながら、根津の言葉に誘導される様に再び秘孔に押し当てた。

あー、あー、と呻き声が上がりピクピクと腰が震えたが、巨大な頭部を呑み込ませることは出来なかった。

「しょうも無いオコやな・・ほたら、口に啜えてみい」

電話口で笑い声が聞こえて来た。

そのような大きな物を啜えるには理沙の口は小さかったが、それでも思い切り口を広げて口内に突き入れた。

口の中で淫具を左右に回したり前後に動かして全体に舌を絡め唾液を塗した。

今や根津の遠隔監視する前で、額に汗を浮かべ顔を真っ赤に染めて、頬を膨らませて巨大な責め具をしゃぶり上げる理沙の姿があった。

薄っすらと瞼を閉ざし頬を紅潮させて、口に突き立てた性具を蠢かす理沙の貌は色情狂の女の貌のように映った。

ハアハアと荒い息を吐いて口内から淫具を出した。

バイブの先端と唇が粘っこい糸で繋がっていた。

男根にも似たその亀頭部分は理沙の唾液でヌメヌメと光っていた。

(アーツ、入って、入って) と、淫具をその部分に押し付けながら心の中で叫んだ。

本来、矢田恵を救う目的のためにバイブを挿入しようとしていた筈が、何時の間にかバイブを

挿入する事自体が目的になってしまった観があった。

どうしても迎え入れることが出来ない快樂具を飢えた牝の肉管が待ちぼうけを食うように疼いた。

電話を肩と首で支えて、両手で力一杯突き立てて、長大な亀頭部分の半分ほどは秘肉の中に埋め込まれていたが、笠の開いた最大直径部分を理沙の女体はどうしても受け入れられずにいた。

そんな理沙の空しい努力を如何にも可笑しそうに嘲笑う声が電話口から聞こえていた。

「入らんか？全くショーも無いオコヤ！仕方ない、その箱の中に瓶が入っているやろ？そいつを塗るんや！」

必死に責め具と格闘していた理沙は、まるで高熱に浮かされたように考える能力を喪失しており、根津の声を耳にしてボンヤリと霞む目で箱の方を見た。

確かに広口の小さなガラス瓶が入っていた。

瓶の中身はドロリとした餛色の粘稠な液体であった。

「何・・・これ？・・・」

巨大なバイブを相手に汗まみれになり喘ぎながら掠れた声で質問した。

「心配せいでもエエ、ただの潤滑の油や。それをバイブに塗って、オコにも塗り込むんや！」

根津の言う通り、指先で掬い筒具の表面に擦り付けた。

まるで水飴の様にドロリとしているが、大量の油脂が含まれコールドクリームのような感触であった。

「バイブだけや無い！お前のオコにも塗り込むんや！」

隠しカメラで監視している根津が嵩に掛かって要求した。

正常の理性を喪失しており、自分がこの巨大な淫具を早く体内に収めないと恋人が酷い目に合わされる一との恐怖感に急かされて、ドロリとした潤滑剤を人差し指と中指の二本の指でたっぷりと掬い取った。

バイブと格闘して半ば開いた膣孔にそのまま指を差し入れた。

（ああ・・・何なの？・・・）

潤滑剤に塗れた指で肉洞の内壁を撫でた時に、何かゾワッとした感覚が発生した。

それは灼熱感を持って痛痒く膣壁を刺激した。

(アアッ・・・やはり催淫剤が入っていたんだわ・・・)

根津に急かされ何度も丹念に塗り込んだが、熱を帯びた^{うつろ}宙が自分の意志を裏切って何かを待つように蠢くのを感じ始めた。

「もう良いやろ、入れてみい・・・」

下腹がポーッと熱を発生し、疼く様に樹液が流れ出すのを感じていた。

愛液を垂れ流す淫孔にバイブの先端をあてがった。

両手で端を掴んで力いっぱい押し込むと、ズボッと音を立てて鰓の張った亀頭部の最大直径が媚肉を押し分けて通過し、そのまま一気に根元まで入り込み、コツンと子宮口に当たって止まった。

その瞬間軽く逝ったのか、ウッと呻き声を発生し、下腹を痙攣させた。

散々焦らされていた牝の器官が待ち兼ねていたモノを受け止めた瞬間であった。

「とうとう入れよったか。これでお前も儂のモノを呑み込むことが出来る^{からだ}女体になったという事や！」

電話口からゲラゲラ笑う声が流れていた。

事務椅子の背をいっぱい倒し、だらしなく両脚を開いた淫らな姿勢で、ハアハアと息を吐いていた。

巨大な筒具は膣壁を押し広げ寸分の隙間も無く埋没し、その内部から込み上げる巨大な圧力に串刺しにされた身体を動かすことが出来ずにいた。

突然ブーンと微かな羽音を立ててバイブが振動を始めた。

その振動はきつく締上げる膣壁の筋肉を揺り動かし、下腹全体に響いた。

「アア・・・ッ！イヤ！」

そのジーンと沁み通る刺激に悲鳴を上げた。

「そら、バイブやから振動するのは当たり前や・・・」

根津の嘲る声が流れて来た。

「イヤ！止めて！止めて！」

と、股間を押えながら必死に泣き叫んだが、根津の返答は無く、プツリと電話が切れて後はツーツーという無機的な音しか流れるだけであった。

「おやおや、市長！一人でお楽しみの最中でしたか？」

突然扉が開いて蛭沢が入って来て、シレッとした声を上げた。

椅子の背を倒して身体を預け、スカートをたくし上げ、剥き出しの股間にバイブを突き立てる—という、まるでマスターベーションの最中の様な人に見せられない姿を見られ、慌ててスカートを押し下げ、開け広げられていた股間を閉ざした。

大腿を強く鎖した時、下腹のバイブへの締め付けが強くなってウツと声を上げた。

「しかし、これは良く出来ておりますな・・・」

背広のポケットから何かを取り出し指先で操作を始めた。

「強くも弱くも自由に操れるのですな・・・」

蛭沢の言葉通り、しっかりと膣肉で食い絞めるバイブの振動は激しくなったり弱くなったりした。

(蛭沢のリモコンでバイブを操られている！)

恐ろしい現実には愕然となった。

ニヤニヤと卑猥な笑みを口の端に浮かべ、チラチラと理沙の反応を確かめながら、掌に隠れるくらいの大きさのリモコンのつまみをいじった。

「振動だけで無く、前後のピストン運動も出来るのですよ。ほら・・・」

突然バイブが根元から伸縮運動を始め子宮口を衝いた。

「イヤッ！」

思わず悲鳴が漏れた。

「深くも浅くも出来る」

コツコツと子宮口を浅く衝いていた先端がゴンゴンと強く衝き出した。

「イヤッ！もう止めて！」

蛭沢の狼藉に涙を浮かべて叫んだ。

「まあ、良いじゃありませんか・・・」

理沙の必死の哀願を無視して、

「早くも遅くも出来る・・・」

ピストン運動の速さを加減しながら嘯いた。

怒涛のような速さで柔肉内でバイブが前後に動いた。

ヒィー、と悲鳴を上げて身体を振った。

今や理沙の身体は蛭沢の手にするリモコン次第で自由に操ることが出来た。

このまま責め続ければ理沙が絶頂に達するのは確実だと確信した蛭沢はバイブの動きを弱め、絶頂にまで登り詰めないが、昂進した快感が冷めない程度に調整した。

「ところで、市長。今日打ち合わせで業者を呼んである事をお忘れですか？そのためお迎えに来たのですよ」

蛭沢の言葉にハッとした。

確かに今日の午前中に老朽化した市のごみ焼却炉の補修工事の打ち合わせのため市の担当者を集め業者を呼んで打ち合わせすることになっていたのだ。

根津の淫靡な脅迫で時間がすっかり経っていたことを忘れていた。

「市長、大分お化粧が落ちてますよ」

汗の浮かんだ額や、涙に流れたアイシャドーを見てクックッと含み笑いをした。

鏡を取り出し化粧を直す様に勧めた。

「全く女と云うものは時間の掛かる生き物ですな・・・私から少し遅れると会議室に電話を入れておきましょう」

と、言うのと机の上の電話を取り会議室に廻した。

「ピッチリ隙間なくバイブを咥えているから少々歩き回っても落ちることす心配は無いと思いますが、念のためパンティを穿いて下から支えても良いですよ」

足首に絡み付いたままになっているピンクの下着を見詰めながら笑った。

自分がノーパン姿であった事を思い出して慌ててパンティを引き揚げた。

バイブの底部が股間から突き出し、パンティが下に向かってテントを張った様に突き出している姿を面白そうに嘲った。

椅子から立ち上がろうと姿勢を変えた時、顔を歪めて、ひいと悲鳴が漏れた。

姿勢の変化に合わせて長大なバイブが位置を変えて内部から責め上げたのだった。

「市長、大丈夫ですか？」

蛭沢が手を取って立ち上がらせた。

今だにバイブは下腹内で振動とピストン運動を続けていた。

出口に向かって二三歩いた時、膣肉とバイブが擦れ合い強い刺激が脊髄を駆け上り脳を直撃した。

フラフラする身体を蛭沢に支えられ、こんな高いヒールではなく平底の靴にすればよかったと後悔した。

ドアに凭れてハアハアと喘ぐ理沙を蛭沢は無理やり廊下に連れ出した。

通路で職員とすれ違い会釈を受けた。

理沙も何事も無いように装って引き攣った顔で会釈を返したが、何時もの胸を張って大股でさっそうと歩く市長が、時々副市長に支えられながら、身体を屈めて内股に股間を締め、狭い歩幅でトボトボと歩く姿に奇異の目を向けた。

会議室に続く長い廊下で、理沙は内股に何か滴り流れるものを感じた。

慌ててストッキングを濡らす湿ったモノをハンカチで拭き取ろうとした。

身体を深く折った時、小さく悲鳴が口を衝いた。

姿勢の変化により膣内のモノが意地悪く責め立てたのだった。

それでも何とか我慢して拭き取ったが、愕然とした。

それは秘孔から流れ出た愛液だった。

自分の浅ましい女肉はこんな状況でも敵によって与えられたものを嬉々として受け入れ性感を昂らせているのかと思うと、自分の女性生殖器が恨めしくなった。

「おやおや、汗を掻かれましたか？」

蛭沢が理沙からハンカチを取り上げて繁々と見詰めた。

そのネットリとしたものに鼻を近付けてクンクンと嗅ぎながら、

「何やら汗とは違うさかりのついた雌の匂いがしますな・・・」

と、嗤った。

関係者を集めての会議は何時もの通りの会議であった。

安い金額で入札し落札した業者が、後の調査で色々問題点が見つかったと言って工事代金の値上げを要求する交渉であった。

理沙は、業者の説明に時々異論を差し挟もうとしたが、その都度蛭沢にバイブの動きを強くされ、瞬間頭の中が白くなり纏めていた考えが消えてしまった。

「如何しました？」という質問に「いいえ・・・」と返すしか無かった。

市役所の担当者も市長の不自然な様子に違和感を覚えたが、唯々諾々と業者の要求を呑む市長の様子に会議は盛り上がることなく流れた。

結局当初受注額の三倍の金額で妥結された。

市長室に戻った後も股間に埋め込まれたバイブは間断無く、胎内から理沙を責め上げていた。

呼吸は浅く早くなり身体は火照り続けた。

熟れた女体はバイブから間断なく煽られる刺激により終点に達することを求めている。

夥しい愛液が淫具を埋め込まれた隙間から溢れ出ている事が分かっていた。

ティッシュで拭き取っても拭き取っても後から後からジクジクと滲み出て来た。

今自由な両手で乳房を揉みしだき、激しくバイブを上下させたら、この苦悩に決着を付けられる事は分っていたが、それでは根津の奸計の前に敗北を認める事になると思いつつ耐え、机の上に積み上げられた書類の山に向かった。

特に辛かったのは椅子から離れ歩き回る時だった。

椅子から立ち上がる時や腰を降ろす時、体位変化でバイブが膣内を突き上げ、そして歩いた時にバイブを取めた秘裂が擦れ、意地悪く内部から刺激し、その悪辣な快美感にブルブルと身体が震え今にも絶頂を迎えようとした。

一日の内何度も市長室を離れ打ち合わせ等に出席するため市庁舎内を歩き回る事がある。

なるべくバイブの刺激を避けるため、内股で歩幅を小さくして、前屈みで歩くのだが、すれ違う市職員は額に汗を滲ませ熱っぽい顔でヨチヨチと歩く市長に奇異の視線を向けた。

「市長、大分苦しそうですね」

突然背後から声を掛けられた。

蛭沢だった。

廊下に人目が無いことを確認すると、女性市長の背後に身体を密着させ、バイブを埋め込まれた股間の直ぐ上に手を置いた。

スカートの上からであったが、秘裂から飛び出したバイブの根元を探り当てツンツンと押し上げた。

「ああ・・・いや・・・」

憎い敵方の男の慰み者になりたくないとの拒絶の言葉であったが、込み上げる性感に煽られる理沙の声は濡れた甘い響きを含んでいた。

「嫌だ嫌だと言ってもこんなに濡らしていますよ」

今は大胆になった蛭沢は、たくし上げたスカートの中に手を入れバイブを握り締め激しく上下に揺さぶり立てていた。

秘奥から溢れ出た雌汁がバイブを握り締める蛭沢の手を濡らしていた。

「ああ・・・もう許して・・・」

一方でスカートの中に手を入れてバイブを操作し、もう一方ではジャケットの中に手を差し

入れブラウスの上から乳房を揉み上げながら

「朝からバイブで責め続けられて、もう我慢の限界なんじゃないですか？宜しい！私が痔を付けて差し上げましょう」

「ああ・・・もうダメ・・・」

市長の口から流れる息が女性器から立ち昇る甘い香りになった様を感じた。

蛭沢は背後から女性市長を抱えたまま近くの男子便所に連れ込んだ。

バタリと個室の扉を閉め、内部から鍵を掛けた。

人に見られない安心感からか蛭沢の行動は一段と大胆になった。

ジャケットとスカートを剥ぎ取り、バイブを懸架していたパンティも足首まで押し下げた。

薄い繁茂の間から透けて見えるぷっくりと脂肪を置いた亀裂の間で野太いバイブがブルブルと淫靡な振動を続けている様子が目に入った。

ブラウスのボタンを外し、ブラジャーを捲り上げて剥き出しになった大きな乳房をいやらしい手捌きで揉み上げながら片手でバイブを操作した。

バイブの振動が一段と大きくなるのを感じた。

逐情に迫り込むように片手で乳房をせっせと揉み上げ、片手でバイブを激しく上下させた。

蛭沢に責め立てられ個室の壁に背を預ける立位の状態であったが、堪えようにも腰がガクガクと震えた。

アッ、アッと、堪え切れず短い悲鳴が喉を吐いた。

「ふふ・・・市長感じているでしょう・・・ほら乳首がこんなに固くなった」

言い終わると、野苺の様に赤く硬く勃起した乳首を口に含み舌先で転がした。

「アア・・・イヤ・・・」

愛する者にしか吸わしたことの無い大切な身体の一部を憎みても余りある卑劣な男に舌先で転がされる屈辱感に呻き声を上げた。しかし、そんな気持ちとは裏腹にズキズキと快感が襲い来るのを感じた。

「もうイキそうですか市長？」

今にも逐情しそうな女性市長の興奮して熱く火照った頬に顔を摺り寄せながら尋ねた。

ああ・・・もうもう・・・と、断末魔を間近に迎えブルブルと身体を震わせる理沙の目の前でズボンのベルトを緩めパンツを下ろすと醜く屹立した肉塊を取り出し見せつけようとした。

「どうです？最後はこんなバイブなんて無粋な物では無く私のモノでイカして差し上げましょう」

と、理沙の手を誘導して自分の隆起を握り締めさせた。

まるで溶鉱炉から取り出した熱鉄の様に熱く硬いモノを握らされて、最後に残されていた理沙の理性が勝った。

「ヤメテ・・・大声を出して人を呼ぶわよ・・・」

苦しい息の下で喘ぐように口にした。

「ふふ、こんな所を見られたら恥を掻くのは貴女ですよ・・・」

女の弱みを握ったと、バイブを抜き取り、その跡の濡れそぼった^{うづろ}宙の入口に陰茎を押し当て
呟いた。

「私も恥を掻くけど・・・貴方も強制性交の罪で訴えるわ・・・」

ともすれば性欲に溺れかけ男のモノを受け入れようとする肉欲を押し退け、喘ぐように言っ
た。

「やれやれ・・・私を道連れに自爆しようと言う訳ですか・・・これは困ったな・・・」

理沙の思いもよらなかった反撃に、蛭沢は頭をボリボリ掻くと、以外にも濡れそぼった坩堝
に先端部分を半ばまで突き入れていたのに、イチモツを引き抜き、パンツの中に仕舞うと、
ズボンを通して鼻歌を鳴らしながら出て行ってしまった。

後に残された理沙はホッと安堵の溜息を吐いたが、蛭沢に掻き立てられた肉欲は抑えきれな
い程になっていた。

隣の女子便所に駆け込み、扉を閉めるとバイブを激しく上下して最後の瞬間を迎えた・・・

拉致

翌朝佐伯市長がマンションのエントランスに姿を現した。

マンションのアーチの所で警戒していた二人の警官が市長に気付き「おはようございます」
と帽子を取って頭を下げた。

理沙も微笑みを浮かべて朝の挨拶をした。

時間に正確な草刈は何時も7時半丁度に迎えに来るのだった。

特に道路が混雑する地域でも無かったので、事故で交通が乱れる等がなければ遅れることは
無かった。

それでも理沙は草刈を待たせては申し訳ないと、5分前即ち7時25分にマンションの前に

立って迎いの車の到着を待つのを習慣としていた。

何時ものように縁石の傍に立って草刈の姿を待った。

その時突然背後から二人の男が女性市長に襲い掛った。

一人が抵抗を封じるように身体を抱き締めると、もう一人の男が悲鳴を封じるようにハンカチを口に押し当てた。

必死に身悶えて助けを求めて警察官の方を振り返ったが、何故か二人ともそっぽを向いており、男達の狼藉に気付いている風は無かった。

口に押し当てられたハンカチにはクロロフォルムが沁み込ませて在ったのか意識が薄れて行った。

僅か1分にも満たない早業であった。

男達は意識の無い市長の身体を抱えて、近くに止めてあった車に押し込み、立ち去って行った。

犯人達の車が発車したのと同じタイミングで草刈の車が到着した。

目の前で動き出した車の中に市長が閉じ込められていたとは夢にも思わなかった。

何時も路上に立って自分を待っている市長の姿が無いことを不審に思い、傍の警察官に尋ねた。

「何でも急に体調が悪くなったとかで、今朝がた病院に行かれました」

と、今ここで誘拐事件が発生したなど知らぬ風に答えた。

昨日まで元気だったのに突然体調を崩すとは何が在ったのだろうと訝った。

そして、自分に連絡も無しに病院に行くとは？

「此処は何処なの！私をどうしようと言うの！」

麻酔の醒めた理沙はひじ掛けのついた回転椅子に腰を降ろした格好で縄で縛り付けられているのに気付いた。

目の前には白衣を着た50代近いと思われるいわゆるピヤダル体形の女が立っていた。

まるで今川焼の様な丸顔の下半分はマスクで覆われていたが、吊り上がった細い眉、アーモンド形の赤いフレーム眼鏡の奥のキツネ目など陰険な色を漂わせていた。

そして、その両側には同じく白衣にマスクを着用した根津と蛭沢が淫靡な目の色を浮かべながら立っているのに気付いた。

異様な雰囲気から恐怖のあまりヒステリックに叫び続けた。

「静かにして下さいね。ここは病院です。貴女を治療しようと思ってお連れしたのです。もし市長のお体に異変が起きたら大変ですからね」

細いメタルフレーム眼鏡の奥から蒼白の理沙の顔を覗き込むようにの女が話し掛けた。

「申し遅れましたが、私はS市市立病院院長の毒島笑子（ぶすじまえみこ）と申します」

「私は病気じゃありません！すぐ此処から出して！」

陰湿な雰囲気のを漂わせる院長を名乗る女に戦慄を覚え叫び声を上げた。

「おやおや、これは頭の良い市長さんとは思われない変な事を仰るわね。病気か病気で無いかは医学の素人である市長さんが判断される事では無く、医療の専門家である私が判断する事です。本人の自覚がないまま病気が進行して行く事は良くある事ですからね」

マスクの奥でクックと囁うのが分かった。

「市長は御病気ですよ！昨日多くの職員が市長の異変を目撃している・・・」

蛭沢が含み笑いをしながら横から口を挟んだ。

「良いですか？病気を治療するのは医師と患者様の信頼関係が一番大事です。いわば二人三脚の様なものです。当病院でも治療の甲斐なくお亡くなりになる方がいらっしゃいますが、多くは医師を信用せず医師の指示に従わない人です」

怯える理沙の表情を窺いながら話しかけると、最後にダメを押す様に口にした。

「何しろ死亡診断書を書くのは私ですから・・・」

自分の言う事を聞け。さもないと殺すぞ。殺しても死亡診断書を書くのは自分だから完全犯罪になる一と、脅迫するのだった。

理沙から抵抗の意志が失われて行くのを確認して背後に回り身体を固定していた縄を解き出した。

「それでは診察に入ります。先ず着ている物を脱いでそちらの籠に入れて下さい」

傍の赤いプラスチックの脱衣籠を指さした。

敵方の男達の目に裸身を晒す恐怖にイヤイヤと泣き叫んだ。

「おやおや、困りましたね・・・患者様は先ず着ている物を脱いで診察着に着替えて頂かないと・・・」

恐怖に打ち震え身体を丸くして蹲りながら、「それではその二人を此処から出して下さい！」と、根津と蛭沢を指さして叫んだ。

「このお二人は立ち合い人です。私が正しい医療行為を行っている事を見届ける証人です」

院長の説明に二人は、目に淫靡な光を浮かべながら、そうそうと言う様に肯いた。

服を脱がされる恐怖に両腕を前に交差させて震える理沙を冷酷な目で見詰めながら、
「おやおや、困りましたね・・・この患者様は両手が使えないようで自分で服を脱ぐことが出来ないようね。お前達、患者様が服を脱ぐのを手伝ってあげなさい」

と、背後に控えた二人の男性看護師に命じた。

二人の看護師は昨日までラグビーの選手をやっていたと云うような厳つい身体の大男であった。

院長の命令を受けた看護師は理沙の両脇に立ち、無理やりジャケットを剥ぎ取るとブラウスのボタンを外し始めた。

必死に抵抗する理沙であったが男の力には敵わず、一人が背後から羽交い絞めにして動きを封じると、もう一人がブラウスのボタンを次々と外していった。

開けられたブラウスの前から淡いブルーのブラジャーが目に入った。

次に男はスカートのホックに指を掛けた。

男達の目の前でスカートを脱がされる羞恥に脚をバタバタさせて抵抗したが、看護師の男は易々とスカートを剥ぎ取ってしまった。

後は、ブラジャーとパンティを残すだけの裸身とされてしまった。

ミルクを練ったような真っ白い肌に揃いのパステルカラーの下着を着けただけで床の上に蹲る若い女性市長の姿に根津も蛭沢も淫靡な視線を送った。

「先ず、身長と体重を図らせて下さい」

「お願いします。早く診察着を着させて下さい！」

全裸では無いと言えど、男達の目に下着を纏っただけの裸身を晒す羞恥に涙を浮かべて叫ぶように言った。

「この後、身体測定をするからそのままの方が良いでしょう」

理沙の訴えをサラッと事務的に言い、跳ね除けた。

「貴女のために診察書も用意されているのよ・・・佐伯理沙、33歳、職業S市市長・・・住所・・・」
記載事故を読み上げ、「ココまでで間違いはない？」と、理沙の目の前でカルテをヒラヒラさせた。

看護師二人に背を押され身長計に載せられた。

「はい、背中を後ろの棒に押し当てて胸を張って顎を引いて下さいね・・・」

如何にも手慣れた風にテキパキと指示すると頭の上に測定儀を押し当てた。

「ふむ、身長 162 センチ、体重は 47 キロか・・・」

理沙を載せた身長体重計のデジタル表示を読みながら、看護師に手にするカルテに記入するように命じた。

次に巻き尺を手にすると胴に巻き付けた。

「ふむ、ウエスト 60 センチ」

次にパンティの上から周囲を計り

「腰回り 90 センチ」

と、カルテに記載するように命じた。

「それでは次に胸周りを計らせて貰いますよ・・・こんな物を着けていたら正確に測れませんからね・・・」

と、口にするといきなりブラジャーのホックを外した。

支えを失った淡いブルーの下着が乳房の圧力に押し出されるように前に飛び跳ねた。

慌てて両手で胸を隠したが、瞬間たわわに実った乳房とその先端のピンク色の乳首が目飛び込み取り囲む男達からオッと声が上がった。

「ほらほら、そんなに胸を押えていたら計れませんよ・・・」

両側に立つ看護師が胸囲を計り易いように両腕を絡め取った。

「ふむ、胸周り 91 センチ」

カルテに記載させると、

「それでは測定は終わりましたので、診察着を着ても良いですよ」

傍らの看護師に診察着を手渡す様に指示した。

短い浴衣の様な形の薄い生地の診察着ではあったが、裸を男達の目の晒すよりはマシと、看護師から衣類を奪うように手にすると慌てて身に纏った。

理沙は、これまでの院長の一般患者を扱うような事務的な態度から本当に診察だけで酷いことをされずに、このまま返してくれるのでは無いかと淡い期待を持った。

相手が根津や蛭沢のような残忍な男ではなく女性である事も期待を大きくさせた。

「それでは次に婦人科の検診を行いますよ・・・」

クックッと含み笑いをすると部屋の隅のカーテンをサーッと開けた。

それを目にして理沙の顔が蒼褪めた。

そこには分娩台にも使う産婦人科専用の検査椅子が置かれていた。

陰湿な計略に気付いてイヤイヤと抵抗したが、屈強な二人の看護師により易々と検診台の上
に載せ上げられてしまった。

抵抗を封じるため看護師たちは両手を椅子のひじ掛けにベルトで固定し、更に腹の周りにも
ベルトを締めた。

検査椅子に載せ上げられることを拒否して看護師達に抵抗したため、診察着の胸の前は大き
く開けられ熟した乳房は剥き出しとなっていた。

院長は、上半身が検診台にガッチリと固定された事を確認すると、診察着の腰から下を左右
に押し広げてパンティー一枚の下腹を丸出しにした。

真っ白い肌に唯一残された小さな下着が男達の目を扇情的に捕らえた。

「こんな物を穿いていたら検診できませんからね・・・」

唯一身体に残された薄い下着に指を掛けた。

悲鳴を上げ、両脚をバタバタと藻掻かせて最後の盾を守ろうとしたが、左右から看護師に脚
を押えられ空しい抵抗は封じられた。

院長により最後の守りはスルスルと両股の間を滑り降りて行った。

オオッ！と取り囲む男達から声が上がった。

雪の様に白い下腹の中心に艶々とした黒い春草が夢の様に繁茂していた。

その薄い雲の様な絹草の奥に成熟した女の峡谷が垣間見えていた。

看護師は両脚を掴んだまま左右の脚載の上に運んだ。

見詰める敵方の男達の目の前で両脚を大きく左右に広げられる羞恥に身悶えたが、看護師た
ちは強引に脚載の上に載せ上げベルトで固定してしまった。

こうして、理沙は憎むべき男達の目の前に女の構造をまざまざと晒してしまった。

これ以上無いほど左右に押し広げられた股間の霧の様に霞む漆黒の絹草の下には淡いピン
ク色の生々しい柔肉の亀裂があった。

院長が腹の上で仕切るカーテンを閉じた。

カーテンにより視界を遮られたが、男達の様子が見えないだけに余計に神経が研ぎ澄まされ、
男達の熱気を帯びた劣情が剥き出しの下腹に集中する感覚を覚えるのだった。

「先ずお熱を測らせて下さいね」

院長が昔ながらの水銀体温計を手にして一振りさせると、豊かな双臀の谷を押し広げられて

出来た平原に咲く一輪の菊花の中心にぷすりと先端を挿し入れた。

突然アヌスに異物を感じてヒィと悲鳴を上げて身体を硬直させた。

「余り浅いと体温が正確に測れないからね」

と、口にするとグイグイと体温計を押し込み三分の二ほど埋没させた。

薄い董色の菊花の中心から柱の様に体温計を立てる女性市長の姿を男達は笑い声を上げて見詰めた。

その間に看護師の男が鏡面の様に磨き上げられたスペキュラム（膣鏡）やアノスコープ（肛門鏡）やその他の種々の検査器具が載せられたワゴン押して来た。

看護師が器具を順番に並べている間に、スポンと肛口に突き立てられていた体温計を抜いた。

「36.5 度か、まあ問題無いようね」

と、目盛りを読んでから体温計の先端を目にしてゲラゲラ笑いだした。

「まあ！あなた先端にウンチが付いているわよ！」

「本当だ！これが美人市長のウンコか？！」

院長から体温計を受け取った蛭沢が高笑いして匂いを嗅ぐ仕草をした。

「ちょっと便秘気味のようなね。暫くお通じが無かったんでしょ？良いわ私が治療してあげるわ」

秘孔を左右から覆っていた小陰唇を押し開いてペンシルライトを照らしながらその様子を観察した。

「綺麗な色をしているわね・・・独身だけど、流石に処女じゃ無いようね・・・膜は喪失しているわ」と笑った。

自分の秘密を次々と覗き見られるようで、悔しさに歯噛みした。

次にコンパスの様な測定器を手にして先端を開いてその部分に押し当てると、

「膣孔の大きさ 2.5 センチ、さて肛門の皺の直径はと・・・」

と、股間に隠されていた恥ずかしい部分の大きさを計り始めた。

女の手で秘密を暴露されて行く現実に羞恥で頭が狂いそうであった。

「ええーと、クリトリスは？・・・ほとんど包皮に隠されているわね・・・露出部分は 1.5 ミリというところね。」

鞘の様に陰核を覆う包皮の上からその下の女核の様子を確認するように医療用手袋を填めた指先でなぞった。

「皮で隠されているけどその下には格好の良いクリトリスが在る様ね。いいわ、後で包茎手

術をやって上げる。一皮むければ押さえ付けている皮が無くなって一段と大きくなるわよ！」
男からまともに相手にされないようなブ女が美女を自由に甚振れる快感に酔って高笑いした。

「ここまでの外形を写真に撮っておいてね」

看護師に押し広げられた股間やアップにした外性器や肛門の周囲を写真撮影するように命じた。

バシャバシャとシャッター音がして、レンズの先端にストロボが取り付けられ、影を作ることなく鮮明に被写体を撮影できる医療用カメラの閃光が室内を照らし出した。

「イヤー！撮らないで！」

次々と人に見せられない秘奥が写し取られて行く恥ずかしさに悲鳴を上げた。

「さて、次は・・・」

先端が丸くなった細い金属棒を手にした。

そしてそれをいきなり膣孔に突き刺した。

冷たい金属棒が内部に突き立てられた感触にヒィと悲鳴を上げて身体を硬直させた。

「膣の深さはだいたい12センチというところね」

「何だ、意外と浅いんだな！」

蛭沢ががっかりした声を上げた。

「女のココは自由に伸び縮みするから長い男根が入ったらそれなりに奥まで受け入れるものよ！」

と、蛭沢をたしなめる様に言った。

スペキュラムを手にとって先端に潤滑剤を塗り始めた。

そして、そのままズブリと肉洞に挿入した。

突然の大きな金属物の侵入に悲鳴が上がった。

そんな理沙の悲鳴にも躊躇せず、奥まで差し入れると鉗子を最大限まで押し広げた。

ペンライトで中を覗きながら、「綺麗なものね・・・特に異常は無いようね」と、光に照らされた丸い子宮口を観察した。

根津や蛭沢もペンライトを受け取り、興味津々と女市長の媚肉の内部を覗き込んだ。

「明日は、子宮頸癌の検査で検体を取ったり、子宮内部の検査もやって上げるわ。」

膣鏡を突き立てたまま残し、さて次は一と、肛門鏡を手にとった

「アアーッ！痛い！」

狭い肛口を押し開いてグイグイと内部に侵入して来る異物に悲鳴を上げた。

「痛い訳無いでしょ！こんなもの普段貴女がしているウンチと比べればずっと細いでしょう？」

後口を襲われ苦悶する理沙の尻を平手でペンペシ叩きながら笑った。

次に、肛門の筋肉が引き千切られるほど鉗子を広げられ、再び悲鳴が上がった。

「特に痔とか裂傷は無いようね・・・」

肛門鏡で押し広げられた中を覗きながら言った。

内部をペンライトで照らして観察していると、突然ゲラゲラと笑い出した。

「アンタやっぱり便秘ね！硬化した便が此処まで降りて来ているわよ！良いわ、明日大腸検査をする予定だから、すっきり腸の中のモノを出させて上げるわ！」

「ウンコが出口近くまで降りて来ているんですか？道理でウンコ臭いと思いましたわ」

蛭沢が肛門鏡で開け広げられたままの後腔に鼻を近付け臭いを嗅ぐ仕草をして擲揄った。

「イヤー！言わないで！」

蛭沢の鼻息がその部分に触れるような恐怖を感じて悲鳴を上げた。

「それじゃこの部分も写真に撮っておいてね」

看護師に命じて再び腔鏡と肛門鏡により押し開かれたままのその部分の写真を何枚も撮られた。

赤黒い直腸の奥に褐色をした便塊が存在する様子も鮮明に写真に写し込まれた。

「折角の記念撮影だから貴女の美しい顔も入っている方が良いでしょう？」

と、言う上半身を隠していたカーテンがサーッと広げられた。

バシャバシャとシャッター音がしてフラッシュの閃光が輝き、秘奥を最大限に晒して羞恥に身悶える理沙の顔と陰部の様子が克明に撮影されて行った。

「おや？生理が始まったようね」

鉗子によって開け広げられた腔孔の奥に在る子宮口から赤い血が流れ出した様子に驚いた声を上げた。

「まさに女体の神秘一て、云うやつですな・・・」

男達は赤い血に染まった秘奥を間近から眺め上げた。

院長の言葉に理沙はドキッとした。

生理が近いのは気付いていたが、まだ2日か3日先だろうと思っていた。

このところ異常な事態が続き、今また男達の目の前で秘奥を検査されるという気も遠くなる様な恥辱に身体も変調を起し整理が始まってしまったのかと感じた。

悪辣な男達の前にまた一つ女の脆さを露呈した気持ちになって心が暗くなった。

その頃市庁舎内の市長室では調査が行われていた。

監視されている事に気付いた理沙が草刈に市長室の点検をするように依頼しておいたのだった。

市から依頼を受けた専門業者が室内を点検し、結局三か所から隠しカメラと盗聴装置が発見され撤去された。

「一体誰がこんな物を・・・」

立ち会った草刈が呻くように口にした。

そして、監視されていたのは市長室だけでは無いのでは無いかと不安になった。

市長室の点検と盗聴装置の撤去を完了した後、業者を理沙のアパートに連れて行った。

理沙から合鍵を渡されていた草刈は、留守中女性の部屋に入ることに気後れを感じたが、今はそんな場合では無いと気を引き締め、業者を中に入れた。

結局2LDKの各部屋の中から合計11個もの盗聴装置が発見された。

市長との情事も何者かに筒抜けだったのか一と、恥ずかしさが込み上げて来た。

そして、この事を一刻も早く市長に知らせないといけないと思った。

「レントゲン室の準備が出来たそうです」

連絡を受けた看護師が毒島に告げた。

「そう、それじゃこれから市長のレントゲン検査をうとしましょうか」

婦人科の検診台から降ろされた理沙は二人の看護師の手によりストレッチャーに移し替えられた。

ストレッチャーの上で暴れない様に手足と胴回りがベルトで嚴重に拘束された。

一応診察着に袖を通してあるが、大きく開けられたまま何も下着を着けていないので全裸同様であった。

途中騒ぎ出されないよう口には緘口具が噛まされ、上から全身を隠す様にシートが被せられ

た。

これなら例え声や悲鳴を上げようとも、外の人間には患者が苦痛の呻き声を上げているとしか見えないだろう。

視界を奪われた理沙にはストレッチャーが部屋から運び出され、エレベーターに載せられ、エレベーターの扉が開くと、人々の話声が聞こえる廊下の真ん中を進んで行くのが分かった。廊下で話声を上げていたのは、恐らく診察を受けに来た患者やその付き添いであろうが、目の前を通過して行く全身をシートで覆われた重症患者を載せているように見えるストレッチャーに会話を止めて見守るのが雰囲気分かった。

まさかそのシートの下に現職市長が全裸で拘束されているとは夢にも思わなかったろう。院長が人並を掻き分ける様に先頭に立って進み、二人の看護師が左右からストレッチャーを押しした。

白衣にマスク姿の根津と蛭沢も医療関係者のような振りをしてストレッチャーの後に従った。

ストレッチャーは放射線施設が設置された区画に運び込まれた。

放射線漏洩を防止する厚い扉が閉じられると外の喧騒から完全に遮断された。

看護師はベルトを解いてストレッチャーから降ろした。

代わりに抵抗を防ぐため後手で縛られた。

二人の看護師が理沙を引き立てて或る奇妙な機械の前に立たせた。

「これが何か解かる？マンモグラフィーという乳癌を検査する装置よ！」

「私は乳癌などありません！」

不気味な雰囲気に思わず叫び声を上げた。

「ホホ・・・あなたが乳癌かそうで無いかはレントゲンを撮れば分かる事よ・・・」

院長は嬉しそうに笑って、理沙の背後に控える看護師に目配せした。

無理やり装置の前に立たせ、たわわに実った乳房を鷲掴みにすると装置の亚克力板の上に載せた。

「ホホ・・・あなたは大きなオッパイをしているから潰し甲斐がありそうね・・・」

板の上に置かれた理沙の乳房を嬉しそうに撫でて、その上に別の亚克力板を重ねた。

「ギャーッ！痛い！」

突然二枚の板に乳房を挟みつけられ悲鳴を上げた。

「どう？痛い？ホホホ・・・そうでしょうね。普段の何倍も圧力を加えているからね。」

特にあなたメンスでしょう。メンスの時はオッパイが張っているから何倍も痛いよ」
理沙が激痛に悶える姿が面白くてしょうがないと言う様に笑い声を上げた。

「それにしても女のオッパイって伸餅みたいに薄べたくなるもんですな！」

傍に立って観察していた蛭沢が感心したように声を上げた。

二枚の透明アクリル板に狭窄された理沙の乳房はこれ以上無いほど平たく伸されていた。

市長が入院するとすればこの市で最も設備の整った総合病院である市立病院だろうと草刈
は見当を付けた。

「そういう患者様の情報はお知らせ出来ない事になっております」

病院の受付の女性が申し訳なさそうに草刈に説明した。

「分っています！しかし、彼女は私人ではなく市長と言う公人です！市長の行くえが分からなければ市政がストップしてしまいます！」

草刈の勢いに押された受付嬢が、左右に目を振って人が居ない事を確認すると、

「これは私が言ったと絶対に人には言わないで下さいね」と、念を押して、「確かにそういう患者様はいらっしゃるようです。でも、その患者様は現在面会謝絶となっております」

「面会謝絶！」

受付嬢の言葉に市長の容体はそんなに悪いのか一と、呆然となった。

「市長はそんなに重態なのですか？」

「それが、その患者様は院長直診、院長先生が直接診られている患者様で、私達も良く判らないのですよ」

前途に暗澹たるものを感じながら駐車場に駐めた自分の車の方に戻った。

遠隔からリモコンでドアを解錠した時、駐められた二台の車の間に人相が悪い二人の男が立っていることに気付いた。

派手なアロハシャツにサングラス、一人は角刈りで、もう一人はパンチパーマ、どうにも堅気の間人には見えなかった。

「よう、アンタ、私立病院へ来るまでの間にあちこち消毒してくれたようだな・・・」

男の言葉に危険を察知して、その場から逃げようとしたが、それよりも早く男のパンチが草刈の腹を捉えた。

激痛に身動きが出来なくなった草刈を隣に駐めてあった大型ワゴン車に押し込み、発車して行った。

女体解剖

女性市長は左右の乳房を交互に上下から押しつぶされて、激痛に悶えていた。

それが終わると更に左右からアクリル板で挟み押しつぶした。

透明アクリル板の間で醜く変形した乳房を眺めて男達は手を叩いて笑い転げた。

こうして左右の乳房を上下から左右から狭窄され合計4枚のレントゲン写真が撮影された。

最早理沙はまともに装置の前に立っていることも出来ない程疲弊していた。

「この装置はこんな事も出来るのよ・・・」

と、囁くと乳房を挟み込んだまま斜めに振じった。

乳房をもぎ取られるのでは無いかと思うほどに激痛が走り意識が遠くなった。

慌てて看護師が理沙の身体を支えていなければ本当に乳房をもぎ取られていたかも知れない。

意識を喪失して冷たい床に横たわる全裸の理沙の姿を男達は冷酷な目で見ていた。

「さてと、乳癌検査も終わったし、包茎手術をしようか・・・」

笑いながら院長が口にした。

ワゴン車の中で雁字搦めに縛り上げられた草刈は車で何処かに運び去られた。

目隠しをされ荷台に転がされていたため何処をどう走ったか分からない。

小一時間程走った後、不意に車が止まった。

「降りるんだ！」

ナイロンロープで縛り上げられ身動きできない草刈を担ぎ上げるようにして車から降ろした。

何処かの建物に連れ込まれたことは判るが、目隠しされたままなのでどういう建物か判らなかつたが、下に続く長い階段を下ろされている事は分った。

ドサッと床の上に放り出されて、目隠しを外された。

天上の裸電球が眩しかった。

そこは床も壁も天井もコンクリートむき出しの不気味な小部屋であった。

六畳ほどの広さしか無く、壁際に段ボール箱が無造作に積み上げられていた。

頑丈そうな鉄扉が二つ向かい合って部屋の前後に在り、一つは階段に通じる自分が連れ込まれた扉だと分った。

角刈りとパンチパーマが草刈を縛り上げていたナイロンロープを解き出した。

「お前達は何者だ！ここは何処だ！」

不気味な雰囲気には耐えられず大声を上げた。

男達は無言でロープを解いた。

そして、更に草刈の服に手を掛け、脱がし始めた。

「止めろ！何をする！」

必死に暴れ回ったが屈強な二人の男の前には敵わなかった。

上半身裸にされ、ズボンを脱がされ更にパンツ迄奪い取られた。

無言だった男達が初めて口を開いた。

「お前、^{やさおとこ}優男のくせに立派なモノを持っているじゃ無いか！」

隠す物が無くなった股間を見詰めて面白そうに大声を上げた。

「そこいらの汁男優が泣いて頭を下げるぜ！」

と、せせら笑った。

「ここに居る時は素っ裸で居るってのが定法だ！」

二人は草刈の抵抗を封じる様に後ろ手錠をさせると無理やり立たせた。

強い力で全裸の草刈を抱え込むと、目の前の鉄扉を開けて次の部屋に押し入れた。

そこは前より広い、やはりコンクリートむき出しの部屋で、薄暗い灯りの中に大きな鉄製の檻が置かれているのが分かった。

檻の中には簡素なベッドが一つ置かれており、若い女がベッドの上で毛布に身を包み項垂れていた。

「ほら！仲間を連れて来てやったぞ！」

と、檻の中の女に声を掛けた。

パンチパーマの声に女は怯えて毛布をしっかりと掴んだ。

「これで女市長のペットが二匹揃った一てもんだ！」

「今入れてやるから仲良くやるんだぞ！」

と、檻の扉を開けて、後ろ手に拘束していた手錠を外して、中に蹴り入れた。

「ベッドは一つしかないが、大きいから二人で寝ても落ちることは無いだろう」
と笑い上げガシャンと扉を閉ざした。

薄暗闇の中に二人は残された。

突然全裸で放り込まれた男に女は怯えて毛布をきつく身体に巻き付けていた。

若い女の前に全裸姿を晒す草刈は恥ずかしそうに股間を押えて俯いていた。

シーンとした部屋の中で、何時しか二人はオズオズと互いの顔を見合わせ始めた。

暗闇に目が慣れて来ると二人は互いに叫び声を発した。

其処に閉じ込められていたのは、佐伯市長の応援でボランティア活動をしていた草刈民雄と矢田恵である事を認識したのであった。

二人は別のボランティアグループに属しており、言葉を交わしたことは無かったが、選挙応援中に何度か顔を合わせた事はあったので覚えていたのだった。

惨めな姿での対面となり二人は再び顔を背けて項垂れてしまった。

そして何時しか、あの時、瞬間で顔を確認する余裕は無かったが、草刈は理沙と抱き合っていた場面を目撃した女性が矢田恵では無かったかと思い始め、恵も理沙と抱き合っていた男が草刈民雄で無かったかと思い始めていた。

「ほう、これは市長、お加減は如何ですか？」

次の日、赤いバラの花束を抱え理沙が幽閉されている特別室に入って来たのは前市長の多良古であった。

ニヤニヤと薄笑いを浮かべて理沙に近付いて来た。

「この院長から市長が入院されたとの連絡を受けてお見舞いに来たんですよ」

前市長の悠然とした態度にベッドに括りつけられ身動きを封じられている理沙は恐怖を覚えた。

理沙はベッドの上に仰向けに寝かされ、顔だけ出して全身に薄い掛け布団が掛けられていた。ベッドの横にはステンレスのポールが立てられ、点滴のバックが吊り下げられ、細いチューブが布団の中に入っていた。

布団の下肢の辺りからも、透明のシリコンチューブが出ており、その先端はベッドの下に置かれたガラス瓶の中に入れていた。

大きなガラス瓶の中には三分の一ほど黄色い液体が溜まり、今また透明チューブの中を黄色

い液滴が通過して行き、ポチャンと瓶の中に落下した。

「これは、これは市長！ようこそおいで下さいました」

ベッドの傍らに置かれた椅子に腰を降ろして、理沙の方を見詰めていた蛭沢が立ち上がって挨拶した。

蛭沢にとって市長とは理沙の事ではなく前市長の多良古の意味であった。

「で・・・容体はどうなんだ？」

淫靡に頬を歪めながら蛭沢に問い掛けた。

「はい、淫乱症というのか多発性発情症というのか、病名は院長に聞いてもらった方が良いでしょう。緊急入院して貰って治療を受けさせているところです。」

蛭沢の出鱈目な説明に悔し涙を浮かべて違う違うと言う様に激しく首を振った。

「今は落ち着いてますが時々狂った様に男を欲しがってどうしようもありません！時々こんな物で症状を落ち着かせるのですわ！」

手にしたピンク色のローターを振り子のように振って見せてゲラゲラと大笑いをするのだった。

「佐伯さん、おかげんは如何ですか？」

院長が二人の男性看護師を連れて特別室に入って来た。

病室のソファに腰を降ろす前市長に気付いて、

「これはこれは、市長ようこそお出で下さいました」と、慇懃に挨拶した。

毒島院長にとっても市長は前市長の多良古なのであった。

「佐伯さん、お布団を捲りますよ・・・」

ベッドの横に立った看護師が布団の端を掴んで捲り上げた。

その姿に多良古が思わず息を呑んだ。

理沙の手足はベッドを囲む鉄パイプにベルトで縛り付けられ、マットレスの上に仰向けで大の字に固定されていた。

一応寝間着は着せられていたが、前は大きく開けられ下に何も着ていない裸姿であった。

左右に広げられた寝間着の胸部分から白い大きな乳房がこれみよがしに露出していた。

大の字に割られた股間には、昨日まで在った黒い茂みは無くなっており、小高く盛り上がったビーナスの丘の頂点付近一すなわち肉の花弁の起点部分には小さなガーゼが絆創膏で貼

り付けられていた。

ガーゼの大きさは余りにも小さく秘裂全体を隠すには足りず、シリコンチューブを挿入された尿道孔やその下の女芯や会陰部分は丸見えであった。

隠すことも叶わず裸身を敵方の男達に見られる羞恥に一瞬膀胱が激しく収縮し導尿カテーテルを通して大量の尿が流れ込みバシャバシャと音を立てて下のガラス瓶に落下した。

「ちょっと傷口を見させて貰いますよ・・・」

院長が秘裂の頂点を僅かに覆っていたガーゼを取り去った。

男達が注視するその部分には院長の手により包皮を切り取られた赤く染まったクリトリスが在った。

女性の包茎手術を受けたその部分はまだ薄っすらと血が滲み痛々しく腫れあがっていた。

「まだちょっと腫れているみたいですが、経過は良好の様ですね」

事務的に言うと、何やら黄色味を帯びた透明の軟膏のような薬が入った容器を手に取り、指先に掬うと丹念に露出した女核の周囲に塗り込め始めた。

アア・・・イヤ・・・院長の指先を敏感な部分に感じて、露出した突起を捏ね回される感覚に悲鳴を上げた。

「心配しなくともただの化膿止めですよ・・・まあちょっと媚薬も混ぜてありますが・・・」

ニヤッと口元を歪ませてほざいた。

院長の言う様に軟膏を塗り込まれたその部分は痛痒く痺れジンジンと熱を帯びて来るように感じられた。

「今まで包皮で押さえ付けられていた部分が、外部からの締め付けを失って一段と大きくなったようね。このままヒyaluron酸を注射したりして、治療を続けて行けば小指の先位の立派なクリトリスに成長しますよ」

その部分から込み上げる痛切な刺激にヒイヒイと喘ぎ声を上げる理沙の反応を楽しむように指先で突起部分を転がしながら言った。

院長が弄ぶ肉芽がまた一段と大きく膨張したように感じられた。

「この女はレズで何時も相手の女とソコを擦り合わせているから敏感なはずや！大きなおサネを持ったらもっと感じるはずやで！」

何時の間にか部屋に入って来た根津が大嗤いしながら揶揄した。

「この女は元々ココに毛が生えてないのか？」

多良古が興味深げにその部分をジロジロ見詰めながら質問した。

「そんなはずないじゃありませんか」

院長がいかに可笑しくってしょうがないと言うように甲高い笑い声を上げた。

「包茎手術の際に邪魔だから綺麗さっぱりと私が剃り上げたんですよ」

男性看護師が代わりに答えた。

「全く剃毛される時のこの女の恥ずかしがり方って言ったらありませんでしたな！録画してありますから後でゆっくり御覧下さい」

その時の様子を思い出しながら蛭沢が言葉を継いだ。

矢田恵と草刈民雄が幽閉されている謎の地下牢、恵はベッドで毛布に包まり、草刈は毛布を身体に巻き付け床で寝ていた。

恵がベッドを譲ると言ったが、草刈が固辞していたためだった。

二人は互いの顔を知っている程度でそれほど親密では無かったので、一緒にベッドで寝る気にはなれなかった。それには恵の男性恐怖症も原因となっていた。

突然薄暗かった地下室に灯りが点りパッと明るくなった。

昨日草刈が閉じ込められた際には薄暗かったので、鉄檻の置かれ地下室の様子は判らなかったが、照明に照らされてその内部が明らかになるとゾッとするものを感じた。

其処には十字型やX字型などの様々な拘束台が無造作に置かれ、壁面には先端の割れた鞭や長い鞭など各種の鞭や男性器を模した淫具などが掛けられていた。

その他壁に沿って置かれていた棚には不気味な器具が並べられていた。

鉄扉が開いて、例のパンチパーマと角刈りの二人が笑い合いながら入って来た。

「ほら、出るんだ！今日も拡張の練習の時間だ」

パンチパーマが牢の中に呼び掛けると、その声に恵がイヤー！と狂った様に泣き叫び始めた。

二人は檻の中に入って来て、恵が身体に巻き付けていた毛布を剥ぎ取り、強引に連れ出そうとした。

恐怖に駆られた恵は助けを求めるように草刈にしがみ付いたが、二人は力任せに引き剥がし、牢の外に連れ出して、草刈一人を残して扉に鍵を掛けた。

ヒステリックに泣き叫ぶ恵を上面が黒革張りの跳び箱の様な台の上でうつ伏せに押しえ付

けると、藻掻き回る手足を台の四隅にベルトで固定した。

「全く何時まで経っても世話を焼かせる小娘だぜ」と、吐き出す様に言うと、壁に掛けられていた責め具を手を取った。

鉄格子を握り締めて男達の行動を見詰めていた草刈の表情が変わった。

イヤァッ！恵の悲鳴が地下室全体に響き渡った。

その酸鼻な光景に、鉄格子を握り締めたまま「止めろ！止めてくれー！」と悲痛な叫び声を発した。

草刈にとって矢田恵は単に顔を知っているという程度の仲で、友達でも、ましてや恋人でも無かったが、持ち前の正義感から自分の目の前でか弱い女が男達から虐待されているのに何も助ける事が出来ない自分が悔しくて叫び続けるのであった。

「この男煩いぜ！」牢の中から叫び声を上げる草刈に辟易とした声を上げた。

「此奴にも拡張訓練を受けさせてやろうか？」

と、互いに顔を見交わしてニヤッと笑った。

「市長、良い時にいらした。これから経膣エコーやスコープカメラを使って、この女の子宮頸癌と子宮癌の検査や大腸検査を実施します。是非立ち会って下さい」

蛭沢が多良古にお追従をするように言った。

また診療を騙った女体責めに会うのかと悲痛な気持ちに襲われた。

「大腸検査の前にお腹の中を綺麗にしておかなければなりません」

看護師が浣腸の準備をしながら言った。

「この女、便秘がちやから大量に溜まっている筈や！」

根津が愉快そうに声を上げた。

点滴のバックを吊るしたステンレス棒の傍らに新たに2リットル入りのイルリガートルの容器が吊るされた。

看護師は四肢を繋ぎ留めていたベルトを外し、両手を後手に縛り上げると、ベッドの上うつ伏せに寝かした。

そして腰に手を掛け、顔と胸で体重を支え、尻が上を向くような姿勢を取らせた。

無防備な臀部を卑劣な男達に向けたまま膝立ちする屈辱のポーズを強制されても屈強な看

護師の力の前に屈せざるを得ない現実に悔し泣きした。

看護師たちはそんな理沙の悲哀を気に掛ける事無くテキパキと準備を進めた。

イルリガートルから長く伸びたホースの先に取り付けられた挿入管にワセリンを塗り付け、
「佐伯さん、これから管を差し込みますよ、痛かったら痛いと言って下さいね・・・」

と口にする、菊蕾の中心にズブリと突き立てた。

その気味の悪い感触に後ろ手に縛られた掌がギュッと握り締められた。

痛かったら痛いと言えと事前に告げたのは単なる決まり文句であり、どんなに理沙が悲鳴を上げ拒絶しようと手加減する気は最初から無かった。

グイグイと奥まで押し込むとコックを緩めた。

生温い希釈グリセリン液が怒涛の様に理沙の腸内に流れ込み始めた。

透明ガラス瓶の中の浣腸液の液面が見る見る下がって行った。

腸内に流れ込む大量の浣腸液に腸が張り、呻き声を漏らした。

「もう少し滴下流量を抑えて」

院長が注意した。

しかしこれは理沙の苦悶を見ての優しさでは無く、逆に長時間苦しむ姿を見たいとの嗜虐の欲望による指示であった。

液面の低下速度が急に遅くなった。

「ああ・・・もうもう・・・」

苦悶の表情を浮かべて呻き声を上げた。

禍々しい液を大量に注ぎ込まれ、少し膨れたように見える下を向いた白い腹がブルブルと蠢き、ギョルギョルと鳴る腸の悲鳴が周囲の者の耳に達した。

「苦しい？でも駄目よ。まだ半分残っているからね。全部飲み込むまで我慢するのよ」

院長が痙攣する腹に下から手を差し入れ撫でながら宣告した。

「アアッ・・・苦しい・・・もう耐えられな・・・」

透明シリコンチューブを尻尾のように垂らしながら、苦し気に尻を振り続けた。

「ふふふ・・・苦しいでしょう？でもこの苦しさが浣腸の醍醐味なのよ・・・アナタも浣腸の楽しさをこれからその体で覚えることになるのよ・・・ここに居る間に何度も浣腸をやって上げるわ・・・」

双臀にピッシヨリと汗を浮かべ苦悶する理沙の様子を淫靡な目で見詰めながら囁くように言った。

男達も目を血走らせて悶絶の尻振りダンスを見詰めた。

静かな病室には断末魔に追い詰められた女の喘ぎ声と男達の生唾を飲み込む音だけが聞こえていた。

「ふふ・・・後 500cc よ・・・もう我慢できないの?・・・」

激しい理沙の尻振りダンスを見詰め、医療用手袋を詰めながら言った。

「可哀そうにね・・・ウンチの事を忘れられるように少し助けて上げるわ」

ゴム手袋を填めた手で、噴き出す汗でビッショリ濡れた双臀を撫でまわした。

一頻り撫でまわすと、右手の中指を浣腸液のチューブを挿入された後孔の直ぐ下に開いた女性生殖器の開口にズブリと突き立てた。

「ふふ・・・濡れているわ・・・やはりアナタこんな事が好きなんでしょ?」

女肉内に埋め込んだ指先で内部をまさぐりながら、薄笑いを浮かべて訊いた。

肉洞内を撫でまわす指先に薄い隔壁を通して痙攣する腸管の蠢きが伝わって来る。

「アアーッ・・・違うわ・・・」

シーツに顔を押し付けたまま必死に否定した。

「ふふ、違わないわよ。この濡れた指は何だというの?汗だと言うつもり?」

女肉から抜き取った淫液に濡れた指先を見せつけながら問い詰めた。

「アナタはこんな事が大好きなマゾ牝なのよ!」

「違うわ!違うわ!」

まるで催眠術の暗示を掛けるような女性院長の言葉を必死に否定し続けた。

人差し指も加えた二本の指で内部を捏ね回される気味の悪い感触が、腸全体から発する激痛と交じり合い、ドクンドクンと激しく心臓が鼓動し、意識が薄れそうになりながらも、ともすると不思議な感覚にジワジワと変化して行くように感じ始めていた。

(こんな事で感じるはずが無い!私はマゾ牝なんかじゃない!)と、激しく頭を振りながら否定し続けるのだった。

看護師たちが見詰める前で、ガラス容器内の液面はどんどん下がり、遂にイルリガートル内の浣腸液は全て理沙の腸内に注ぎ込まれた。

男性看護師は手慣れた手付きでコックを閉め、理沙の肛門に突き立てられていた嘴管を抜き取った。

「ああ・・・お願いします!トイレに行かせてください!」

込み上げる排泄の欲求に顔を歪ませて哀願した。

理沙が閉じ込められていたのは特別室であったから部屋の中にトイレやシャワールームも設置されていた。

「駄目よ！ココにするのよ」

看護師が持って来たガラス容器を指さしながら、冷たい笑みを浮かべて拒絶した。

ヨッコイショと、看護師が床に置いたのは見たことも無い大きさのガラスビーカーであった！

学校の化学実験の授業でビーカーを使ったことはあるが、精々500ccや1Lの物であった。

ベッドの傍に置かれたそれは形こそ通常のビーカーを拡大した物であったが、何と20L容量の物であった。

男性看護師は後手に縛られたままの理沙の身体を軽々と持ち上げ、巨大ビーカーの上に載せ上げた。

ビーカーの大きさはほとんどストール位の高さと同径だったので、まるで化粧台の丸椅子に腰を降ろしたような姿となったが、透明のガラスを通して粘り樹液を滲ませる秘裂も苦し気にピクピクと収縮を繰り返す菊の蕾も丸見えであった。

「さあ、しても良いのよ・・・」

院長が悪魔の囁きを送った。

イヤ、イヤと、敵方の人々の目の前で無残な敗北の姿を晒す惨めさに耐え抜こうとしたが、腸内を暴れまわる濁流の圧力は我慢の限界を超えるものであった。

ビビビィー!!と布地を裂く様な大きな炸裂音が部屋に木魂し、遂に放出が始まった。

その激烈な汚濁の液塊はビーカーの底を激しく叩き、跳ね返った濁液はビーカーの縁に黄褐色のスクリーンを作り、滴り落ちて行った。

血走った目で見詰める前市長や副市長達は、「おおー！臭い！」と大げさに眉を顰め手を叩いて笑い転げた。

あまりの恥ずかしさと惨めさに手で顔を覆ってしまいたいところであったが、両手を後手に縛り上げられた状態ではそれも叶わなかった。

顔を真っ赤に染めて、イヤーッ！見ないで！と髪を振り乱して泣き叫んだ。

そんな理沙の悲痛な叫び声を嘲笑うように二度目の発作が始まった。

肛孔を押し広げて噴き出した濁流は土砂降りとなって降り注いだ。

なみなみと注ぎ入れられた黄褐色のスープには直腸を扼していた黒褐色の硬化した便塊の破片がブカブカと浮かんでいた。

注ぎ入れた浣腸液と腸液の大半を放出し終えたと予想した院長がビーカーを取り換えるように命じた。

「これからが第二幕の始まりよ・・・」

院長が笑いながら口にした。

粗方の浣腸液を排出しても腸の痙攣は治まらなかった。

「アアーッ！イヤァッ！」

絶叫と供に新しいビーカーの上に降ろした尻の狭間からブリブリと大量の便が流れ出しビーカーの底に蜷局を巻いていった。

「太い糞が一本に繋がって垂れているで！」

肛口から垂れ下がりビーカーの底まで達している便塊を目にして大笑いした。

「まだ出て来るで！」

次々と奥から押し出されてくる大量の汚物の量に目を見張った。

「全く、お前はどんだけ腹の中にウンコを溜め込んでいるのだ？」

前市長たちは床に這いつくばって巨大ビーカーを取り囲み、大げさに鼻を摘まんで擲揶い続けた。

ビーカーの底には大量の汚物の山が積み上げられていた。

体内に貯留していたほとんどの便は排出され、時々ブリッブリッという音と共に小振りの汚物が放出されるだけとなっていた。

「もう、良いの？」

理沙の様子を観察しながら女性院長が問い掛けた。

「待って・・・後少し・・・」

嵐のように荒れ狂っていた腸管の痙攣は治まり、少しばかりの残便感を残すだけとなっていた。

ウンと息んで最後の一欠片かけらが落下した時、突然股間の前の方から黄色い放水が始まりビーカーの縁を激しく叩いた。

ビーカーのガラス壁に沿って流れ落ちる黄色いシャワーに男達は歓声を上げた。

最早自分の力では止める事は出来ず、イヤイヤと泣きじゃくりながら凄まじかった浣腸の後仕舞いを続けるのだった。

この後 500cc のガラス浣腸器で微温水を何度も流し込まれ、もはや無色透明の液しか流れ出なくなるまで腸内を洗浄された。

「それじゃ、準備出来た様ね。これから大腸検査に行くわよ！」

顔面蒼白になり力無く床に倒れ伏す理沙に声を掛けた。

「これは何か知ってる？留置カテーテルっていうのよ」

理沙の目の前に不気味なチューブを突き付けて女性院長が言った。

「ココをシュコシュコするとね・・・ほら、膨らんだでしょ」

微笑みながら太いカテーテルの先端付近のバルーンを膨らませて見せた。

「この太い管をねアンタのウンチの穴に突っ込んで先端の風船を膨らませれば、直腸の中で膨らんで抜けなくなるのよ」

理沙の恐怖心を煽るようにそんな言い方をするのであった。

男性看護師により診査台の上に犬のように四つん這いの姿勢を取らされると、カテーテルの挿入が始まった。

アア・・・痛いとの苦悶の声も聴かず、グイグイと中に挿入するとバルーンを膨らませ始めた。気味の悪い感覚に呻き声を上げた。肛門のすぐ後ろの腹の中で異物が膨張して行くのが感じられた。

挿入が終わると次にカテーテルにチューブを接続した。

院長や悪人共はレントゲン操作室のガラス窓越しに作業を見詰めていた。

総ての作業が終了した事を確認して、ポンプの始動ボタンを押した。

低いうなりを上げてポンプがバリューム溶液を吸い上げ、カテーテルに接続したチューブに流し込んで行く。

後腔を通して何か生温い物が体内に侵入して来るのを感じた。

それは浣腸液とは異なる何かずっしりとした重さを感じるものであった。

「おお！入って行くぞ！」操作室でレントゲンモニターを見ている男達が歓声を上げた。

レントゲン画面にはバリュームが黒い影となって腸内に流れ込んで行く様子が映し出されていた。大腸の形にそって侵入して行く黒い影を、苦悶する理沙の姿をガラス越しに見つつモニター画面と見比べて歓声をあげるのだった。

浣腸液と違って腸の痙攣を誘発しない、重量感のある液体を腸内に充填されて行きながら、

その気味の悪い感触に苦悶の声を上げて腰を揺すった。

「どう？面白いでしょ・」

モニター画面に白く映る女体のシルエットの中を黒い影となって大腸の内壁にそって満たされて行くバリウムの様子を目を血走らせて眺め続けた。

「体位を変えさせてちょうだい」

院長が男性看護師に命じた。

二人はレントゲン操作室から出て、検診台上の理沙の方に向かって来た。

尻にバリウムのチューブを突き立てたまま、うつ伏せの姿勢から仰向けの姿勢に変えさせた。依然バリウムは流れ込み続けていた。

再び検診台が動き始め撮影が始まった。

手足を検診台の上に縛り付けられていたので、台から落下することは無かったが、頭が下になったり身体が横になったり台は動き続けた。

「どう？面白いでしょ？こうやってバリウムを腸の壁に貼り付けるのよ」

院長が機械を操作して見せた。

モニター画面には腸の形に沿ってバリウムが黒い影を作っていた。

その間にもポンプからどんどんバリウムが流し込まれていた。

大腸を内部から押し上げるような圧力に堪らず「もう、止めてー！」と、身を震わせて泣き叫んだ。

「これからが、面白くなるわよ」

院長が操作すると、ボクシングのグローブの様な革製のボールが付いた腕が検査台の横から延びて来た。

そして、腹の上で狙いを定めると降りて来てググッとバリウムで満たされた腹を押した。

「ギヤー！痛い！押さないで！」

バリウムでパンパンに張った大腸に上から圧力を掛けられる苦痛に悲鳴を上げた。

「これをこうすれば良いのか？」

男達は院長から教わった操作方法で腹の方々を散々押し立てて悲鳴を上げ続けさせた。

こうして、医療検査装置で散々いたぶった後やっと解放された。

単調にバリウムを送り続けていたポンプは止められ、バリウムの液漏れとカテーテルが抜け落ちるのを防止していたバルーンの空気を抜かれた。

院長は意地悪く空気を完全に抜かず、まだ少し膨らませていたままだった。

検査台の上で犬の様に四つん這いの姿勢を取らされていた理沙の肛口はカテーテルを引っ張られるとバルーンに押し広げられ菊花の皺を完全に失い、外部に向かって大きく広がった丸い開口からピンク色のカテーテルとバルーンの基部が姿を現した。

「アアーッ！無理よ！出ないわ！」

外に向かって引き釣り出されようとしているバルーンの直径にアヌスが悲鳴を上げた。

「変ね？出るはずなんだけど・・・」

白々しく言うとなおもクイックイッとカテーテルを引っ張った。

その外に向かって引っ張るリズムが、苦悶する理沙の肉体に奇妙な刺激を与えていた。

大腸の内部から込み上げる重苦しい膨満感とリズムカルに引っ張られる刺激は最初は苦痛でしか無かったが、熟れた女肉は肉体の持ち主の意志を裏切り、じわじわと秘密の花園が潤い始めていた。

その女体の変化に逸早く気付いた院長が、「ホホホ、貴女こうやって肛門を虐められるのが好きなんでしょう？」と、問い掛けて来た。

「違います！好きなんかじゃありません！」

実際直腸や肛門周りの気味の悪い刺激に激しく首を振って否定した。

「嘘おっしやい！貴女の女性器はこんなに濡れているわよ！」

と言うと、女芯にゴム手袋を填めた指でズブリと突き立てた。

そして指先を曲げて薄い隔壁越しに直腸内に膨らんだままのバルーンを膈壁越しにまさぐった。

「ああーっ！イヤ！」

「ホホ、こうやって内側からなぞられると気持ちが良いでしょ？」

「そんな事ありません！」

「嘘おっしやい。こうしてなぞっているとイヤらしい牝の汁がドンドン出て来るわよ。貴女は生まれつきのアナルマゾなのよ・・・」

理沙の潜在意識に暗示を刷り込むように二つの秘部を責めながら耳下に顔を近付け、鼓膜に流し込む様に言った。

「ほら、こうやっている間にも貴女のウンチの穴が興奮してドンドン開いて来るわよ」

肛孔と牝芯を同時に弄ばれ身悶える理沙の反応を楽しみながら囁いを浮かべた。

直腸内に埋め込まれたバルーンが肛門のすぼまりを押し分けてスポン！と音を立てて抜けた。

その瞬間理沙の頭の中が白くなった。

そんな理沙の状態を見逃さず「貴女、さっき逝ったでしょう？」と、問い掛けて来た。

「イッて何かいません！」

院長の言葉に必死に頭を振った。院長が暗示を掛けるように言った『アナルマゾ』と云う言葉に必死に否定するように。

「そう？まあ、何回か確かめてみれば分かるわ・・・」

その後何回もカテーテルを腸内に挿入され中途半端にバルーンを膨らまされ、尻穴から抜き出す行為を繰り返された。

台の上で四つん這いの姿勢を取らされていた理沙は最早姿勢を維持することが出来ず頭から台の上に倒れハアハアと荒い息を吐きながらうつ伏せの姿勢となっていた。

「見ろよ！尻の穴が開きっぱなしだぜ！」

何度も虐待され閉じる力を失った肛口がしどけなく開いた太股の間でポツカリと口を開いていた。

「へへ・・・それに尻の穴がピクピクしているぜ」

男達が哀れな女性市長の肛門観察に夢中になっている間に院長は看護師に命じて便器を運ばせた。

肛虐の末に絶頂を極めさせられグツタリと力無く横たわる理沙の目の前に便器を突き出した。

「さあ、早く腸の中のバリュームを出すのよ！」

倒れ伏す理沙は虚ろな目でホーロー製の白い便器を見詰めていた。

看護師に身体を持ち上げられ検査台の上に置かれた便器を跨ぐ姿勢を取らされた。

「さあ！早く始めるのよ！お腹の中でバリュームが固まったら大変よ！」

自分の排泄物では無いが、再び疑似排便行為を男達の目に晒す羞恥に堪えられず

「お願い・・・許して・・・」

と、咽び泣いた。

院長はそんな女性市長の哀願も無視して放出を促す様に豊かに張った尻をピシヤリと叩いた。

「おお！出てきたで！」

バルーンにより痛めつけられた肛孔から白い物が流れ出した。

やがてそれはクリームを垂らしたようなウネウネとした流れとなって便器の中に注ぎ込まれて行った。

「真っ白いウンコというのも何かシュールですな」

理沙の肛口からゆっくりと流れ落ちるバリュームを検査台を取り囲む様に身体を寄せて、下から何かに取り憑かれたように見上げていた。

次々と肛口から流れ出る便の様な悪臭の無い真っ白い物体を何か神秘的な物を見る様に注視し続けた。

譫妄(せんもう)

「貴方この女とやりたいんでしょ？」

本日の診察という名の拷問の予定を全て終了して、病室に戻されベッドの上でグッタリと半ば放心状態の理沙を濁った眼で見詰める前市長に院長が問い掛けた。

1 日中淫靡な拷問に立ち会い、男の残忍性と攻撃性が掻き揚げられていた多良古は哀れな犠牲の女に食指を伸ばしたいと願っていたのを院長に見抜かれたのだった。

「良いわよ、やっても。丁度この女は生理中だから生でやっても妊娠の心配は無いから後腐れが無いわよ」

選挙で理沙に敗北して以来、屈辱感からくる歪んだ恨みの感情を抱いていた多良古は理沙の貞節を犯すことにより復讐できると、勇んで自分の着ている服を脱ぎ捨てると、ベッドにぐったり横たわる理沙の上に身体を重ねて行った。

突然男の圧力を裸身に感じ意識を取り戻し悲鳴を上げた。

必死に身を振り巨体に組み敷かれた身体を逃そうと藻掻いたが、多良古にガッシリと抱き締められ、身動きを封じられた。

得物に狙いを定めた蛇の様に鎌首を擡げたソレは理沙の剃毛された秘裂にジワジワと侵入を始めていた。

「イヤー！イヤー！」

自分に対して理不尽な恨みを抱く男の熱く熱を帯びた鉄棒が柔肉を押し開き体内に侵入して来る感触に悲鳴を上げ続けた。

「もう少し、もう少し・・・」

後少し、この狭い肉の狭間を突き抜ければ自分の敵討ちが完遂すると激しい理沙の抵抗を封じて押し入れ続けた。

「ああ・・・」

遂に怒れる肉柱を根元まで押し入れることに成功し快哉の声を上げた。

一方、理沙は自分の女である部分が完全に嗜虐者の男を受け入れた事を感じ絶望の悲鳴を上げ身体を震わせた。

女市長の上に重なり復讐の刃を深々と下腹に突き立てた前市長は勝利の快感に浸っていた。そして、自分の分身を締め付けるこの膾肉は何たる甘美なものだろう！と感慨に浸っていた。後は自分の肉柱を前後に動かし、この女を完全に敗北するまで追い込めば自分の復讐は完成すると、肉茎を包み込む絶妙な柔肉の感触を楽しみながらゆっくりと腰を動かし始めた。

全身汗まみれになりハアハアと荒い息を吐きながら腰を突き立て続けていた。

既に敗残の女性市長は何度も前市長に抱かれながら絶頂を極める無残な姿を晒し、多良古は心地良い勝利の美酒に酔っていたが、彼にして見れば一度や二度惨めな状態に追い込んだだけでは恨みを晴らした気になれず、宿敵の女性市長の無残な姿を目にすればするほど益々虐待したいとの欲望を高まらせるのだった。

理沙が頂点を極め、その時の強い締め付けに誘われ、体内に激しく放出したことは一度や二度では無かったが、それでも飽く事無く責め続けていた。

「市長、いい加減に終わらせて下さい。後が瘡えてますから・・・」

多良古に続いて理沙の生肉を貫きたいと思っていた蛭沢が興奮した男根を抑えながら哀願した。

「うるさい！これだけの良い女だ！2発や3発やったくらいで治まるか！」

理沙を組み敷きながら蛭沢の方を睨んで声を上げた。

「それじゃ後ろを使えば良いんじゃない・・・」

その様子を見ていた女性院長が声を掛けた

「後ろ？」

「そうよ、この女浣腸で大分慣らしてやったから後ろの穴も使えるはずよ」

毒島の言葉に喜色を浮かべた蛭沢が、「それじゃ私はこの女の後の初物を頂きます！」と、奇声を発して挑んで行った。

「市長、私はこの女の後を頂くことになりましたので体位を変えて下さい」

多良古はこの蛭沢の依頼を面白いと思って、正常位に近い体位で組み敷いていた理沙の身体を、その中心部分を貫いたままゴロリと上に向けた。

蛭沢の方に背中を向けた姿勢となり、背後からも犯されると戦慄した理沙は必死に身体を藻掻かせたが、下からがっしり多良古の強い力に抱き締められ抗いを封じられた。

理沙の肢の方に跪き、両手でムッチリとボリュームのある双臀を両の手で握り締めグイッと押し開いた。

秘められた部分をあからさまに覗かれて悲鳴が上がった。

蛭沢の見詰める先では多良古の太い肉塊が理沙の女の源泉を深々と抉っており、その僅か上の方では可憐な菊花が多良古の腰の動きに同調してピクピクと花卉を震わしていた。

蛭沢は毒島院長から渡された催淫剤入りの潤滑クリームを指で掬い、薄いセピア色に染まる放射状の皺に塗り始めた。

毒島の悪辣なバルーン責めにより新たな性感として開発されつつある部分に卑劣な男の指先を感じてヒィと悲鳴を上げ身体を悶えさせた。

理沙の身悶えを楽しみながら丹念にその部分の皺を延す様に潤滑クリームを塗りつけた。

更に二本の指先でクリームをたっぷりと掬うとそのままズブリと菊座の中心に埋め込んだ。ゴツゴツした男の指を突然突き立てられ引き攣った悲鳴が上がり背がしなった。

女性市長の反応を楽しみながら二本の指を駆使して膣肉をまさぐった。

薄い肉の壁越しにピストン運動を続ける前市長の怒張を指先に感じ、その肉柱に沿って盛り上がった直腸内の部分を指先で摩った。

「おいおい！俺のモノを撫でるな！俺迄変な気分になって来るじゃ無いか！」

隔壁越しのマッサージを肉塊に感じて前市長が嬉しそうな声を上げた。

玉門を多良古に突き上げられ、裏門から指攻めに遭う理沙が狂った様に叫び声を上げた。

しかし、それは痛みによる悲鳴では無いことを蛭沢は感じていた。

多良古のモノを食い絞める牝洞からは豊富な愛液が噴き出していた。

こんなに柔らかく開いてしまった禁忌の門が、たかが指二本位で痛みを感じるはずは無いと思った。

「それじゃ貴女の後の初物を頂きますよ」

「イヤ！イヤッ！」

蛭沢の非情な宣言に激しい悲鳴を発した。

理沙の拒絶を無視して、自分のいきり立つモノを握って、熱く熱を帯び妖しく蠢く魔物じみ

た媚肉の井戸の中心に押し当てた。

丸い肉坊主が肛門の環状筋肉を押し広げメリメリと侵入して来るのを感じた。

前門を多良古に責められ最早余裕を失っていた会陰部の筋肉が、更に蛭沢からの裏門への強襲を受け悲鳴を上げた。

ヒイヒイと上がる悲鳴を心地良い音楽の様に聞き流し、更に腰に力を込めると、ズイッと付け根まで侵入を果たした。

男二人からサンドウィッチにされた理沙は下腹を占める男二人の肉塊の大きさを思い知らされた。

男二人に前後から刺し貫かれ、苦痛に喘ぎながら

「クッ！・・・憶えてらっしゃい！・・・此処から出たら・・・あなた達の事を絶対に訴えてやるわ！」

苦しい息の下で呻くように言った。

身体は散々蹂躪されながらも、こんな卑劣な男達に負けてなるものかと自分を励ます様に必死に声を絞り上げた。

「佐伯さん、お気の毒ですが此処で起きている事は現実じゃないんですよ・・・」

院長が冷たい目で男達から串刺にされる理沙の顔を覗き込みながら言った。

「譫妄せんもうと云うやつですよ。集中治療室で治療中の患者や高熱に魘されている患者に良く在る事です。高熱や異常事態で脳が正常に働いていない時、現実には在り得ない幻覚や妄想を見てそれを事実と思い込んでしまうのです・・・いくら貴女が退院後世間に訴えても、私が譫妄だと言えば誰も貴女の言う事を信じない。求められたら証拠としてカルテも差し出しますよ・・・」

理沙の最後の抵抗心も打ち砕く様に女性院長が薄笑いを浮かべながら告げた。

巨大な悪の組織に絡め捕らえられた自分にはどうすることも出来ないと、前後の孔を突き立てられながら思い知らされるのであった。

多良古と蛭沢に突き立てられ、のたうつ理沙の姿を見ている内に毒島も体内から沸き上がる興奮を抑えられない様になっていた。

赤くのぼせた貌で二人の男性看護師に「お前達、おいで」と声を掛けた。

院長の命令を受けた二人の看護師が両側に立って院長の白衣を脱がせ始めた。

白衣の下からは、売春婦が身に着けるような扇情的な黒い下着に包まれた肥満した身体が現れた。

脂肪をタツプリと貯め弛んだ尻肉が小さなパンティからはみ出して垂れ下がっていた。

ブラジャーを外すと、胸囲が1メートル20センチは優に超えるであろう巨大な乳房が現われ迫出した腹の上にデロリと垂れた。

二人の男性看護師も白衣を脱ぎ捨て全裸となった。

まるでラグビー選手のようにずんぐりとした筋肉の塊のような姿を現した。

二人は左右から院長の両腕を持ち上げた。

露出した両腋には黒々とした腋毛が繁茂していた。

二人は腋毛に顔を押し当て、腋臭を楽しむように鼻で剛毛を擦った後、舌を伸ばしてジョリジョリと腋毛の上から腋肉を嘗め始めた。

二人の舌の動きに煽られ女性院長が淫靡な声を上げ始めていた。

やがて二人は垂れ下がった乳房を頬張り、口の中で乳首を転がした。

感に堪えなくなった女性院長は長椅子の上に倒れ込み、二人の男性看護師が前後から秘穴に埋め込んだ。

今や病室は二人の女の喘ぎ声と男達の呻き声が交差し淫風が吹き荒れていた。

この男と女の身体から発する生臭い艶めかしい空気に当てられたのか、これまで椅子に座ってじっと様子を眺めていた根津が立ち上がり、二人の男にサンドウィッチにされた理沙の顔の方に近付いた。

そして、クルクルと着物を捲ると股間のモノを露わにした。

熱にうかされた様に霞む目でそれを見て驚きの声を発した。

よく男のモノを、その長さや反り具合や切れ味から刀に例えることがあるが、根津のそれは刀などと言うものでは無かった。それを取えて例えれば、巖流島の決闘で佐々木小次郎の脳天を一撃で砕いた船の櫂であった。

「啞えろ」

理沙を冷たく見下して声を掛けた。

根津の命令を受けて、精一杯口を開いて、それを呑み込んだ。

牽引装置 (Traction device)

病室には熱情を女の二つの穴に注ぎ込みぐったりとした男達がいぎたなく寝ころんでいた。二人の若い男の精を吸い上げた毒島が満ち足りた顔で身体を起こすと、「何時まで寝ているんだい！」と邪険に爪先で蹴って二人の看護師を起こした。

二人の看護師を後ろに連れてぼろ布の様に横たわる理沙の傍に寄った。

前後二つの穴からも口からも泡の混じったネバネバした白い液を垂れ流して完全に意識を喪失していた。

院長の指示を受けた二人の看護師はテキパキと仕事を始めた。

半身で倒れていた理沙の身体を仰向けに直すと、手足を広げてベッドの四隅の鉄パイプにベルトで固定した。

導尿カテーテルを手に尿道孔に挿管しようとする所で流石に違和感に目覚めた。

「目が覚めた？・・・これから何時ものように豆吊りをやってあげるからね」

虚ろな目で見上げる理沙を真上から笑って見下ろしながら言葉を掛けた。

『豆吊り』という言葉聞いて理沙の顔に明らかに恐怖の色が浮かんだ。

多良古の見守る前で、看護師が何やら金属を組み合わせたアーチのような物をガラガラと押して来てベッドを跨ぐ様に固定した。この後一体何が始まるのだ？と、隣でニヤニヤ卑猥な笑みを浮かべている蛭田の顔を見た。

「市長も TV や何かで足を骨折した人がギブスをした脚を吊り上げられているシーンを見たことがあるでしょ？あれは「下肢牽引装具」と言うのよ。これから牽引装具を使ってこの女を引っ張ろうというのよ。でも引っ張るのは脚じゃなくてココ！」

女性院長が笑いながら多良古に説明した。

毒島の指さす先を目にして多良古は大笑いを始めた。

嗜虐者の男女の哄笑を受けながら、またあの過酷な責めを受けると思ってベッドに大の字に固定されながらブルブルと身体を震わせた。

「今日は特別にクリトリスだけじゃなくて乳首も吊って上げるわ」

看護師に新たな装具を運ばせながら恐怖に震える理沙の顔を見詰めて冷酷な言葉を口にしたら。

ベッドの上で大の字に固定され、扇のように開け広げられた股間に手を伸ばし、包皮を切除され剥き出しにされた、小さな亀頭の様な形状の女核に器用な手付きでクルクルと糸を巻き付けた。

「こうやって毎日少しずつ引っ張ったり転がしたり注射したりして、形の良いクリトリスに

仕上げるのよ」

「アッ！痛い！」

院長が縛り上げた糸に緩みが無いことを確認するためツンツンと引っ張ったのだった。

剥き身にされた突起を結んだ糸の端を牽引装具に取り付けた。

嗜虐者達の見詰める前で、適当に張力を調整し牽引された女核はほとんど下腹から引きずり出されそうにピンと伸びた。

女体の中でも特に神経の集中する微妙な部分を引っ張られ、少しでも苦痛を軽減しようとして、キイキイと悲鳴を上げながら尻を浮かせてブリッジに近い体形をとった。

大の字に開かれた股間がマットから浮き上がり、ぶっくりと盛り上がった恥丘や奥深い秘裂や清楚に花咲く肛口も丸出しとなった。

苦痛に呻吟する今の理沙にとって最早羞恥などに構う余裕は無かった。

その間に院長はたっぷりと脂肪をおいた乳房の先の野苺の様な可憐な乳首に糸を巻き付け、同じように牽引した。

糸に引かれて重みのある両乳房がまるでテントを張った様に持ち上げられた。

新たな激痛に理沙の頭の中は白くなった。

激しく収縮した膀胱から大量の尿が吐出され、尿道に挿入されたチューブを通して下の尿瓶にバシャバシャと流れ落ちた。

「さてと、これで良しと・・・」

毒島が出来栄えを観察するように眺めて手を叩いた。

「私達も時々見回りに来るけど、もしもの場合に備えて誰か立ち会って欲しいの」

と男達を見まわした。

「私は昨晚立ち会わせて貰いましたが、流石に市の仕事が溜まっていますので・・・」

「儂も会社の仕事を放っておけんしのう・・・」

「それじゃ私は特に用事は無いので、今夜一晚寝ずの御守をいたしましょう」

多良古が相好を崩しながら口を開いた。

あれだけ新市長の事を甚振り続けたのにまだ馴れ足りないのかーと、看護師が多良古の顔をチラッと窺いながら、この男の恨みの深さに恐怖の様なものを感じた。

「それじゃ市長お願いします」

蛭沢が何やら色々な物が入った箱を手渡ししながら言った。

箱の中身を覗き込む多良古にバイブや筆を取り出して、

「この女があまり痛がるようでしたら時々こんな物で慰めてあげてください。いい声を上げますよ」

と、片目をつぶって見せた。

深夜のシンと静まった病室の中で嗜虐者達は立ち去り、多良古と二人だけで病室に取り残された。

自分に対して理不尽な恨みを抱くこの前市長が発する不気味なオーラが理沙の心を恐怖に押し包んだ。

豆吊りにされて苦悶する理沙に片手にバイブ、もう片手に筆を手にしてニタニタと笑みを浮かべながら股間に近づく淫靡な男の姿があった。

この地獄のような病床に繋がれ、幾度も受け続けた苦痛と恥辱を伴った責めにより混乱する頭では幾日経過したのか分からない。

たぶん一週間くらい経過していると思った。

その間嗜虐者達は存分に理沙の裸身を視姦し、更に身体の内側からも視姦した。

乳房も膀胱内も膣内や子宮内も肛門内も女の秘密にしている部分を全てあからさまにしていた。

毒島院長の手で不気味な薬を塗り込められたり、注射されたり、牽引されたりするクリトリスも毎日その形を変え肥大化して行く様子が分かった。

そして理沙は自分の体調の変化も自覚するようになっていた。

こうしてベッドの上で大の字に固定されていると、モジモジと股間が疼くのを感じ始めていた。

男の陽物やオモチャを入れられず、一人放って置かれる時間に股間の女がジクジクとひくつくのを感じる様になっていた。

恐らく毎日与えられる点滴の薬剤の中に催淫剤の様な物が入っているのだろうと思った。

そして、院長が毎回耳に注ぎ込む様に口にする『マゾ牝』と言う呪いを掛けるような言葉が拒絶しても潜在意識の底に厚く沈積して行くのを感じた。

顕在意識では、このような悪に敢然と立ち向かわなくてはいけないとの思いは変わらないが、

女の身体と潜在意識が顕在意識を裏切り佐伯理沙という一個人が正義への執念と悪鬼達への敗北という二つの方向に分離して行くの感じ、怖気を覚えた。

院長からの朝の診断を受けて暫く時間が経っていた。

人の居なくなった病室に一人取り残され、ベッドの上に大の字に固定され惨めに改造された女の股間が空白の時間を惜しんで何かを求める様に疼くのを感じ、浅ましい自分を恥じ悪鬼達に負けてはいけないと自分を励ますのだった。

そこへ、何時ものように院長の目を盗んで二人の男性看護師が部屋に入って来た。

「全く何時も院長のユルユルコや糞の穴掃除だけじゃやってられないぜ！」

「そうだ、そうだ、たまには若いピチピチした身体も抱かないとな」

「若い女を抱けるとしても、何時も麻酔で眠っている女にゴムを着けてするだけだからな・・・」

「アンタみたいに美人で意識のある女に生で出来るなんて初めてだぜ！」

口々に日頃の不満を呟きながら目の前で服を脱ぎ始めた。

全身逞しい筋肉に覆われ、股間からは天を衝く様に男のモノが隆起していた。

理沙はこの二人の姿を目にして恐怖を覚えたが、同時に改造された女体は長らく待たされた肉欲の渴望を満たされる事にホッとするようなものを感じていた。

二人の男は理沙の手足を大の字に固定していたベルトを外し、身体を摺り寄せて来た。

「院長の臭い腋臭と違ってアンタは良い匂いがするぜ」

仰向けに横たわる理沙の左右に位置した二人の看護師は両側から二の腕を頭上に持ち上げ腋の下に唇を這わせていた。

二人は理沙の白いきめ細かい肌に鼻を摺り寄せ甘美な体臭を楽しんだ後、腋の下の窪みに舌を伸ばし、腋毛を処理された滑らかな肌を楽しんだ。

左右から薄い皮膚を嘗め上げられ、むず痒さを伴った不思議な感覚に堪えようにも身体がピクピクと震えた。

敏感な理沙の反応に満足したように、左右から身体を密着させ、二枚の舌先と四本の腕を駆使して全身を愛撫し始めた。

女性院長の穢れた体の掃除人の様な二人の男性看護師の気味の悪い愛撫に嫌だ嫌だ！と心では嫌悪しながらも、何かを期待する様にゾクゾクと身体が震えるのを抑えることは出来なかった。

腋の下から豊かに実った乳房、勃起し始めた乳首、臍の窪み、改造された肉芽、玉門と裏門

など全身を両手と舌で愛撫し、理沙に甘美な牝の鳴き声を上げさせた。

二人掛の攻撃の前に女体は痺れ熱を持った様にポーとしながらも僅かに残された理性が脳内で悲鳴の様な拒絶の声を上げ続けていたが、悪魔たちにより調教された女体はそんな心の声を黙殺して夥しい愛液を放出していた。

理沙の身体が完全に受け入れ準備が整った事を確認した二人は前後から侵入を開始した。

その鋭い刺激に理沙の脳裏が白くなった。

市長室輪姦

「おめでとう、今日で貴女も退院よ・・・」

何時ものように二人の男性介護士を連れ、検診（検診に名を借りた虐待であったが）に来た毒島院長に向けてベッドの端に腰を降ろし大きく股間を開く理沙の大腿の間に顔を突っ込むように覗き込み、肉体改造で肥大化させた陰核を撫でまわしながら女性院長が口を開いた。本当に自分は今日でこの悪魔の病院から解放されるのかと疑いの気持ちを持ちながら院長の最後の診断を受けていた。

「色と言い、形と言い、大きさと言い、まるでメキシコ料理のチリコンカンのキドニービーンズ（赤えんどう豆）そっくりね・・・」

女性院長が自分の造り上げた傑作を惚れ惚れ見るように間近からそれを眺め続けた。

「最後に私から退院のお祝いのプレゼントを上げるわ」

院長の肥満した上体に隠れ自分の下腹を見ることは出来なかったが、院長の手が何やら動くのが分かった。

ツーウゥ！

突然その部分に激痛が走って身体が硬直した。

院長の身体が退いて、自分の剥き出しの股間を見ることが出来た。

そして、その光景に衝撃が走った。

何と肥大化させられた陰核の付根に金色に輝く金属のリングが取り付けられていたのだった！

金属環に刺し貫かれたばかりの陰核からは赤い血が流れ出ていた。

「ホホホ・・・退院のお祝いに私からピアスを贈るわ」

直径1センチに満たない小さな金属環の中央に金色のボールの様な物を取り付けネジで締上げてピアスは完成した。

止血と化膿止めの軟膏を傷口に塗り込めながら、

「ホホホ・・良いでしょ。歩く度にピアスの金属球がクリトリスを擦って良い気持ちに成るわよ」

と、女核を飾る淫靡な装飾具を撫でまわして笑みをこぼした。

「市長、お迎えに上がりました」

その時病室の扉を開けて蛭沢が入って来た。

大きく開け広げられたままの無毛の股間とその中心に金色に輝くピアスを目にして、

「市長！良い物を貰いましたな！」

と、腹を抱えて大笑いした。

「化膿止めを渡しておくから、後は自分で塗るのよ」

と、例の媚薬が混じった軟膏の容器を手渡した。

「傷口が癒着するといけないから時々自分で回したり引っ張ったりするのよ・・」と、注意した。

「今日一日は、まだ血が滲むからパンティより紙オムツをした方が良いわね」と、男性看護師に命じてオムツを捲かせた。

まるで赤ん坊のようにベッドの上で両脚を持ち上げられてオムツをされる羞恥と屈辱に両手で顔を覆って咽び泣いた。

此処に拉致された時に着ていたブラウスとスーツは返されたが、その下にブラジャーは許されず、タイトスカートの下は紙オムツ一枚であった。

院長が予言した通り歩く度にピアスに取り付けられた球が肥大した女核を意地悪く虐めた。

蛭沢の運転で市役所に戻る道すがら、混乱する頭でこれからの方策を考えた。

警察も市立病院も根津の手が回っている現実を思い知らされた。

恐らく強力な根津の力はそれ以外にも S 市の彼方此方に及んでいるのでは無いかと恐れた。

(しかし、市役所は違う！市役所内での自分の敵は蛭沢一人だ！後は全員自分の味方だ！)

(市役所は自分の城だ)市役所に戻ればまだ巻き返すチャンスは在ると希望を抱いた。

市役所庁舎に一步足を踏み入れた時、雰囲気は全く変わってしまっている事に驚いた。

自分がいた時の明るく快活な雰囲気は影を潜め、重苦しく沈鬱な空気が漂っていた。

以前なら顔を合わせると会釈してくれた職員が、自分と目を合わせることを恐れるようにそっぽを向いて足早に立ち去ってしまうのだ。

自分が病院に幽閉されていたわずかな期間に何が変わってしまったのだろう？と、愕然とした。

住み慣れた市長室に入って更に驚かされた。

壁や天井のあちこちにカメラが設置されていた。

まるで隣の国の街頭のように監視カメラが隙間なく設置されていたのだった！

「市長もこの部屋にカメラが仕掛けられていたことにお気づきだったようですが、草刈の奴がしゃしゃり出て来て総て撤去されてしまいましたね。まあ、バレたのだからコソコソしても仕方がないと大ぴらに再度設置させて貰った訳です」

と、可笑しくって仕方がないと言う様に笑い上げた。

天井や壁のカメラだけでは物足りないと言っても言うかの様に、更に市長の机を取り囲むように三台のカメラが床の上に立てられた三脚の上に設置されていた。

時々カメラがパンしたりズームが動く様子が見られ、今も誰かが監視している事が分かった。

「まあ、草刈のお陰でカメラも高性能な物に代えることが出来ましたから、従来より格段に優れた解像度で市長のお姿を捉えることが出来ます」

その時市長室のドアをノックする音がした。

蛭沢がドアの外に向かって「おう！入れ！」と、声を掛けた。

ドアを開けて何人もの男達がゾロゾロと入って来た。

男達の顔を見て、思わず理沙の喉から驚きの声が上がった。

何と彼らは理沙が覬首した腐敗職員たちだったのだ！

「蛭沢さん！これはどうした事ですか？」

在り得ない現実に愕然としながら問い質した。

「地方自治法第 152 条と云うヤツですな・・・まあ法律の専門家の市長に説明しても『釈迦に説法』という訳でしょうが、市長が病気や怪我などで職務を行えない場合、副市長が市長の代わりに職務を行うことが法律で認められている訳ですわ。市長が病気で入院中だったため副市長である私が市政を見させて貰いました。この男達は市長の錯誤一まあ、勘違いで首に

された訳ですが、私が錯誤を解消し元の職場に元の職位で復職させたという訳ですわ」
蛭沢の説明で見る見る顔が硬直して行くのが分かった。

市長を取り囲む 10 名の男は怒りを含んだ顔で、

「俺達は市長の勘違いで首にされたんだ。一言謝って貰いたいもんだな」
と、凄んだ。

男達の威圧に貌は青ざめ身体がブルブルと震え出していた。

「市長は俺達が土下座して謝っても許してもらえなかったが、俺達は市長と違って寛大だ！
土下座して謝ったら許してやらない事は無いかも知れないな」

左右の男達の顔を見ながら一人が口にした。

腕組みして市長を取り囲む男達もそうだそうだという様に頷いた。

敗北感と絶望感で頭の中が真っ白になった理沙は、フラフラと男達の前に歩み出て、床に膝
御つき土下座の姿勢を取ろうとした。

「ちょっと待て！女が土下座して詫びを入れようというのに服を着たままと云う法は無い
だろう。素っ裸になって誠意を示して貰おう」

怒れる男達の威圧の前に何も考えられなくなった理沙は上着を脱ぎ去り、ブラウスのボタン
に指を掛けた。

ブラウスを脱ぎ捨てると下着を着けていない乳房がこぼれ出た。

「何だ？ブラジャーをしていないのか！」

「それにしても綺麗なオッパイだぜ！」

「巨乳のくせに垂れていないぜ！」

「オッパイの先の乳首も野苺みたいで綺麗だぜ！」

男達は露わとなった F カップは在りそうなツンと尖った美乳に目が釘付けになり、盛んに歓
声を上げた。

男達の熱い視線を受けて放心状態だった理沙も羞恥心が蘇り、小さく悲鳴を上げて両手で剥
き出しの乳房を抱え込み上体を丸めた。

「早くスカートも脱がないか！」

男達はそんな羞恥に立ち竦む理沙に声を上げた。

男達から発せられる高圧的な気配に気圧された理沙は乳房を隠していた手を除けてオズオ
ズとスカートを脱ぎ始めた。

「見ろよ！この女、紙オムツをしてるぜ！」

「お漏らしでもしたのか!？」

男達は理沙の滑稽な姿を指さして笑い転げた。

「さあ！さっさと土下座しろ！」

男達の怒声に圧されて紙オムツ一枚の惨めな姿で膝を着いて床に顔を擦り付けた。

そして土下座の姿勢のまま男達が口々に怒鳴る様に発する理不尽な詫びの言葉を啜り泣きしながら復唱するのだった。

男達は猟奇的な目で紙オムツ一枚で土下座する女市長を見詰めていた。

一頻り恥辱の姿を晒す若い女の裸姿を楽しむと、「やはり、この女を素っ裸にしてみたいもんだな・・・」と、口にした。

「そうだ、そうだ、早く美人市長様のオコを挿ませて貰いたいもんだな」

男達は淫欲に飢えた目で口々に叫んだ。

「ちょっと待て、折角紙オムツをしているんだから子供みたいにお漏らしさせたらどうだ？」
誰かが口を開いた。

「そうだ、そうだ、それは面白い！」

と、賛同の声が上がった。

「市長は今日は朝からオシッコをしていませんから大分溜まっているんじゃないですか？」
横から蛭沢が卑猥な嗤い声を上げた。

男達は床の上に蹲る女性市長の身体を抱え上げ正立させた。

「もっと胸を張って、手を頭の後ろで組むんだ！」

紙オムツ一枚の理沙の裸身を両脚を肩幅に開かせ直立させた。

蛭沢の言う通り今朝カテーテルを抜かれてから一度も排泄しておらず膀胱内にはかなりの量の尿が溜まっているのが意識できた。

「さあ、見てやるから立ちションベンをして見な！」

男達がランランと目を輝かせて、頭の後で手を組みボリュームのある胸を前に突き出して足を開いて立ち尽くす、紙オムツ一枚を身に着けただけの理沙の裸身を取り囲んだ。

理沙にして見れば入院以来初めての自力での排尿であった。

そして、それは同時に屈辱の排尿であった。

長い間カテーテルを嵌められていた尿管がモゾモゾとむず痒く動いた。

シャーッと妙なる音が紙オムツの中から聞こえて来た。同時に水分を吸収した股間の部分が重く膨れだした。

「おお！始めたぞ！」

見守る男達が奇声を上げた。

一人の男が股間に手を伸ばし、大きく膨潤した部分を下から持ち上げて、「重いぞ！温かいぞ！」と歓声を上げた。

自分に憎しみの目を向ける男達の目の前で恥ずかしい排泄姿を晒してしまった理沙は貌を真っ赤に染めて啜り泣きしながら激しく左右に振った。

もう良いのか？との男の声に黙ってコクリと肯いた。

「全く、こんなに出しやがって！ズシリと重いぜ！」

下腹から紙オムツを剥がしながら、その重量感に驚いた声を上げた。

紙オムツの隙間から排尿し終えたばかりの股間が外気に晒され、ムッと湯気の立つような熱気と独特な匂いを立ち昇らせ、近くに顔を寄せていた男達の鼻腔を捉えた。

「おい！この女ココに毛が無いぜ！」

「本当だ！パイパンだ！」

紙オムツを取り去られ剥き出しにされた股間の異様な光景に男達が大声を上げた。

自分の秘密を知られてしまった理沙は、頭の後ろに組んでいた手を解いて顔を覆った。

「おい！この女ココに奇妙な物を着けているぜ！」

陰核を飾るピアスを発見して驚愕の声を上げた。

「こんな物を着けやがって、全く恥知らずの変態女だな！」

クリピアスの球を指先で弾きながら嗤った。

「痛い！引っ張らないで！」

突然ピアスを引っ張られて脳天を直撃するような激痛に身体を強張らせた。

「それにしてもデカイクリトリスをしているな！こんなの見たこと無いぜ！」

まるで赤インゲン豆の様な肉芽を指の腹で撫でて悲鳴を上げさせた。

「大方、好きな男の目の前で自慢のクリを飾り立てて自慢をしていたんだろう」

「アソコを剥き出しにして、デカイクリを突き出して腰を振りながら男を誘惑していたんだろう？この変態女が！」

「俺達にも見せて貰いたいもんだな！」

盛んに揶揄していた男達が辛抱できなくなってベルトを緩めズボンを降ろし始めた。

興奮して先走りの水を垂らし始めた肉茎を剥き出しにして、「もう我慢できん！頂くぜ！」一声叫び、女性市長を押し倒しその上に身体を重ねて行った。

「十人も居るんだから何時順番が回って来るか判らんな」

女性市長と男のカラミを見守りながら、怒張を押し立てて次を待つ男達が口にした。

「この女は全身の三つの口を使えるように開発済みだから同時に三人でやれば良いじゃ無いか」

じっと見ていた蛭沢が待ちぼうけの男達に声を掛けた。

「え?! 後ろも使えるのか?!」

「へへ・・俺一度女の後に突っ込んでみたいと思っていたんだ！」

男達は組み敷かれる理沙の身体に武者ぶりついていった。

市長室は前後の孔を貫かれ更に口腔にも突き立てられて悶える女市長の姿が在った。

更に順番を待つ男達は、理沙の身体に群がり両手で豊満な乳房や腹や大腿を撫でまわした。

「へへ・・女の尻穴がこんなに良いと思わなかったぜ！」

肛口に思いのたけを放出した男が感激して声を上げた。

前後と口に同時に男の飛沫を浴びせられて理沙の身体が痙攣した。

激情に駆られた男達は何度も女の違う部位を責め立て濁液を放出し続けた。

「今日のところはこれ位で許してやるが、まだ俺達の怒りが治まった訳じゃ無いからな！」意識を失い床上に倒れ伏す理沙にそんな捨て台詞を残すと男達はゾロゾロと市長室から出て行った。

男達は理沙の口腔と前門と後門に思い思いに精が涸れ果てるまで報復の攻撃を繰り返してたのである。

全身の三つの穴から男達が放出したものを垂れ流しながら、うつ伏せで死んだように床の上に横たわっていた。

まだ死んでいない事は肩で息をしている事から分かるが、意識は完全に喪失していた。

蛭沢は理沙の覚醒を促す様に乳房の下に靴の爪先を押し込み身体を裏返した。

ボンヤリと空ろな目で見上げると尊大な態度で市長席に腰を降ろす、市長舎の独裁者となった蛭沢の姿があった。

「市長、今度新しい職員を採用することになりました。私の補佐兼市長の秘書という事です。まあ、私もこう見えても副市長として色々忙しいですし、副市長補佐という事と、市長も草刈がいなくなって秘書が必要でしょうから、根津さんの人材派遣会社の紹介で採用することにしました」

机の引き出しから履歴書を取り出すと、理沙の目の前に投げて寄こした。

霞む目で床の上に散らばった履歴書を目にした。

宮藤亀吉 48歳、旧帝大系の東京の国立大学を卒業して、日本最大の総合商社に入社その後ニューヨーク、パリ、ベルリンの現地支社で勤務した後、某国会議員の私設秘書を勤務・・・

(嘘に決まっている！こんな立派な経歴の人間がこんな地方都市の職員になんか来る訳が無い！)

盛り過ぎた経歴から虚偽であると確信した。

貼り付けられた顔写真を見ると、角刈りの頭、頬に残る傷から典型的な反社の人間(!)の顔だった。

新たな牢獄

「明日から宮藤に市長の送り迎えをさせますが、今日のところは私が自宅までお送りします」夜もとっぷりと更け職員も退社し、シンと沈まった庁舎で帰り支度をしながら蛭沢が言った。蛭沢の前に呆然と立つ理沙は、スーツは身に着けているが、その下は裸のままであった。

「まあ、短い道中ですが、途中退屈しないようにこんな物でも填めて行ったらどうですか？」蛭沢が机の引き出しから取り出したのは、あの忌まわしいリモコンバイブレーターだった。無言でバイブを受け取ると、スカートを捲り上げ、飾り毛を失った秘裂に自分でズブズブと押し込んで行った。

片脚を来客用のソファに載せ、股間を押し広げて埋没作業をする市長の姿を見ながら、

「貴女もここ暫くの間に多くの男性と交わり随分と柔軟なオコを持つようになりましたね。以前はあんなに苦勞していたこのバイブが苦も無く入って行くようになった・・・」

「いや・・・おっしゃらないで・・・」

自らの秘奥に野太い淫具を押し込みながら恥ずかしそうに首を振った。

突然アッと声を上げて、腰を振った。

責め具が奥まで納まった事を確認してリモコンのスイッチを入れたのだった。

たちまち激しい前後運動を伴った振動が理沙の牝肉を襲った。

肉洞を搔きまわす淫靡な運動に最早まともに立って歩くことも出来ない理沙に肩を貸す様にして駐車場まで連れて行った

「さあ、着きましたよ」

助手席でシートを深く倒したまま氣息奄々の状態の理沙の方を見ながら言った。

スカートは下腹が見えるまでたくし上がり、しどけなく開いた股間にはいまだにバイブが振動音を上げていた。

フフ・・・と淫靡な笑みを浮かべ、秘奥に埋没していた筒具を抜き取った。

野太い栓を失った女陰の赤黒く充血した開孔からドロリと樹液が流れ出た。

「フフ・・・そんなに良かったですか？シートもグッショリじゃないですか。盛りのついた牝の匂いで車内も一杯ですよ。これでは人にこの車を使わせられないな・・・まあ、市長専用車だからいいですけど・・・」

薄っすらと意識が戻り始めた理沙に

「貴女はこんなモノや男無しでは片時も居られないマゾ牝に成ったんですよ」

「違う・・・私はマゾ牝なんかじゃない・・・」

薄い意識の下で蛭沢の言葉を否定した。

「違わないですよ、ほら貴女がベチョベチョにしたバイブを見て下さい」

理沙の目の前に愛液で塗れたバイブを突き付けた。

理沙の腕を掴んで部屋の前まで連れて行くと、扉の鍵を開けて強引に押し入れた。

自分が暫く居ない間に室内の様子が一変している事に驚いた。

市長室の様に、いやそれ以上に監視カメラがあちこちに取り付けられていた。

「市長室の隠しカメラを撤去された後に新しく監視カメラを設置したように、この部屋の隠しカメラも撤去されてしまったので付け直したんですよ・・・まあ一度バレたもんだからコソコソ隠して設置する必要もない・・・」

高笑いしながら得意げに言った。

真っ青になってアパート内の各部屋を駆け回った。

寝室にも脱衣所にも浴室にもトイレにも所狭しと何台ものカメラが仕掛けられあらゆる方向から自分の事を監視できる事が分かった。

これでは自分の裸の姿も筒抜けになると恐怖して蛭沢の手を振り解き、玄関ドアに駆け寄り逃げ出そうとした。

しかし、ドアは鍵が掛けられており開かなかった。

「無駄ですよ、このドアは一度閉まると内側からは開かない。誰かが外から鍵で開けない限り開かないようになっています・・・まあ、最近は何騒な世の中になって来ましたからセキュリティ強化ってやつですよ・・・」

蒼褪めて狂乱する理沙の様子が面白くって仕方ないと言う様に笑い声を上げた。

「隣の部屋と階下は根津社長の部下が借りていますから、貴女が部屋で大騒ぎしたらすぐ駆けつけるようになっています。

理沙のマンションは4階建ての低層マンションであり理沙の部屋は最上階の角部屋であるため隣と階下を敵の人間に占められたら大声で助けを呼ぶことも出来ないと思った。

ベランダに通じる窓を開けようとしたが固く固定されていた。

（牢に閉じ込められた！今や自分は市長室という牢獄と自宅という牢獄を行き返りするだけの女囚にすぎない！）と、思い知らされた。

そんな悲痛な表情を浮かべる理沙に

「心配しなくても、日常生活に必要な物は届けますから、部屋から出なくても今まで通り気楽に生活して下さい」

と、せせら笑った。

いやな予感に駆られて衣装箆筒に駆け寄り、引き出しを開けた。

其処に入れておいた清楚な下着は全て姿を消し、代わりに夜の女が身に着けるような淫らな下着が置かれていた。

箆筒の前で力無く座り込み、ワナワナ肩を震わせる理沙に、

「これは何か知ってますか？」

と、引き出しの隅に仕舞われた赤、白、黒、青、緑の折りたたまれた布を指さした。

「六尺褌ですよ。まあ市長は今までこんな物を身に着けた事はないと思いますが、着け方をお教えしますよ」

紅い布地を手に取り、パッと広げて自分の股間に押し当てる仕草をしながら、勝ち誇った様に笑い上げた。

「貴女は知らなかったでしょうが、根津社長は色々手広く事業を拡げておられてね。実はこのマンションも根津社長の系列の会社が所有するマンションだったのですよ。

貴女が選挙に当選し、住む所を探していた時に、この部屋を紹介した不動産会社も根津社長の系列会社。この部屋に決めた後、大急ぎで内装工事をしたんですわ・・・盗聴装置や隠しカメラを設置するためのね。貴女は最初から蜘蛛の巣に捕らえられた蝶だったんですよ。矢田恵とのレズプレイも草刈民雄との濡れ場も全部見せて貰いました。尤もこの時はカメラの性能が悪くて解像も甘く、暗い場所では鮮明な画像が撮れませんでした。今度は高性能な物にしましたから、暗い所でもアソコの毛一本まで撮れます。」

自分の隠しておきたいプライバシーも最初から筒抜けだったのかと悔やんだ。

「恵ちゃんを此処に呼び寄せたのもあなた達の陰謀だったのね？」

何故その日に来ないはずの矢田恵が草刈との情事の場に現れたのか原因が分かって愕然とした。

「左様、貴女の名前を騙って、矢田恵にすぐ来て欲しいとメールしたんですよ。今は個人情報メールアドレスを調べるなんて簡単ですからな」

と、得意げに笑った。

「後は、貴女と草刈の情事を目撃してショックを受けた矢田恵を出口で拉致するなど簡単な事でしたよ！」

と、大笑いを続けた。

俯いて哀愁の涙を流す理沙を冷めたい目で見詰めながら、懐からスマホを取り出すと電話を始めた。

直ぐに隣の部屋から人が来て玄関ドアを解錠する音がした。

薄く開いたドアの隙間から顔を出したのは如何にもチンピラ風の若い男であった。

「それじゃ市長、翌朝迎えに参りますから、今日はお疲れでしょうからゆっくりお休み下さい」

と、言い残して立ち去ろうとした。

「あの・・・」

若いチンピラ男が言い難そうに蛭沢に声を掛けた。

「どうした？」

「ジブンこれからこの部屋に居ても良いですか？」

「この部屋に入ると迎えが来るまで出られなくなるぞ」

「こんな綺麗な姐さんと一晩過ごせるなら全然構わないっすよ！」

と、飢えた牡の目で理沙をジロジロと見詰め回した。

反社の男

翌朝その男はやって来た。

想像していた通り、いや想像以上に凶悪な雰囲気漂わせる男だった。

「宮藤って著^{もつ}だ。今日からアンタの秘書—まあ、秘書って言う柄じゃないが、身の周りの世話をする事になった。宜しく頼むぜ」

黒革張りの市長の椅子にどっかりと座り込み、脚を組みながら、目の前に蒼い貌で立つ理沙を値踏みするような目で上から下までジロリと眺めまわした。

「先ず、着ている物を脱いでもらおう」

突然男が発した言葉に、理解出来ずエッ？と声を上げた。

「二度まで言わすな！服を脱げって言ってんだよ！」

凄味のある目で睨み付けた。

まるで凶暴な猛獣の前に立たされた子兎のように怯えて思考は停止したまま、上着を脱いでブラウスのボタンに震える指を掛けた。

「そうだ・・・女の値打ちって物は裸にして見ないと分らない・・・」

大人しく理沙が着ている物を脱ぎ出した事に満足して、舌なめずりしながら淫靡な目でじつと眺めた。

「お前！艶っぽい下着をしてるじゃ無いか！何時も役所が捌けてから夜の街に立って男漁りをしていたんじゃないか？」

黒いガーターに極小のスクランティ、最小の布地で乳首を隠す以外は扇情的なレースデザインの黒い下着姿になった理沙の姿を見て大笑いを始めた。

悪人達の手により自分で買った清楚な下着は全て奪い去られ、代わりに与えられた夜の女が身に着ける様な扇情的な下着スタイルを宮藤の目に晒したのだった。

「イヤ、おっしゃらないで・・・」

恥ずかしい姿をヤクザ風情の男に見せる苦痛にハラハラと涙を流した。

「女の値打ってのは、頭の良し悪しじゃない！顔が良いか、パイオツの形が良いか、腹回りがキュッと絞まっているか、ケツの形が良いかだ！お前中々良いスタイルしてるぜ！市長なんかにしておくのは勿体ないくらいだ！」

極小の布地からはみ出た乳房や股間を両手で隠しながら項垂れる理沙にこのヤクザ男としては最大の賛辞を贈った。

「そして、女の値打ちで最も重要なのはココの良し悪しだ！今から俺が確かめてやるぜ」まるで女を値踏みする女衞のように言うと椅子から立ち上がった。

そして、ズボンのベルトを緩め始めた。

この男は会った早々自分を抱こうとしているのか？と、信じられない思いになった。

ズボンを降ろすと無駄肉の無い筋肉質の大腿が現われた。

身体の上の方から続いていると思われる色鮮やかな刺青が膝まで彫り込まれていた。

そして驚いた事に男はパンツではなく褌を着用していた。

驚いて目を見張る理沙に「何だお前は、六尺褌を見たことが無いのか？お前にも締めさせてやるぜ」と、片頬を歪めた。

クルクルと褌を解くとその下から忌まわしい男のモノがデロリと垂れ下がった。

巨大な陰茎ではあったが太さや長さだけなら根津やこれまで理沙を犯して来た男達の中にそれ以上の男はいたかも知れない。しかし、無数の女から絞り上げた怨念のエキスを浸って来たであろう黒々と淫水焼けしたそれは、幾多の女達をその肉の凶器で刺し殺して来た一とでも言うような有無を言わせぬ圧倒的な凶暴さを醸し出していた。

股間の武器を丸出しにして大股を開いたまま再び市長席にドッカと腰を降ろした。

凶悪な目で理沙に視線を送ると顎をしゃくった。

恐怖に呆然と立ち尽くす理沙に

「お前は馬鹿か！早くしゃぶれと言ってるんだよ！」

(嫌だ！こんなヤクザ男のモノなんか絶対に口を着けたくない)

心の中では激しく拒絶しても、宮藤の全身から発する凶暴なオーラに怖気づき、恐る恐る近づき、開け広げられた股間の前に跪いた。

早くしゃぶれ一とでも言う様に顎をしゃくった。

恐怖に駆られて、ムクムクと鎌首を擡げたそれに唇を押し当てた。

発情した男の臭いと言うより凶暴な野獣の様な臭いが鼻を衝いた。

必死になって舌先でそれを嘗め回し、口に含んで口腔全体を使って愛撫した。

突然頬に激しい衝撃を浴び、目の前に星が瞬くと、床の上に転げ回った。

宮藤が平手で理沙の頬を思い切り殴りつけたのだった。

横面にジーンと痺れを感じ、床の上に身体を崩したまま恐怖に震える目で宮藤を見詰めた。

「お前、売女のくせにやる気があるのか！」

鬼の様な形相で倒れ伏す理沙を睨み付けた。

何時から自分が売春婦に身を墮としたのか分からない。しかし、この男にとっては全ての女が売春婦に見えるのかも知れなかった。

女に対して躊躇する事無く暴力を振るう男に底知れない恐怖を感じ、込み上げる恐慌に駆られて再び宮藤のモノを口に含んだ。

この男の圧倒的な暴力の前には余りにも自分は無力だと思い知らされ、固く隆起した男根を口の中で扱きながら熱い涙が止め処なく流れ落ちた。

「もう良いだろう。パンツを脱いで俺の上に跨れ」

黒革の市長の椅子の上で尊大にふんぞり返る宮藤の股間からは凶悪な男のモノが天を衝いていた。

この凶暴な男の前では拒絶の余地は無いと、身体を起こすと、僅かに身体に残されていた官能的な下着を脱ぎ去って身を寄せた。

スキャンティを脱ぎ捨てた時、一瞬宮藤の視線が無毛の股間とピアスを飾られた肥大したクリトリスを捉えた。

「お前面白い物をしているな・・・」と、片頬を歪め呟いた。

アアーッ！痛い！理沙の口から悲鳴が上がった。

宮藤が面白半分に陰核を扶る金属環を引っ張ったのだった。

「いいから跨れ」

椅子に浅く腰を降ろして、股間から垂直にいきり立つ肉塊を示して冷たく命じた。

もう自分には逃げる道も無いと悲しい諦めをした理沙は椅子に腰掛ける宮藤の上に股を開いた。

片脚を床の上で背伸びをするように伸ばし、もう一方の脚を椅子の座面に載せて無毛の大腿を開き、宮藤の隆起したモノを掴まんで自分の肉洞にあてがった。

理沙が悲痛な努力をする間、覚めた目で飾り毛を失った秘裂の様子を眺め、クリトリスの付

根を貫通するピアスをいじった。

「あーっ」宮藤のモノをその部分で受け止め、尻を落とした時、思わず呻き声が漏れた。

硬くて太くて長いモノが華洞の媚肉を押し分けグイグイと侵入して来た。

今や理沙は正面から身体を預ける形で宮藤の下腹を跨いでいた。

「ふむ、お前中々良いお道具を持っているようだな・・・」

隆起した肉塊で極上の柔肉の感触を確かめながら口にした。

「全く市長に成るなんて随分と無駄な時間を使ってしまったな。これだけのモノを持っていたら売春婦として随分と稼げたらうに・・・」

腰を振れーと言う様に平手で剥き出しの尻をパンパンと叩いた。

宮藤に刺し貫かれたまま、おずおずと腰を上下させた。

肥大化した陰核が二人の恥骨の間に挟まれ摩擦され鋭い刺激を与え、更にピアスの金属球がそれに拍車を掛けた。

あー！こんな男に！と思いながらも鋼鉄のような男性器に刺し貫かれて身体は感じ始めていた。

正面から見詰める宮藤が抱き重りする両乳房をタップと揉み上げた。

殺気立った男の雰囲気からは想像できない女の性感を知悉した巧みな指遣いであった

薄い董色の小さな乳暈の中心にポツンと立つ小振りのピンクの乳首が宮藤の指の間で充血しモリモリと勃起して行くのが分かった。

「お前、おサネに面白いピアスを入れているが、この乳首にもお揃いのピアスを入れてやろうか」と、乳首を弄びながら訊いた。

爪を立てて引っ張られる激痛がピアスが貫通する時の激痛の様に感じられ、宮藤の肉塊を食い絞める膣肉がジワッと濡れて痺れる様に感じた。

心では激しく嫌悪していても、毒島院長による間断ない薬物投与と連続暴行により淫乱に改造された肉体は逞しい男の肉塊を求めて疼き始めていた。

宮藤のモノを食い絞めた下腹がボウッと熱を帯びて行くのが感じられた。宮藤の巧みな乳房への愛撫が灼熱感を一層盛り上げた。

（自分は、このままーもう直ぐー絶頂に達する）と、心の中で叫ぶ声が聞こえた。

無意識の内に自由な両手で宮藤を抱き締め、唇を重ねていた。

煙草臭い唾液が口の中に拡がった。

「何だ、もうイッたのか・・・」

宮藤に正面から跨り両手で抱き締めながら脱力していく理沙を冷たく見詰めて言った。

宮藤も流石に暑さを感じたのか椅子に座ったまま上に着ていた服を脱ぎ棄て全裸となった。

筋肉質の身体には背中から肩や上腕、胸から脇腹に掛けて鮮やかな刺青が施されていた。

起きろと言う様に頬をペシペシと叩いた。

絶頂の^{まどろみ}微睡から醒めた時、まだ宮藤の怒張は自分を刺し貫いたままであることを感じた。

腰を振れと言う様に尻をペシペシと叩いた。

宮藤の威圧の前に再び腰を上下させ始めた。

宮藤の牡を食い絞めたまま、理沙の牝が再び感じ始めていた。

アッアッという甘美な声が抑えようにも口から洩れ、腰がブルブルと震えた。

時々体位を変えて、宮藤に背中を預けて後ろから貫かれ、前に廻した手で乳房を揉み上げられたりした。

宮藤のモノを食い絞める秘奥からは止めどなく愛液が滴り落ち座面を濡らしていた。

(ああ・・・またイク・・・)

何度目かの絶頂を迎え意識が薄れていくのを感じた。

「お前、売女のくせに自分だけ何度も逝ってたら客を怒らしてしまうぞ！」

意識が薄れぐったりしている理沙を揺さぶり起こして怒鳴りつけた。

ああ・・・そうだった一と、思った。

自分は何度も逐情したというのに膣肉に埋め込まれた宮藤のモノは一向に緊張を解く様子が見られなかった。

この凶暴な男により何度も頂上の極みに追い立てられ、全身は疲弊し、その部分は傷みさえ持っているのに、この男は最初から全く変わらぬ素振りで肉柱を突き立てたままであった。何か底知れぬ力を持つ魔人に抱きすくめられているのでは無いかと無意識下で恐怖を覚えた。

「ここは市長室だろう。何時人が入って来るか判らんのだろう。こんな姿を人に見られても良いのか？」

ああ・・・そうだった。早くこの男に放出させて、この苦しい現実から逃れたいと強く思った。

「イクのよ！イクのよ！」

宮藤を絶頂に追い込むための理沙の反撃が始まった。

宮藤のモノを跨いだまま激しく腰を上下させた。

激しい肉体運動に全身から汗がダラダラ流れ落ち、ハアハアと息が上がった。

(アアッ・・・また)

理沙の猛攻の前でも宮藤は全く素振りを変える事無く、逆に理沙は肉欲の炎に炙られて行くのだった。

アアーッ！激しい絶叫を上げて再び絶頂に登りつめた。

「どうした？俺をイカすんじゃ無かったのか？」

後から刺し貫いたまま、せせら笑った。

「俺は商売柄、半日でも一日でもこのままオッ立てられるんだ。俺をイカすのは容易じゃ無いぞ」

早くイカせてみろーと言う様にお尻を叩いた。

この性の魔人の様な男の前では余りにも自分は無力だと敗北感に支配された。

平然とした表情の男の前で「アアーッ！逝って！早く逝って！」と泣き叫びながら尻を振り立てた。

そして、先に自分の肉体的限界が来て絶叫を上げて敗れ去るのであった。

宮藤が刺し貫いたままの理沙には最早まともな意識は残っていない様に感じられた。

目は虚空を見詰め、だらしなく開いた口からは泡が混じった唾液が滴り落ちていた。

しかし、絶望の淵で何か手がかりを掴んだのか、宮藤のモノを食い絞める媚肉がピクッと蠢いたように感じた。

そしてその動きは段々と強く連続して襲って来た様に感じた。

(この女、絶体絶命の危機の中から男を悦ばせる技を会得したのか?)と、理沙の心地良い女肉の蠢きを知覚しながら思った。

普通の男ならこの膣肉に締め付けられたら一発で昇天してしまうだろうーと思いながら

(明日からもっと厳しく鍛えるとして、今日のところはこの辺で勘弁してやるか)

と、緊張を解いた。

理沙の膣内で宮藤のモノが弾けた。

熱い男の飛沫とピクピクとした律動を女体の最奥で感じながら、理沙の目からポロポロと涙がこぼれだした。それは敗北の涙ではなく、困難な仕事をやり遂げた後の達成感の喜びの観があった。

ほら！と言う様に理沙の女肉から解放したモノを目の前に突き付けた。

それは理沙の淫液と宮藤の精液でビッシヨリと濡れていた。

まるで全能の神の偶像を崇拜するように、突き付けられたモノを口に含み、心を込めて清め上げた。

屈辱の出張

理沙は蛭沢と並んで特急列車の椅子に腰掛けていた。

蛭沢は久しぶりの出張が嬉しくて仕方ないと言う様に、座席前のテーブルに置かれた駅弁を頬張っていた。

ガツガツと品の無い食べ方で箸を運びながら、時々背広のポケットに手を突っ込むとカチカチとりモコンを操作した。

その都度、理沙はウツと小さく呻いてスカートの上から股間を押えた。

理沙の股間には巨大なりモコンバイブが押し込まれていて、時々隣に座る蛭沢が意地悪く操作していたのだった。

満席の特急列車の中で周囲の乗客に気付かれるのでは無いかとビクビクして、股間から襲い来る刺激を歯を食いしばって堪えるのであった。

肉洞内で荒れ狂う淫具に誘発され、込み上げる快美感に身体は熱く火照り、額には薄く汗を浮かべ頬が桜色に染まっていた。

このまま両手で胸を揉み上げ改造された肉芽を撫でればどれだけ気持ちが良いだろうと思いつつも、それも叶わず少し倒したリクライニングの背に上体を預け、薄く瞼を閉ざし、やるせない溜息を吐くのであった。

通路を挟んで座る男が周囲に妖艶な牝のオーラを放散する美女の姿をチラチラと覗き見していた。

「おや、市長は食べないんですか？」

目の前のテーブルに置かれたまま手を付けようとしない駅弁を見て声を掛けた。

絶え間なく股間を責め続けられる理沙にとって食欲どころでは無かった。

「市長が食べないなら私が頂きます」

と、理沙の目の前のテーブルから弁当を取り上げ、鼻歌を歌いながら包みを解き始めた。

「折角市長さんに来てもらいましたが、あの話はもう終わっています」

理沙と蛭沢が訪れたのは某大企業本社の社長室であった。

二人に対面して応接椅子に座る社長が毅然とした表情で口を開いた。

この企業の最高経営責任者である社長は 70 歳半ば位の薄くなった髪の毛が真っ白な小柄な初老の男であった。

「そこを何とかお考え直して頂けませんでしょうか・・・」

蛭沢がお追従笑いを口元に浮かべながら食い下がった。

「くどいですな・・・新工場の建設予定地は既に M 県の M 市に内定しております。既に測量に入っているところです」

二人は新工場建設を計画しているこの企業に S 市への工場誘致を持ち掛けるため訪問していたのであった。

終始蛭沢が話しをして理沙はその隣で無言のまま俯き加減で座っていた。

蛭沢の話にさして興味を示さない社長であったが、その目は視線を下に向けて蛭沢の隣で黙って座る元アイドルの美人市長の方を時々チラチラと見ていた。

「これは、ほんの私どもの気持ちです・・・」

と、話の途中で蛭沢は桐で出来た小箱を差し出した。

それは商品券を入れて贈答にする箱と同様の物であった。

箱の大きさからいって中身は商品券か現金だろうと社長は予想した。

そして、小箱の厚みからしてせいぜい 50 万円前後だろうと予想した。

高々 50 万円程度で買収しようとは自分も軽く見られたものだとムツとした。

「金で買収しようとしても私の気は変わらんよ」

「そんな！お金なんて無粋な物を社長様にお渡ししませんよ！」

まるで幫間のように手にした扇子で自分の額をペシッと叩いた。

「どうぞ、どうぞ、開けて見てください。きっと気に入られる事と思いますよ！」

蛭沢の言葉に興味を持ったのか箱を手にとって開けてみた。

桐の箱の中に入っていたのは、金メッキされた小さな鍵だった。

「鍵？・・・」

蛭沢の真意が分からず声を上げた。

「はい、鍵で御座います・・・」淫靡な笑みを唇に浮かべると

「市長、社長様にお見せしたらどうですか・・・」

横に座る理沙に静かに言葉を掛けた。

「はい」と、小さく応えて力無く立ちあがった。

白いスーツスタイルの上からも分かる見事なプロポーションの美女が応接テーブルを挟んだ目の前に立ちあがり、コーヒーカップを取ろうとした指先が震えた。

正面に位置する社長の前でスルスルとスカートを手を捲り始めた。

スカートの下から白く滑々とした成熟した女性の大腿が現われ、喉の渇きも忘れて注視する社長が言葉を呑んだ。

「!?!」

更に捲り上げられたスカートの下を目にして息を呑み、見開かれた目は一点に注視した。

臍下まで捲り上げられ、白く柔らかな下腹まで露わになった理沙の股間には金属光沢を放つ貞操帯が装着されていたのだった。

腰に巻かれた金属ベルトの正面から T 字状に下に伸びた金属の細い帯が、シミ一つ無いクリームのような艶のある雪白の柔肉を置いた大腿と下腹の作る三角地帯を覆い、まるで細い禪を締めたように辛うじて女の秘密の場所を男の目から隠していた。

「後ろもお見せしたらどうですか・・・」

蛭沢の言葉にスカートを捲り上げたまま背中を見せた。

そして、尻を社長の方に突き出すように向けてスカートを捲り上げた。

白桃の様なたっぷりとした量感のある双臀の狭間にステンレス製の細い帯が、まるで力士の締込の様に臀肉を割って食い込んでいた。

血走った眼をカッと見開き、まるで夢遊病者の様に理沙の豊かに張った臀肉に両手を触れようとした。

「どうです？ 鍵ですよ・・・その鍵でこれを開いて中を覗いてみたいと思いませんか・・・」

「ウウ・・・」

カッと見開いた目、締め無く開いた口から社長の男性としての淫欲が経営者としての理性に勝利したと確信した。

もどかし気に箱の中から鍵を掴み取り、期待と緊張で震える手で貞操帯の鍵穴に差し込んだ。

「おおっ！」

社長の目の前で理沙の下腹を隠していた物がパラリと落下した。

目の前に隠す物の無くなった熟れた女の器官が露出した。

まるで熱病に犯された様に奇声を発して剥き出しとなった股間に顔を埋めた。

突然の社長の激烈な行為に小さく悲鳴を上げた。

理沙の身悶えも無視して淫欲の虜となった社長は秘奥に顔を埋めたまま、その匂いを鼻腔に納め、舌を伸ばしてその部分の味覚を味わった。

「社長・・社長室ではちょっと拙いでしょう。ホテルを用意してあります。・・後はホテルで気の向くままに楽しまれたらどうですか？・・まあ一つ新工場建設の方も宜しく・・」

「分った・・」と理沙の股間に顔を埋め、舌で周辺を嘗めまわし、熟した女の芳香を胸一杯吸い込みながら返事をした。

その日の深夜、蛭沢と理沙は首尾を報告するため根津の自宅を訪れていた。

全裸に剥かれ上半身に縄掛けされ上下を通る麻縄に重みのある乳房を縊り出された理沙は、カウチに腰掛ける根津の上に背を向けて腰を降ろし、背後から突き上げられていた。

「全く、枕営業で仕事を採って来る市長なんて、日本中探してもアンタくらいや！男の多良古には逆立ちしても出来ん芸当や！」

背後から麻縄で縊り上げられた乳房や、改造により肥大化させられた肉芽を弄び、秘園を真下から突き上げ甘美な媚肉を味わいながら大きな笑い声を発した。

「はい、その代わり佐伯市長には社長の許に定期的に出張して頂くことと、新工場建設の視察に訪れる際は市長自らご接待する事を約束させられましたが・・」

蛭沢が揉み手しながら報告した。

大規模な工場建設となれば日本を代表する大手ゼネコンに発注されることになる。根津の会社の規模では元受けになる事は出来ないが、元受けとなった大手ゼネコンは工事内容を分割して多数の下請けに発注し、それらも作業を分割して孫請けに再発注することになる。その中で有利な条件で下請けと成れば多くの利益を上げられることになり、直接表に出るより市と癒着しているとの世間の疑惑の目を隠すにも好都合であった。

また大手企業が新工場を建設するとなれば、そこに原材料を供給する協力会社も工場や倉庫を新設することになり、それらの受注も期待できる。

更に、それらの工場事務所で使用する什器備品類の受注や作業員の派遣など、この新規工事関連で根津の懐に飛び込む金額は膨大なものになると算盤を弾いていた。

根津の並外れた巨砲が理沙の華肉を蹂躪していた。

その息も止まるような体内から込み上げる圧力に何時もなら苦痛しか感じない理沙であったが、何故かホッとするようなものを感じていた。

長時間に渡りホテルの部屋で社長から身体を弄ばれたが、なかなか硬化しない陰茎を手や口を駆使して、やっと硬化させても長続きしないモノで肉洞を抉られ、まるで終始とろ火で炙られるような中途半端な刺激に理沙の女体が燃え上がる事も出来ず、生殺しの状態のまま悶々としていたのであった。

途中何度も社長は理沙の膣内で爆ぜたが、結局理沙はまるで社長から抱かれる^{ダッヅワイフ}風船人形のよう到最后まで頂点を迎える事無く満たされない情念だけが残った。

根津や蛭沢のようなサディストであったなら、縄で縛り上げ身動きできない女体を淫具で散々責め立て、強制的に逐情させたであろうが、^{なまぬる}生温く肌を撫でたり舌を這わせるだけで、責められる事に馴染んだ女体を燃え上がらせる事が無かったことも理沙の懊悩を深めるだけであった。

「お願い・・・理沙をイカせて・・・狂わせて」

これまで苦痛と屈辱を与えるだけだった根津のモノに縋る様に哀願した。

社長に抱かれて絶頂を迎える事も出来ず、中途半端に灯された肉欲の小さな炎がずっと理沙を欲求不満の状態に胎内からチロチロと炙り続け苦しめていたが、今根津の乱暴な手で責め立てられ、小さな炎が一機に巨大な火焰となって下腹の中で燃え狂っていた。

自ら激しく腰を上下させ、根津のモノを甘美な肉の筒に包んで擦り上げ、精一杯口を広げて巨大なモノを啜え込む下の口からはダラダラと牝蜜の涎を垂れ流していた。

根津のモノが突き立てられた秘奥からはグチュグチュピチャピチャと卑猥な音が木霊し、まるで水を流したように座面を濡らしていた。

後手に縛られているため自分では揉み上げることの出来ず疼く乳房も弄る事の出来ない肉芽も自分よりの確な技術で欲している部分を揉みたてられ官能を一層燃え立たせた。

快感の疼きの中で勃起した乳首やクリを指先でコロコロ転がされるのも気持ちが良かった。そんな女性市長の身悶えぶりを背後から乳房を揉みたて股間を弄りながら満足そうに眺めていた。

暴走を始めた肉欲と怒涛となって押し寄せる喜悅の中で、(ああ・・・私は本当に男狂いのマゾ牝に改造されてしまったのかしら?)と、心の片隅に残された理性は歓喜とは反対側の絶望の淵に佇むのであった。

宮藤の素性

毎朝の日課のように理沙により馘首された 10 人の男の内の一人が市長室の床の上で犬のように四つん這いの姿勢をとる全裸の女性市長を責め立てていた。

手にしたクリケットのバットのヘラのように平たい板面で理沙の剥き出しの尻を叩いていたのだ。

大きくバットを振りかぶり豊かに張った双臀を叩く度にピシーッと甲高い音が上がり、柔らかな尻肉が波をうった。

悲痛な悲鳴が室内に響き渡り、その声は市長室前の廊下にも漏れていたが、市職員にとっては暗黙の裡に市長室前の廊下を歩いてはいけない禁断の時間帯となっていた。

男達はクジ引きで順番でも決めたていのか毎朝交代で一人ずつ市長室を訪れては哀れな女性市長を虐待するのであった。

スポーツ振興とか適当な名目を立てて市の経費で購入したクリケットのバットや乗馬鞭などお気に入りの責め具を手に毎朝剥き出しの尻に打擲を加えた。

「どうだ！痛いか？苦しいか？」

何度もバットを振るい、打ち疲れたのかハアハアと息を吐き、額に流れ出る汗を拭きながら硬い木の板で打たれ赤く腫れあがった双臀を見詰めながら声を上げた。

「佐伯理沙は自らの間違いによって永井様に多大なご迷惑をお掛けしてしまいました。その罪滅ぼしの為に永井様の気が晴れるまで、どうぞ理沙を罰して下さい・・・」

熱く火のように燃えジンジンする激痛の中で泣きじゃくりながら、男にむっちりとした尻を差し出したまま、何時もの詫びの言葉を言わされるのであった。

「ふふ・・・可愛い事を言うじゃ無いか・・・」

再び天井高くバットを振り上げると、火のように赤くなった牝尻目掛けて振り下ろした。

ピシーンという大きな打擲音に続いてヒィーという悲痛な悲鳴が響いた。

白桃のように瑞瑞しく透き通るように白かった柔らかな尻肉は最早白い部分を残していない程赤黒く変色していた。

宮藤は市長の黒革の椅子に脚を組んで腰掛け、蛭沢は来客用のソファに腰を降ろし、哀れな

女性市長が職員から虐待される様子をジッと見ていた。

その醒めた眼は淫欲というより、理沙が女奴隷としてどの程度仕上がっているか見極めようとする観察眼であった。

散々理沙を打ち据えて疲れた永井はバットを握り締めたまま汗を滴らせハアハアと荒い息をついて腫れあがった牝尻をじっと見ていた。

理沙も激痛でもはや四つん這いの姿勢を維持することも出来ず顔と胸で上体を支え尻だけを男の方に差し上げた態勢で全身汗まみれになって肩で息を吐いていた。

永井はビッシヨリと汗に塗れ赤黒く変色した尻タブの狭間の無傷のまだ白い色を残す部分をじっと見つめていた。

「フフフ・・・ここもグッシヨリと濡れているじゃ無いか・・・」

秘孔から滴り落ちる粘稠な液に指を伸ばしながら囁いた。

「ああ・・・イヤ・・・」

激しい打擲の間に赤く熱を持ち疼痛を発する二つの臀丘の間の秘め処も刺激を受け感じてしまった事を敵に見つけられ恥じらうように声を上げた。

「これは汗か？・・・フフ・・・それとも・・・」

「イヤ！おっしゃらないで！」

「尻を叩かれて感じたのか？全くお前はどのような男ないマゾ牝だな・・・盛りのついた男無しではいられない淫乱女だ・・・」

秘園をぐっしょり濡らす樹液を指先でかき混ぜられる羞恥に思わず声を上げた。

「こうやっておいでおいでをしているのだから訪れない訳にはいかないよな・・・」

ベルトを緩めズボンを降ろしながら嗤い声を上げた。

「前の穴と後ろの穴とどちらへ入れて欲しい？」

「どうぞ永井様のお好きな方へ・・・」

「ふふ、最初会った時は何て高飛車な女だと思っていたが、随分と従順になったじゃ無いか。それじゃ前の方を頂こう。心を込めて励むんだぞ」

「はい・・・」

永井に向けて高く擡げた双臀の間の濡れそぼった膣洞の入り口に猛り狂った肉塊を押し当て腰に力を込めた。

「ああ・・・！イヤ！痛い」

永井の硬化したモノを媚肉の中に受け入れ白目を剥いて悲鳴を上げブルブルと腰を震わせた。

「ああ・・・痛いわ！永井様のモノが大き過ぎて痛いよ！もっと優しく入れて！」

理沙の悲痛な叫びにサディスティックな快感を誘発された永井はもっと理沙の苦しむ姿を見たいと激しく突き立てた。

「ああ・・・深いわ！深く入り過ぎて痛いわ！」

理沙の悲鳴に煽られた永井が、これでもか！これでもか！と激しく腰を前後させた。

「ああ・・・辛いわ！苦しいわ！・・・お願い、理沙の事が可哀そうと思うなら早くイッて！」

「何が可哀そうなもんか！お前なんかこうしてやる！・・・そら！どうだ？どうだ？」

理沙の喘ぎ声に獣欲を掻きたてられた永井が必死にピストン運動を続けていた。

「そんなに激しく突かれたら痛いわ・・・ああ変な気持ち・・・理沙はイキそう」

秘奥を深々と抉られたまま男を誘うようにクナクナと腰を振った。

「ああ・・・お願い・・・オッパイを揉んで・・・」

掠れた声で哀願する理沙に応える様に、犬の様にバックから犯していた姿勢から秘裂に勃起したモノを突き入れたまま胸を掴んで上体をグッと引き上げた。

二人とも膝立ちの姿勢で理沙は男に背を預け、男は前に廻した手で成熟した乳房を揉みたてた。

醒めた眼で二人の交合を見詰める宮藤と蛭沢の前に両乳房を揉みしだかれ深々と股間を抉られる理沙の姿が正面から映じた。

包茎手術の際に綺麗さっぱり剃毛された痴毛が半ばまで伸び始めていたが、まだ秘裂を包み隠すには十分でなく、開け広げられた秘奥が泡を浮かべて男の隆起したモノを呑み込む姿もその直ぐ上の金色のピアスを嵌められた肥大化し赤く充血した肉芽もはっきりと見て取れた。

「そんなに強く揉んだら痛いわ・・・もっと優しくして・・・ああ、いいわ・・・」

官能の海の中に溺れて行くように甘く喘ぎ声を漏らした。

「ねえ・・・理沙の口を吸って・・・ねえ、いいでしょう？」

甘えかかる様に顔を後ろに反らせた。

永井も理沙の媚態に誘われフラフラと顔を近付けた。

二人の唇が重なり、甘く擦り合わせ、舌を伸ばして絡め合った。

宮藤も蛭沢も理沙の方から積極的に口吻を求めて来たことにホウと声を漏らした。

突然結ばれていた唇を放し、顔を正面に向けると眉目根に深く皺を寄せて、

「アア！イクわ！・・・理沙はもうイクわ！・・・ああ・・・もう、もう・・・お願い！永井様も理沙と一緒に行って！」

と、アクメを迎えようとしている事を叫ぶように告げた。

「アア・・・アウウ・・・イク、イク！・・・もうイク！」

苦しそうな表情を作り喘ぎ続けていた。

遠くから宮藤も蛭沢も冷たい目で二人の交接をじっと見つめていた。

二人には理沙の悶えぶりが本当ではなく演技に過ぎない事を見抜いていた。

どう足掻いても男から犯されることが避けられないのなら、逆に男を誘って自分のペースに巻き込み、自分の肉体的ダメージを最少にして男をイカそうとする娼婦のテクニックを発揮し始めたものと気付いていた。

二人はそれを指摘する事無く、逆にこの女市長がどれだけ娼婦としての技量を身に着けて行くかを見極める心算で黙って観察していたのだった。

「アア！・・・もうダメ！・・・もう、もう・・・ひいいい・・・ああ、助けて！」

理沙の娼婦としてのテクニックに煽られ永井は激しく精を放出した。

男のモノが膣内で激しく律動するのを確認した理沙は、それに合わせて絶叫するような声を発し、身体をくの字に折り、失神したように床に崩れ落ちる艶技を見せた。

「フフ・・・良かったぜ！また来るぜ！」

理沙の媚態の前にすっかり満足した永井は、床に倒れ伏しゼイゼイと喘ぐ理沙を勝ち誇った様に見下ろしながらズボンを直した。

「お前、俺の部下にこんな物を頼んだようだな！」

ポケットから一枚の書類を出して床の上に横たわる理沙の目の前に投げ捨てた。

それは大部分が黒く塗り潰されていたが、表題から理沙が悪人達の目を盗んで密かに職員に依頼していた件の報告書であることが判った。

『宮藤副市長補佐に関する調査報告書』

宮藤の履歴書の虚偽記載が証明できれば宮藤をクビにして市役所から追い出すことが出来ると密かに期待したのであったが、標題から続く数行は黒く塗りつぶされていて読み取る事は不可能であった。

そして、塗りつぶされた行の下に、後から追記したように『宮藤氏の履歴書に記載されていた事項は全て事実であることが確認された』とだけ記されていた。

(これで全ての希望が失われた・・・)

スゥーと血の気が引き絶望感に打ちひしがれる理沙の姿が在った。

いずまいを正した永井が何事も無かった様に市長室から出て行った。

その後暫くしてから蛭沢も退室して行った。

市長室には宮藤と理沙だけが残された。

「アンタも無駄な悪足掻きをしたもんだぜ・・・」

宮藤が理沙を冷たい目で見据えて口を開いた。

「あの報告書を書いた職員は酷いやきを入れられたぜ・・・」

緊張して見開かれた目を見詰めながら

「下手な正義感に燃えてこの市役所の現状を外に漏らそうとした馬鹿な女性職員もいたが、帰宅途中に内の若い者に襲わせて散々レイプしてやったぜ！この事を噂で市役所内に流してやったから、職員は皆恐れてもう誰もアンタの言う事は聞かないぜ・・・」

と、嘯いた。

自分の為に傷付いた職員の事を思うとキリキリと胸が痛んだ。

そして、もう市役所内には自分の味方になってくれる人は居ないという現実を思い知らされた。

「しかし、アンタ^{とこ}所の職員は中々優秀だな。良く俺の事を調べていたぜ・・・」

さも可笑しそうに話し始めた。

「お察しの通り、俺はT大なんか出ていないさ・・・俺は花和會の幹部なんだ！」

花和會と聞いてドキリとした。

花和會とは理沙も耳にしたことのある、一般人の殺傷も平気でやってのける‘特別指定暴力団’にリストされている超危険な暴力組織であった。以前は花和組と名乗っていたが、数年前に組長が暗殺されてから、組長を置かず幹部が合議制で運営するようになり、名前も花和會と改めていたのだった。

各幹部は組織内での自分の威信を誇示するように互いに過激さを競い合い、歯止めが掛からない状態となり、以前にも増して危険な反社会組織となっていた。

理沙は心の中で神聖な市役所に最も危険な反社の男を引き入れた蛭沢を激しく憎んだ。

「近頃はヤクザもシノギが楽じゃ無くてな・・・こんなものまで売り出してシノギの足しにしているのさ・・・一緒に見てくれるかい」

懐から一枚のブルーレイディスクを取り出すと、プレイヤーにセットした。

市長室備え付けの 80 インチの大画面テレビに映像が現われた。

その映像に理沙は息を呑んだ。

画面には全裸で交わる一組の男女の全体像が映っていた。

犬の様に四つん這いの姿勢を取る若い女性のお尻を後ろから若い男性が激しく犯していた。

男の剛直が女の肛門に深々と突き立てられている事が分かった。

女の股間は綺麗に剃り上げられており、結合部分がまざまざと映った。

画面がアップになり二人の顔が鮮明に分かるようになり、理沙はヒィ！と悲鳴を上げた。

（アア！この世には神も仏も無いのか！天は何故悪人共に味方し善人を苦しめるのか！）

犬の様に犯されている女は矢田恵で背後から突き立てている男は草刈民雄だったのだ！

「どうだ！気に入ったか？ この二人は内でも人気のポルノ女優とポルノ男優なんだ」

呆然と目を見開きワナワナと震える理沙に見せ付ける様にリモコンを操作して画面を繰り返しながら、様々な体位を変えて抱き合う二人の様子を見せつけた。

「この女優わな、ケツの穴を使って男をイカせたり、自分でイッたりすることが出来るんだぜ！・・・ただし、面白い事にこの女優はポルノ俳優のくせにまだ処女なんだぜ！」

良く見てみろーと、画面をストップさせた。

草刈が貫く後口の直ぐ下で恵の可憐な肉孔が大画面テレビ一杯にアップで映し出された。

其処には半透明の膜が覆っていた。

息を呑んでテレビ画面に釘付けとなる理沙を見詰めながら、

「ポルノ女優は多ければ多いほど良い。実はアンタにも出演して欲しいんだ・・・」

女体調教師登場

その時、市長室の電話が鳴った。

受付からだった。

「蝦沼様と言う方が市長に面会に来られています」

「おう！待ってたんだ。通せ！」

電話に出た宮藤がそれだけ言うとガチャンと受話器を置いた。

黙って宮藤の応対を見ていた理沙に、

「うちのアダルトビデオを買う客は目が肥えている。さっきは市長さんも名演技をされていたようだが、あの程度の艶技じゃ白けてしまうぜ。それでビデオ出演に当たって艶技指導の先生を呼んでおいたって訳だ・・・」

この反社の男は最初から自分をいかがわしいビデオに強制的に出演させる計画でいたことが判りゾッとするものを感じた。

そして、いくら表の世界で流通しないビデオとは云え、そのようなものが流出したら自分は今もうお終いになってしまうと悲哀に暮れた。

程なくして、その男はやって来た。

身長 180 センチ以上の長身のすらりとした男で、細身の黒いジーンズを穿き、身体の線が出るような黒い長袖のソフトニットを身に着けていただけだったので、余計に痩身が目映った。

宮藤のような獐犷さを感じさせず、肩まで垂らした黒い長い髪や尖った顎、すらりと通った高い鼻、血の気を感じさせない薄い唇など、どちらかと言うと中性的な男であった。

そして、ゴーグルの様な幅の広いこめかみまで回り込んだ濃いサングラスを掛けていたため表情が読み取れず、年齢も 40 歳前半か、はたまた 20 代最後位にも見え判然としなかった。。

「内の組の自慢の女体調教師の蛇沼だ！本名は蝦沼だが皆は蛇沼と呼んでいる。その理由は直ぐに分かる」

宮藤の口の端が陰湿にニヤッとくずれた。

床に横座りする全裸の女市長を濃いサングラスの奥からまるで物を見るような冷たい視線で見降ろしながら、

「今度調教するのはこの女ですか？」

と、宮藤の方を振り向いて確認した。

「ああ、そうだ。時間も無いことだし三日以内に仕上げてくれ」

「分かりました」

理沙の身体を値踏みするように眺めまわしていた蛇沼という男が無表情のまま事務的に応えた。

蛇沼は手にしていた大きな黒いバックを床に降ろし、広げた。

中には麻縄の束や淫具がびっしりと詰まっていた。

その中から 40 センチ位の長さの先端が二つに割れた金属棒を取り出した。

細い棒であったが握りの部分は太くなっておりグルグルと黒いビニールテープが巻かれていた。

「ふふ・・・得意の電気棒か・・・」

「そうです」

電気棒を手にする蛇沼の姿を含み笑いして見る宮藤にそっけなく応えた。

「先ず、その机の上に上げて下さい」

蛇沼が市長の大きな机を指さした。

市長用の机は幅が 1.8 メートル、奥行きが 90 センチもある大きな物であった。

宮藤は理沙にデスクの上のパソコンやトレーや積み上げられた書類など一斉の物を降ろすように命じた。

理沙はこの男達によりこのデスクの上が新たな虐待の場になると予想した。

自分の処刑場所を自分で用意するという複雑な気持ちで全裸のまま机の上の備品を下に降ろしていった。

蛇沼は全裸のまま重いパソコンを床に降ろす理沙の筋肉の動きをじっと見ていた。

全ての物が片付けられ何も無くなったデスクの上はまるで小さなベッドの上のようであった。

「机の上に乗るんだ」

宮藤の命令に逆らう事も出来ず項垂れたまま机の上に登ろうとした。

高い机の上に片脚を載せた時、股間が大きく開き男達の目に秘奥が丸見えになった。

蛇沼は冷たい目線で股間の奥を観察していた。

机の上に正座した理沙は上体を丸め男達の視線を恥じて両手で胸を押しさえていた。

「そんなお行儀良く座られても絵にならない。お尻を机の上に降ろして、両脚を開くのです。

M 字開脚って知ってますよね？」

不気味な雰囲気漂わせる蛇沼は蒼褪める理沙に M 字開脚するように迫った。

理沙にとって M 字開脚という言葉は知らなかったが、M のイニシャルから何となく意味は

理解出来き、その卑猥な姿勢を思うと顔が赤くなった。

この男達に逆らっても無駄であることを身を以て知っている理沙は、正座の姿勢を崩して机の上に尻餅を着き閉ざしていた股間をジワジワと開いていった。

男達の目に開け広げられた股ぐらの奥が映った。

「それではオナニーして貰いましょう」

突然蛇沼の発した言葉を一瞬理解できず、エツという表情を浮かべた。

「オナニーしろって言ってんだよ！聞こえなかったのか？」

宮藤が理沙の髪を鷲掴みにして怒鳴った。

「まあまあ・オナニーで気分良くなって貰おうと思っていたのに、そんな事をしたら固くなってしまふ・・・」

「オナニーですよ。それとも生真面目な市長さんはオナニーの仕方を知らないのですか？」

宮藤は理沙が一瞬でも不服従な態度や反抗的な態度を見せると間髪を入れず暴力で応酬して来る。理沙が一瞬戸惑った態度を見せたのは反抗ではなく蛇沼の口から出たオナニーしろと言う真意が理解できなかったからである。

蛇沼が訝った様に、理沙はこの年代の女性として信じられない事にオナニーの経験が無かった。

まだ性欲というものを意識しない頃にレイプされ、それ以来色々な男達から弄ばれて来た理沙にとって性に関する事は全て忌避すべき事項であり、自分で自分を慰めるなどする気にもなれなかった。

アイドルグループの研究生だった時に同じ寮内の同僚の部屋の扉が少し開いていて、偶然中でオナニーをしている仲間の姿を目撃したことがあったが、汚らわしい物を見た目を閉じて慌てて立ち去ったものであった。

こんな自分だから一生結婚することは無いだろうと思っていたが、矢田恵と知り合い、頑なな心が次第に融けて行き、自然と愛を重ねる様になって、少しずつ性に関する認識に変化は生まれて行ったが、未だ自慰の経験は無かった。

「ほら、こうするのですよ」と、理沙の右手を取って股間に導き、左手で乳房を握らせた。

これまでの苛烈な体験から、女体をどうすれば気持ち良くなれるかは理解出来ていた。

それがどんなに恥ずかしくてもその後男達の笑い者になろうとも、今は肉欲の淵に身を投げ悦楽の海に溺れた方が、例え一時でも残酷な現状を逃れて忘我の境地に浸ることが出来ると思うと、股間に押し当てられた指先を蠢かせ自らの秘孔に押し入れた。

この男達には艶技は通じない。実際に快樂の浸る姿を晒さなければ許して貰えない—
左手で乳房を揉み上げ、右手の中指と人差し指の二本を自らの媚肉に刺し入れ掻きまわした。

(ああー、早く来て。早く来て)

自分ならでは知る性感のポイントを刺激しながら、ジリジリと快感が込み上げて来るのを待った。

(ああ・・・いいわ・・・)

身体の奥底から甘美な愉悅が込み上げ始め、二本の指で掻きまわす牝洞からはピチャピチャと妙なる音が響き始めた。

ヒィ！！

突然激しい衝撃を感じて身体が硬直した。

蛇沼が手にした電気棒をお尻に押し当てて高圧電流を流し込んだのであった。

「貴女は自分だけ気持ちが良いかも知れないが、そんな怖い顔では画面を見ているお客さんには伝わらない。もっと本心から楽しんでいる表情を見せるのです」

演技ではなく実際に感じ、それを演技ではない表情や仕草で見せるのだ。まだ心の中に照れや恥じらいの気持ちが残って邪魔しているから素直に表情に出せないんだ—と、迫った。

電撃の衝撃でハアハアと荒い息を吐く理沙に、「さあもう一度！」とオナニーを迫るのであった。

こうして実際の内なる快感と外部に現れる表情が一致するまで何度でも自慰行為を強制された。

電気棒を身体の彼方此方に押し当てられ激しい蛇沼の叱責を受け続ける内に、何時しか無意識の内に燃え盛る肉欲が演技ではない自然の衝動として叫び声を上げ顔面を歪め身体をくねらせて外に向かって発露される様になって来た。

何時間にも渡ってオナニーを続けた末、精魂尽きたように机の上に突っ伏していた。

硬い机の上に倒れ伏しながら、蛇沼により最後まで残されていた女としての慎みや恥じらいと云った心の垣根も奪い去られて行ったように感じていた。

暫くの間、机の上で休息を取らせた後、眠りから醒ます様に理沙の裸体を揺さぶった。

揺り起こされて上体を持ち上げボンヤリと霞む目で蛇沼の方に視線を向ける理沙に、

「貴女はこれからビデオという不特定多数の人に恥ずかしい姿を見て頂く訳ですから、それなりの度胸を付けなければいけません」

と、麻縄を扱きながら表情を読めない貌で告げた。

理沙を机の上から降ろすとまだふら付く身体の背面に回って、両手を掴んで交差させ手にした麻縄で後手に縛り始めた。

更に縄を引き絞り高手小手の位置まで引き上げたので、窮屈な姿勢に理沙の口から、ああ・・・という声が漏れた。

「流石にダンスで鍛えられただけあって貴女の身体は柔らかい。これだけ両手上がる女性も珍しい・・・」

理沙の苦痛に躊躇する事なく、余った縄を胸の上下に二巻三巻して形の良い大きな乳房を変形させて前に押し出した。

更に両腕の位置が下がらない様に、高手小手に縛られた両手首の間に縄を絡めてグッと上に持ち上げると首の横を通して前に廻し、乳房の下を通る縄に潜らせ引き絞った。

これにより F カップに近い豊かに実った乳房は上に持ち上げられ一層卑猥な姿を晒すことになった。

苦しさに高く持ち上げられた両手を下げようとすればそれに連動して乳房が上に持ち上げられた。

宮藤と小一時間前から加わっていた蛭沢は蛇沼の無駄のないテキパキとした見事な縄掛けに目を見張った。

腋の下から縄を通し門を掛け縄止めを済ませて見事な高手小手の緊縛が完成した。

単なる裸身からは伺えない縄掛けされた女のエロティックな姿に声を呑んだ。

「下が丸出しでは恥ずかしいでしょうから隠してあげましょう・・・」

新たな縄束を手にするのと、臍下の位置にベルトを掛けるように廻した。

そしてギュッと引き絞り縊れたウェストに縄を食い込ませると、前に垂れる二本の縄を結んで瘤を作り始めた。

「さあ、あんよを開いて下さい」

理沙の前に膝を着き瘤縄を握る蛇沼が下から見上げながら冷たく命じた。

縄に作られた瘤を目にして残酷な意図を察知して「ああ・・・いやよ・・・」と小さく呟いたが、逆らう事も出来ず、オズオズと股を広げ始めた。

何故か理沙の女がそれを味わってみたいと舌なめずりしたような感情が一瞬湧いたような気がして邪念を振り払うように頭を振った。

手早く股間に通した縄を後ろに回って引き絞った。

強い力で締上げられたので腰に T 字型に掛かっていた縄が Y 字型に姿を変えた。

縄を二重に縛って作った大きな瘤は過たず理沙の牝穴を捉え、もう一つの小さな瘤は菊座の窪みにピッタリと納まった。

長時間自慰をさせられてまだ流れ出た淫液に濡れ輝る、敏感な神経も昂ったままの淫孔に大きな瘤を埋め込まれ声にならない呻き声を上げた。

毛羽立った二本の縄の間に挟まれた巨大化された肉芽が左右を通る縄に締め上げられ悲鳴を上げた。

お尻の方から思い切り引き絞られた荒くれた縄は容赦なく柔肉の谷間を割って深々と埋没し、ようやく生え揃って来た陰毛の奥に消え、僅かに秘奥に埋め込まれた瘤の一部が姿を見せるだけであった。

「これで良しと・・・」

縄留めを済ませ、完成した緊縛姿を惚れ惚れとするように見つめた。

「どうです、こういう縄を股の間に掛けて貰うと、自分も女だったという事を思い出して、キリッとした良い気持ちになるでしょう？次は麻縄でなくて棕櫚縄で掛けて上げますよ。あれは効きますよ・・・」

理沙の尻を気持ちの悪い掌で撫でながら口にした。

「それじゃちょっと歩いてみましょうか。ハイヒールを履いて下さい」

脱ぎ捨てられていたハイヒールに足を通した時、姿勢の変化で股間を通した縄がピンと緊張し、半ば体内に埋め込まれた瘤が微妙な神経を散りばめられた二か所を刺激したのでウツと呻き声を上げた。

ハイヒールと身体を縛る縄以外裸身に何も身に着けていない理沙の身体を上から下まで眺め廻して、「良いようですね。貴女にはもっと高いピンヒールの方が似合うようだ」と呟いた。リードの着いた犬の首輪を持ち出して来て理沙の首に嵌めた。

リードを手にしてクイクイと引っ張りながら「それじゃ準備も出来たようだしそろそろ散歩に行きましようか」と、事も無げに口を開いた。

“散歩”という言葉聞いて理沙の顔面が青くなった。

(この悪魔の手先共は自分を市長室から外に連れ出そうとしているのではないか?)

これまでは市長室内という閉ざされた空間の中で限られた人に裸体を見られるだけだった。股間にバイブを埋め込まれ市長室から出された事はあったが、その時はスーツを着ており裸

を見られる事は無かった。

今はある意味全裸姿よりも惨めな恥ずかしい縄を掛けられ、後手に縛り上げられているため手で剥き出しにされた部分を隠すことも出来ない！

リードを引く蛇沼の足がドアの方に向かい、ドアノブに手を掛けた。

その姿を目にして「イヤーッ！イヤーッ！」と大声で泣き叫んだ。

麻縄で縊り上げられた胸を隠すため上体を折ろうとした時、高手小手に縛り上げられた上腕と肩が激痛を発した。

歩行を拒否してしゃがみ込むと股間を挟る縄がピンと緊張し、二つの瘤が意地悪く責め立てた。

「お願い！それだけは許して！何でも言う事を聞きます！どんな恥ずかしい事でもします！だから、お願い、それだけはお許してください！」

床の上にしゃがみ込んで泣きじゃくる女性市長を取り囲んで男達は淫惨な笑みを浮かべていた。

「何も心配することはありませんよ・・・もう窓口時間は終わっており一般市民の目はありません。後は気心の知れた市役所の職員だけですよ」

床の上にへたり込み号泣する理沙の裸身を抱く様にして立たせながら、蛇沼が理沙の耳元で囁いた。

ガチャリと音がして閉ざされていた扉が開かれた。

先に外に出た蛇沼が首輪に着けられたリードを引き、宮藤と蛭沢が剥き出しの尻を蹴り上げたり抓り上げたりして無理やり廊下に引きずり出した。

幸い市長室前の廊下には人影が無かった。

男達に引きずられ脚を進める度に秘孔に埋め込まれた二つの瘤が意地悪く性感を刺激し、肥大化した肉芽を左右から挟む荒くれた縄が容赦なく繊細な神経を擦り立てた。

下腹から込み上げる切ない刺激に上を向いてハアと息を吐いた。

「これだけ理沙を虐めればもう充分じゃありませんか・・・もう帰して下さい・・・」

涙に潤んだ瞳で周囲の嗜虐者を眺め廻し哀願した。

哀切な言葉に蛇沼がハア？と頓狂な声を上げた。

「これは可笑しな事を仰る。私は散歩に行こうと言ったのですよ。まだ市長室を出てから何メートルも進んでいませんよ。まさか三歩歩いたから散歩終了と洒落を言うつもりじゃないですよね？」と、乾いた笑い声を上げた。

「時々市長室を出て市役所内を歩き廻って抜き打ちで職員の勤務態度を見るってのも市長の重要な仕事だろう！俺達はわざわざお前の巡察に付き合っただけだぜ！」宮藤がドスの利いた声を掛けて来た。

哀れな女性市長は悪鬼どもに囲まれ、リードを引かれ尻を殴打されながら廊下をよろよろと歩まされた。

股間を挟む縄は中断なく微妙な神経を散りばめた個所を責め立て、無意識の内に上下を通る縄によりこれ見よがしに突き出された乳房の先端から飛び出た乳首が固くしこっていった。四人はエレベーターホールの前に立ち止まりエレベーターを待った。

市長室を出てから僅かな距離であったが、股間を責め立てられたまま歩む理沙には無限に長い距離に感じられた。

幸いエレベーターの中も無人であった。

宮藤がボタンを操作し、エレベーターが止まり、ドアがサッと開いた時、理沙の喉の奥から絶望的な悲鳴が上がった。

そこは市役所事務所の真ん前であった。

市民が申請を持ち込む受付のカウンターが一行に並び、その奥に何列にも渡って並べられた机に向かって多くの職員が仕事をしていた。

既に市民の受付時間は終了していたので、申請に市役所を訪れた一般市民の姿は見えなかったが、本日の業務の集計や明日の準備をしていたのだろう。中には帰り支度をしている職員もいた。

何人かの職員は異様な雰囲気を感じたのか仕事の手を止めて、開いたエレベーターの扉の方に視線を向け、副市長らの手で無理やり連れ出されようとする全裸の市長の姿を認めて声にならない驚きの表情を浮かべた。

頼りにしていた職員たちに惨めな姿を晒す羞恥にエレベーターから降りることを必死に拒んだが、がっしり縛り上げられたか細い女の身体で男三人の力に敵う筈もなく無理やり引きずり出された。

背後では何事も無かった様にエレベーターの扉が閉じた。

理沙の泣き叫ぶ声に事務所内にいた全ての職員が目線が全裸の上に縄掛けされた扇情的な姿に集中した。

麻縄により豊満な乳房を縊り上げられた官能的な姿や淫靡な股縄を掛けられた姿に一瞬目を血走らせて見詰めたが、首輪に着けられたリードを引かれてこちらに向かって来る女性市

長の姿に、関わり合いを持って自分に災いが及びことを恐れた職員達は視線を避け背中を向けた。

突然事務室最奥の窓の傍に置かれた場長の席に座っていた男が笑い声を上げながら立ち上がった。今朝ほど理沙を責めていた永井であった。

「これは、これは、市長！所内巡察ですか？ご苦労様です！」

大袈裟な声を上げて淫靡な囁いを浮かべながら、通路に佇む理沙の方に向かって来た。

「おい！お前達！市長にいらして頂いているのにお尻を向けては失礼だろう！市長の方を向かんか！」

永井の命令にその場にいた職員は伏し目がちに恐る恐る理沙の方に向いた。

「これは市長、最新のファッションですか？流石にお洒落に敏感な市長の着る物は違う！」高笑いしながら市長に近付いた永井は宮藤達嗜虐者の群れに合流した。

「縄のブラジャーに縄の褌ですか？いやはや何とも男のスケベ心を擽る格好をしてらっしゃる。市長は市役所がハネた後そんな姿で夜な夜な男漁りをしていたんじゃないですか？」予期していなかった突然の市長の来訪に興奮した永井は顔全体に喜色を浮かべて言葉齟り続けた。

「違います・・・」

聞き取れないほどの小さな声で永井の言葉を否定して真っ赤に染まった顔を振り立てた。

「何が違うんですか！こんなに乳首をおっ立てて！」

永井が両手の指で勃起した乳首を掴まんで思い切り前に引っ張ったので、アッ！と悲鳴を上げて身悶えた。

心ではあんなに拒絶していたのに、此処に来るまでの間に股間を責め上げる麻縄の刺激に反応して無意識の内に乳首を屹立させてしまっていたことを憎むべき男に発見され羞恥に襲われた。

永井が正面から理沙の顔に押し付ける様に自分の顔を近寄せてランランと光る目で睨み付け、タバコ臭い息を吹きかけながら、「貴女はこんな事が大好きなマゾ牝なんですよ！」と、乳首を爪先で掴まんで捩じり上げたまま、たわわな乳房全体をテントを立てる様に引っ張り決め付ける様に言った。

爪を立てられ引っ張られる乳首の傷みを感じながら、こんな場面でも下劣な男の甚振りにジワジワと反応して乳首を更に大きく膨らませていく自分の女体が呪わしく思えた。

「おい！皆！こっちを見ろ！」

永井が周囲を見回して大声を上げた。

シーンとした周囲の薄い反応に腹を立てて、「こっちを見ろと言っているんだ！課長命令が聞こえないのか！」と、声を荒げた。

課長の剣幕に周囲の課員は恐る恐る緊縛されて永井課長からいたぶりを受ける女性市長の方に目を向けた。

「この女わな！こんな所にピアスを入れて喜んでいる変態女なんだ！」

股間を挟っていた縄を押し広げ、二本の縄に挟まれていた肥大化したクリトリスを剥き出しにして、付根に穿たれたピアスリングに指先を掛けて引っ張った。

突然クリピアスを引っ張られて激痛にウツ！と叫んだ。

「お前達はこんな変態女の命令を有難がって聞いていたんだぞ！恥ずかしいと思わないか？！」

リングをクイックイッと引っ張り理沙に悲鳴を上げさせながら、周囲を見回し大声を上げた。

「ほらほら、こんな所をいじられて感じるんだろう？オコに嵌められた瘤からダラダラ涎が垂れているぞ！このどうしようもないマゾ牝め！」

目敏く女体の変化を見つけられてアーツと呻き声を上げ身悶えた。

何故自分の身体は何時も自分を裏切って恥ずかしい反応をしてしまうのだろうか！自分は本当にマゾ牝に墮とされてしまったのだろうかーと、悪魔たちに改造された自分の身体を呪った。

中指の先でヌルヌルに濡れ輝る膣孔に埋められた瘤をクイクイと押し上げた。荒くれた縄の塊が柔肉に食い込んで来る感触に思わずアーツと声を上げた。

散々瘤の表面を撫でまわし、淫液に濡れ輝る指先を瞳に怯えを浮かべる理沙に見せ付けた後、肥大したクリトリスの上にたっぷりと塗り付けた。

敏感な神経を散りばめた個所に自ら分泌した粘液をヌラヌラと塗り立てられる痛切な刺激にムクムクと充血し元々巨大に改造されていた女核は更に大きく膨張し始めた。

その反応に気を良くした永井は何度も粘っこい蜜を掬い取っては丹念に赤く充血した肉の豆の表面に塗りつけた。膨張した肉芽は両側から挟む麻縄の圧力を強く受ける様になって再び切ない呻き声を上げて腰を震わせた。

理沙を暫く苦しめていた永井は、椅子に掛ける一人の男性職員の方に向かった。

「おい！島！お前はこんな下らない女の命令に従ってこんな目に遭ったんだろう！」

島と呼ばれた男が理沙の方に顔を向けた。

顔全体が青黒く腫れあがり特に右目の瞼の上の瘤になった腫れはほとんど目を塞いでしま
いそうであった。

顔中何カ所も絆創膏を貼っていたが痛々しい内出血の跡は隠しようが無かった。

自分が宮藤の調査を依頼したばかりにそんなリンチを受けたのだと思って胸がキリキリ痛
んだ。

「島！お前、自分をこんな目に遭わせたその女が憎いだろう？」

無言で目を伏せる島の身体に手を掛けて椅子から無理やり立ち上がらせた。

顔と同じように全身に打撲を負っている様で、あるいは骨折しているかも知れない不自由な
身体で脚はびっこを引きながら永井に支えられて理沙の前に連れて来られた。

「島！お前この女に恨みを返したいと思っているだろう？」

「・・・」

無言のまま俯く島の顔を覗き込む様にしながら、「良いさ！お前に仕返しするチャンスをや
る！」と、言うも自分の席に戻って足元から乗馬鞭を取り出して来て島の手握らせた。

「さあ！これで恨みを晴らすんだ！」

乗馬鞭を握る島の前に罪人のように理沙は跪いた。

慙愧の念に駆られた理沙は本心から島の制裁を受けようと足元に身体を折ったのだ。

永井の威圧に屈服した島は鞭を振り上げ理沙の背を叩いた。

「何だ！そのやる気の無い叩き方は！」

鞭を手にしたまま棒立ちの島に怒鳴りつけた。

永井の剣幕に圧され、「市長！済みません！」と涙を流しながら鞭を打ち下ろした。

「済みませんじゃ無いだろう！もっと真面目にやれ！」

永井に威圧され何度も鞭を振り下ろした。

その都度理沙は「島さん、御免なさい！」と詫び続けるのであった。

それは島の暴力に対して詫びているのではなく、課長から強制され心ならずも打擲を加えな
ければならなくなった島の心の痛みにたいして詫びているのであった。

「もういい！」

力の無い島の鞭打ちに苛立って鞭を取り上げた。

「まあ・・・お前は両手を怪我しているから仕方ないな・・・」

と、島の方を睨んでニヤッと薄気味悪く笑った。

「お前は独身でモテないから彼女もいないだろう・・・毎晩自分で処理するしか無かったんじ

ゃないか？」

島の肩に手を当てて顔を覗き込みながら口にした。

「しかし、両手の怪我でマスも搔けない・・・最近悶々としてたんじゃないか？」

と、卑猥に顔を歪めると島の前に身体を屈めズボンのチャックをサッと降ろした。

「アッ！課長止めて下さい！」

突然の永井の行動に驚いた声を上げた。

「全く部下の下の世話までしなきゃならないなんてまるで保育園の保父さんだぜ・・・」

島の狼狽も無視してパンツの奥から陰茎を引きずり出した。

「さあ！市長さん、責任を取って部下の処理をしてやって下さい！」

島の前に跪く理沙に向かってフェラチオをするように命じた。

「ああ・・・島さん・・・貴方にこんな恥ずかしい思いをさせる理沙を許して・・・」

呻くように言うと顔面を島の股間に押し当てた。

動揺して委縮する男根は僅かにその先っぽをパンツから覗かせているだけだった。

両手を後手に縛り上げられ口を使うしかない理沙はその先端を口に含み吸い出す様にパンツから引き出すしか無かった。

皮を被った陰茎の先からツンとする小便臭い匂いが鼻先を衝いた。

「アアッ！市長！」

突然温かく濡れたもので先端を覆われた刺激にまるで電気に触れたように腰をブルブルと震わせた。

懊悩する島に心の中で詫びながら徐々にそれを引き出して行った。

最初は固さの無い一切れの肉の塊を口の中でコロコロと転がしているような感じだったが、悪鬼達により鍛えられた口を使った技術を受けて次第に力が漲って行くような感じがした。

「ああ・・・市長いけません！いけません！」

恐らく口技を受ける島自身が自分の肉体の変化に気付いたのだろう。自分の性器で市長の口を穢している事を恐れるように大声を出し続けた。

今や周囲の職員は強制されずとも血走った目で全裸の女性市長が男性職員をフェラする様子を見詰めていた。

誰の目にも島の男のモノが強く逞しく成長しピクピクと脈打っている様子が分かった。

すぐ傍でその様子を眺めていた永井は、（今はまだ職員は市長に遠慮や同情して受け身になっているが、この楽しさを知れば嬉々として市長を虐待する側に回るだろう）と、その時の

様子を想像した。

「アアーッ！市長！もうダメです！ダメです！」

口に啞えながら上目遣いで様子を見ていた理沙は島の絶頂に近い事を感じていた。

宮藤や根津の様な絶倫の男とは比較にならず、ただの素人の島なら鍛えられた理沙のテクニックの前で数分堪えることも出来ないだろう。

市長の口腔内に精液を放出する事に冒瀆的な恐怖を感じ、必死でその瞬間をこらえる島が可哀そうになって、一旦口から外すと、「良いのよ、島さん、来て」と、下から蠱惑的な瞳で見上げ艶然と微笑んだ。

理沙の言葉につられ我慢の堰を切った島は、再び含まれた口の中に激しく噴射した。

その大量の熱い奔流にウッと一瞬呻き声を発したが、ゴクゴクと喉を鳴らしてその粘つくモノを飲み下し、いまだに熱く硬化したままの島のモノを舌先で拭った。

その気持ち良い刺激に腰が二度三度痙攣し、その都度少量の男液を放出したが、優しく受け止め、最後には尿道内に残った残液を吸り上げた。

強烈な刺激に脳が溶け落ちたように理沙の口内に男のモノを預けたままブルブルと腰を震わせ呆然と立ち尽くしていた。

その様子を見届けた永井が手を叩いて大笑いを始めた。

「皆見たろう！この女は見ての通り男狂いの色情狂なんだ！男無しでは一瞬もいられない色気違いなんだ！お前達は今までこんな阿婆擦れ女に傳っていたんだ！悔しいとは思わないか？」

「えーっ、おい？」と、近くの女性職員の肩を叩いた。

女性職員は泣きはらした顔を上げて席を立つと、

「私は市長を恨みます！いいえ、呪います！市長が来るまでここは酷い職場でしたけど、市長が来てから本当の地獄になってしまいました！」

ヒステリックに泣き叫びながら永井から受け取った鞭を狂った様に振り続けた。

正気を失って泣きわめく女子職員の前に跪く理沙は全身に鞭を浴びていた。

号泣する女子職員の振り下ろす鞭は痛くなかったが、自分の青臭い正義感が地獄の冥王を目覚めさせてしまい本当の地獄を作り出してしまった一と、慙愧の念に駆られ激しく心が痛むのだった。

市長室に連れ戻され市長机の上に仰向けに横たえられていた。

凄まじい羞恥の嵐に晒され、既に流す涙は涸れ果て、ただ止むことの無い嗚咽に肩を上下させていた。

蛇沼が未だに興奮の治まらない理沙の顔を濃いサングラスの奥から覗き込みながら、「あれだけ生き恥を晒せばもう怖い物は無いでしょう？矢でも鉄砲でも持って来いーて、度胸が付いたんじゃないですか？」

と、薄い唇に嗤いを浮かべて言った。

「さてと、明日から私の調教室に連れ込み一から鍛え直す訳ですが、その前に今日の最後としてこの女の性感を確認しておきたいのです」と、散々打ちひしがれた理沙をなおも責め立てるように口にした。

まだ胸と股間に縄を掛けられたまま仰向けに寝かされていた理沙であるが、蛇沼は腰の縄を解き始めた。

深々と媚肉の狭間を割っていた股縄が緩められ、蛇沼の手により持ち上げられた縄の瘤と秘孔の間に粘っこい橋が架けられた。

机を取り囲んで覗き込む宮藤や蛭沢も目を見張って濡れそぼってポカリと口を開けたままの肉の祠を見詰めた。

その周囲は荒くれた縄に擦られ赤く腫れていたが、縄の瘤の感触を十分に楽しんだ秘孔は快感の露にグッシヨリと濡れていた。

「ふふ・・・後ろの穴も開いたままですよ・・・余程気持ち良かったんですね」

股間を厳しく縛っていた縄を取り去りながらクククと含み笑いをした。

「まあ、これで市長が前の穴も後ろの穴も鋭敏な性感を持っている事が確認できました」

「女の身体と云うのは全身性感の塊で、髪の毛から爪の先まで性感を持っています」

周囲を取り囲む男達にまるで講義をするように話し始めた。

「この性感の中には部位によって強い性感や弱い性感、敏感な性感や鈍感な性感に分かれます・・・例えばクリトリスや乳首は強くて敏感な性感です・・・私がこれから確かめてみたいのは、どちらかと言うと強い性感でも鋭敏な性感ではありません。しかし、そこを鍛えれば女にはもっと別のエクスタシーを与えることができます」と、口の端に卑猥な笑みを浮かべた。

蛇沼が取り出したのは割り箸位の太さの木の棒の先に直径 1~1.5 センチくらいの白いゴム

球の様な物が付けられた珍妙な道具であった。

「何だ、それは？」

宮藤も始めて目にする奇妙な器具に思わず質問した。

「ふふ・・・これはね、これから開発する性感を鍛えるための道具なのですよ・・・」

先端のゴム球をプニプニ押しながら、「この先端のシリコンゴム、柔らかくて猫の肉球みたいでしょう」と薄笑いを浮かべた。

そして、しどけなく開いた大腿の間の今だにポカリと口を開けたままの肉孔にスルスルとゴム球の付いた棒を押し入れて行った。

疲労困憊した理沙には脚を閉じる気力さえ残されていなかった。

何かが膣孔に潜り込んで来ることは判ったが、日頃突き立てられる野太い筒具と違い、細い棒だったので苦痛を感じることは無く、激しい疲労感で抵抗の気力も失われていたので蛇沼の任せるままにしていた。

「この膣内というのは性感が筒状になっているようなもので、特に有名なのは G-スポットですが、今日調べるのは G-スポットでは無く、もっと奥の方です。子宮口がまるで出臍の様に膣内に飛び出している部分がありますが、その周辺が今日調べようとする性感帯なのです」蛇沼の言葉が終わらない内に、先端のゴム球が子宮の入り口にコツンと当たるのを感じた。道具が^ま的を捉えた事を認識した蛇沼は右手で掴んだ棒を小刻みに動かし、コツコツと一定のリズムで突き始めた。

柔らかいゴムの先端が差して強くない力で子宮口の周りを突くだけだったので、何ら苦痛も感じない理沙であった。

日頃気味の悪い巨大な淫具に責め立てられ脂汗を浮かべて呻吟する理沙にとっては、まさに痛くもかゆくもない責めと云えた。

相変わらず蛇沼は単調な一定のリズムで操作し続けた。

「ふうああ・・・」

不意に理沙の口から甘い息が漏れた。

蛇沼の突き立てる周辺から何かやるせない感覚が登って来たのだった。

「ようやく貴女の鈍感な性感もお目覚めのようなですね・・・」

単調なリズムで突き続けながら、理沙が突然示した反応に満足したように口にした。

突然女の身体の中で発生した不可思議な感覚は蛇沼の操作に煽り立てられ次第に大きなものとなって行った。

「ああ・・・いや・・・」

甘い声を上げて、切なげに腰を振った。

「ふふ、感じ始めましたか？まだまだこんなものじゃありませんよ・・・」

不敵に微笑むと左の掌を理沙の真っ白い腹の臍から僅かに下の位置に押し当てた。

グゥーと掌に力を込めて押し下げた。

「フウアー！」と、甘い悲鳴の様な声が上がった。

蛇沼が腹の上から押したのは子宮の真上であった。蛇沼はまるで子宮を体外に押し出す様に圧力を加えた。

その押圧と子宮口を責める動きが連動して理沙に明確な性感を意識させるようになった。

突然身悶え始めた理沙の反応に目を見開く男達に、「ポルチオ性感と言うのですよ・・・女は子宮口の周りにも性感を持っています。ただし鈍感なので性感を起動させるには多少時間を要しますが、一度火が付くと激しい性感が持続します」と、相変わらず一定のリズムで突き立てながら、表情を変えず解説した。

「流石は花和會が誇る凄腕女体調教人だぜ！」

最初は綿棒の大きいヤツ位に高を括っていた宮藤達もその効能に目を見張りだした。

突然下腹から発生した不可思議な感覚に恐怖感を抱いた理沙は、「イヤー！止めて！」と悲鳴を上げた。

「まだまだ、これから貴女を天国にお連れしますよ・・・」と、腹の上から子宮をマッサージしながら突き続けた。

フウフウフゥと、今や明確な性感となったジンジンと突き上げる刺激に呼吸が早まって行った。

「まだまだ・・・」と子宮を体外に絞り出すようなマッサージを腹の上から加えながらポルチオ性感を責め立てた。

これまで経験した事の無い身体の奥底からモリモリ持ち上がって来るような感覚に、この未経験の感覚が何時までそしてどれだけ高くまで続くのだろうと思うと恐怖を掻き立てられ、蒼褪めた貌で、「もう、止めてー！止めてー！」と身体を震わせて泣き叫んだ。

それは、普段経験する急激な刺激が津波のように押し寄せる感覚で無く、グラグラと足元の地面が揺れるような感覚であった。

（ああ・・・イク・・・このまま・・・もう直ぐイク・・・）

かつて経験した事の無い不可思議な感覚の中で自分は絶頂に達することを意識した。

「ハウウウウ・・・ハアアアア・・・アアッ・・・」

急所を責められた時の急激に迎える絶頂とは違う絶頂感に身悶える理沙を取り囲む男達は絶句した。

「これがポルチオセックスによる子宮イキと云うヤツです・・・急激に登りつめて短い時間で醒めて行く絶頂感と違って、絶頂が長く続くのです」

理沙はこれまで根津や様々な男に責められ、何度も連続する絶頂を経験した事があった。

その時は鋭い絶頂感の間に弛緩する時間があった。絶頂の山で呼吸が止まっても、弛緩する谷で不足した空気を体内に吸い込むことが出来た。しかし、今回は絶頂の山に登ったきり何時までも降りて来る気配が無いのだった。

これまで加虐者から与えられた連続絶頂は、例えば短距離走を連続して何度も走らされているようなものだった。

全力で100メートルを無呼吸で走り切っても次に走らされるまでは僅かな時間があり体内に酸素を取り込むことが出来た。

しかし、今は走っても走ってもゴールに達しないまま無呼吸で全力疾走しているような感じであった。

陸に打ち上げられた魚の様に口をパクパクさせたが、酸素が体内に入って来る気配が無かった。

体中の酸素が失われて行く中で、取り囲む男達の嘲笑を浴びながら視界が黒く塞がって行った・・・

逃走失敗

宮藤の運転で自宅マンションまで送り届けられ、もう一つの牢獄である自宅に押し込められた。

「明日の朝からは市役所じゃなくて花和會の調教場に連れて行くからな。

今日は疲れただろうから明日からに備えて身体を休めておけ」

ドアの隙間から顔を出す様にしてそう言い残すと、バタンと冷たい音がしてドアが閉じられた。

一旦ドアが閉じると内側から開けることは出来ない。

部屋の各窓も固定されていて開けることも出来ない。

更に部屋の中には何カ所も監視カメラが仕掛けられており自分の一挙手一投足まで監視者の目に筒抜けであった。

まさに脱獄を許さない独房に閉じ込められたも同然であった。

一人部屋の中に取り残されると今日受けた虐待の数々が繰り返し頭の中に浮かび上がった。その恥ずかしさ惨めさに苛まれながら、もう今の自分にはどうすることも出来ないという敗北感に打ちひしがれた。

宮藤は自分の事を花和會で販売するポルノビデオに出演させると言っていた。

ビデオ出演の前に購入者が喜ぶ演技が出来るように演技指導という名目の女体調教をするというのだ。

明日の早朝には宮藤が迎えに来てその恐ろしい調教が始められるのだ。

一方で心の中の声が呼び掛け始めていた。

(もうそんなことはどうでも良い・・・自分は完全に汚された女なのだから、このまま腐臭を放つ男の精液に埋もれて朽ち果てれば良い。それよりも痛ましいのは、既にポルノ俳優とされてしまい恥ずかしい艶技を強制されている矢田恵と草刈民雄の二人だ)

自分の事はどうあれ二人を救出しないといけないと胸が痛くなった。

(しかし、どうやって?)

どうにかしてこの牢獄と化したマンションを抜け出し、通りに出て流しのタクシーを拾うか、通りかかった車に助けを求めることが出来れば――

S市警察署は根津の影響下にあるようだから助けを求めることは出来ないが、S市から無事脱出できればチャンスはある――と考えた。

(しかし、どうやって監視の目を潜り抜けてここから脱出するか?)

理沙は考え得る知恵を巡らせて考え抜いた。

日本の住宅の給電設備は米国などと比べると貧弱であり、普通なら家の全ての電気製品を同時に使用するとブレーカーが落ちる。

ブレーカーが落ちれば当然監視装置も使えなくなるだろう――と、考えた。

(監視装置が使え無くなれば、当然隣や階下から監視していた花和會のヤクザが点検にやって来るだろう。ドアを開いて入って来た隙に外に出られれば脱出することが出来るかもしれない)

理沙はなるべく監視者に怪しまれない様に各部屋の電灯と空調装置を点けて回った。

テレビを点けて演技の勉強をしろと宮藤から渡されたディスクを再生した。

風呂に入る振りをして、湯沸かし器を起動してバスタブに湯を張り始めた。

家の中で最も電力を消費するのは台所である。

軽食を用意する振りをして冷凍庫から冷凍食品を取り出し電子レンジに入れた。

フライパンを電磁式コンロに置いてスイッチを入れ、電気ケトルのスイッチを入れた時に予想していたようにブレーカーが飛び、部屋中真っ暗になった。

台所から包丁を取り出すと暗闇の中を進み玄関ドアの横に身を潜めた。

後は扉を開けて入って来る男を手にした包丁で刺すだけだ。

女の力では刺し殺すことは出来ないだろうが、不意を突かれて包丁で切り付けられ怯んだすきに逃げ出せばよい。

後は外の通り迄逃げられれば、通り掛かる車に救助を求めるだけだ。

暗闇の中で緊張にブルブル震えながら包丁を握り締め、やって来るはずの男を今か今かとジリジリする思いで待った。

しかし、誰も近づいて来る気配が無かった。

その時頭の上から根津の声が響いた。

「無駄や！監視装置の電源は部屋の電源と別系統や！部屋のブレーカーを落としても監視装置は生きている。暗闇でも見えるカメラでお前の姿は良く見えてるでえ」

勝ち誇ったような笑い声が天井から聞こえて来た。

全ての努力は無駄であった！と、敗北感に打ちのめされた理沙が、「イヤァッ！殺して！いっそ一思いに殺して！」と悲痛な声で泣き叫んだ。

「殺しはせん・折角、多良古を破って市長に当選したんや。任期を全うして儂の為に一所懸命働くんや！無論辞職も認めんでえ・・・」

悲痛な叫び声を上げ身悶える理沙の姿を監視装置のモニター越しに冷酷な目で見詰めてケラケラ嗤いながら宣告した。

万事窮したと覚悟した理沙はブルブル震える手で包丁を握り締め自分の喉に押し当てた。

「自殺も許さん！お前が死んだら残された二人はどういう目に遭うか考えろ！」

恐ろしい根津や花和會の手に落ちた民雄と恵の姿が脳裏に浮かんで力無く包丁を放した。

（最早全ての希望は奪い去られ、残忍な男達の手で無残に弄ばれるだけの完全な奴隷に墮とされた・・・）と、死刑宣告より恐ろしい根津の言葉に心が暗く押しつぶされて行った。

< to be continued >